

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第71集

A SO HARA UE

阿蘇原上遺跡

主要地方道緒方高千穂線(笹の都工区)緊急地方道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

A SO HARA UE

阿蘇原上遺跡

主要地方道緒方高千穂線(笹の都工区)緊急地方道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、主要地方道緒方高千穂線緊急地方道路整備事業に伴い、阿蘇原上遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、後期旧石器時代から弥生時代を中心とする遺構・遺物が検出されました。特に、後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺物は、旧石器時代から縄文時代への移行を推察できるような資料であり、急激な環境変化に対応して生活を営んでいた当時の人々の暮らしを知ることのできる貴重な発見となりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、ならびに地元の方々から心からの謝意を表します。

平成15年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 米良弘康

例 言

1. 本報告書は、主要地方道緒方高千穂線緊急地方道路整備事業に伴い宮崎県教育委員会が行った阿蘇原上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、調査当初より「笹の都遺跡」と呼称し、関連諸文書でも「笹の都遺跡」と扱ってきたが、調査区域の字名は「阿蘇原上」であり、整理段階より「阿蘇原上遺跡」と変更した。
3. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査は平成12年10月2日から平成12年12月14日まで行った。
5. 現地での実測・写真撮影等の記録は主に甲斐貴充・松本茂・安楽哲史が行い、空中写真撮影は(株)九州航空に委託した。
6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。石器実測の一部は(株)九州文化財研究所に委託し、その他図面の作成・実測・トレースは甲斐貴充・松本茂が整理補助員の協力を得て行った。
7. 本書で使用した第1図「阿蘇原上遺跡の位置と周辺遺跡図」は高千穂町役場発行の5万分の1図を基に、第2図「阿蘇原上遺跡周辺地形図」は宮崎県発行の高千穂町上野村森林基本図を基に一部変更して作成した。
8. 土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。
9. 本書で使用した方位は、主として座標北(座標第Ⅱ系)を使用している。その他「M.N.」と記載しているものは磁北(磁針方位は西偏約6.5°)である。レベルは海拔絶対高である。
10. 本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて以下のように統一している。

集石遺構(SⅠ)…1/30 縄文土器…1/3 弥生土器…1/4

石器…1/1・2/3・1/2

11. 本書の執筆は、第Ⅰ章-1は松林豊樹(県文化課)、その他の執筆と編集は甲斐と松本が行った。
12. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	(松林) 1
第2節	調査の組織	(甲斐) 1~2
第3節	遺跡の位置と環境	(松本) 2~5
第II章	調査の概要	6~54
第1節	調査の経過	(甲斐) 6
第2節	基本層序	(甲斐) 7~8
第3節	阿蘇原上遺跡における石器器種および使用石材の分類基準	(松本) 9
第4節	阿蘇原上遺跡における遺物・遺構の出土状況	(松本) 10~12
第5節	第XI層・第XII層の調査	(松本) 13~15
第6節	第VIII層~第X層の調査	(甲斐・松本) 16~49
第7節	第VI層~第VII層の調査	(甲斐) 50~54
第III章	まとめ	(松本・甲斐) 54~63

挿図目次

第1図	阿蘇原上遺跡の位置と周辺遺跡図 (1/60,000)	4
第2図	阿蘇原上遺跡 周辺地形図 (1/2,500)	5
第3図	阿蘇原上遺跡 グリッド配置図 (1/250)	6
第4図	阿蘇原上遺跡 北壁土層堆積状況図 (1/40)	8
第5図	阿蘇原上遺跡 第XI層・第XII層遺物出土状況図 (1/200)	11
第6図	阿蘇原上遺跡 縄文時代草創期主要遺物出土状況図 (1/200)	12
第7図	第XI層出土遺物〈細石刃核・土器〉 (1/1)	13
第8図	第XI層・第XII層出土石器 (2/3)	14
第9図	第XII層出土石器 (1/2)	15
第10図	第X層上面検出状況図 (1/250)	16
第11図	集石遺構 (1/30)	17
第12図	第VII~X層出土土器①(第I群) (1/3)	18
第13図	第VII~X層出土土器②(第II群) (1/3)	19
第14図	第VII~X層出土土器③(第II群) (1/3)	20
第15図	第VII~X層出土土器④(第II群) (1/3)	21
第16図	第VII~X層出土土器⑤(第II群) (1/3)	22
第17図	第VII~X層出土土器⑥(第II群) (1/3)	23
第18図	第VII~X層出土土器⑦(第II群) (1/3)	24
第19図	第VII~X層出土土器①(細石刃核) (1/1)	27
第20図	第VII~X層出土土器②(細石刃核・細石刃) (1/1)	28
第21図	第VII~X層出土土器③(尖頭器) (2/3)	30

第22図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器④	〈両面調整石器〉 (2/3)	31
第23図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑤	〈両面調整石器〉 (2/3)	32
第24図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑥	〈石鏃〉 (2/3)	33
第25図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑦	〈石鏃・尖頭状石器〉 (2/3)	34
第26図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑧	〈尖頭状石器・楔形石器〉 (2/3)	35
第27図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑨	〈楔形石器・石匙〉 (2/3)	36
第28図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑩	〈削器〉 (2/3)	38
第29図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑪	〈削器・搔器・搔削器〉 (2/3)	39
第30図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑫	〈彫器・二次加工有る剥片〉 (2/3)	40
第31図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑬	〈剥片〉 (2/3)	42
第32図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑭	〈剥片〉 (2/3)	43
第33図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑮	〈石核〉 (1/2)	44
第34図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑯	〈石核〉 (1/2)	45
第35図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑰	〈石核〉 (1/2)	46
第36図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑱	〈石核〉 (1/2)	47
第37図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑲	〈削器・磨石・台石〉 (1/2)	48
第38図	第Ⅶ～Ⅹ層出土石器⑳	〈敲石・磨石〉 (2/3)	49
第39図	第Ⅶ層上面検出状況図	(1/250)	50
第40図	第Ⅵ～Ⅶ層出土石器①	〈第Ⅲ群〉 (1/3)	51
第41図	第Ⅵ～Ⅶ層出土石器②	〈第Ⅲ群〉 (1/3)	52
第42図	第Ⅵ～Ⅶ層出土石器③	〈第Ⅲ群〉 (1/3)	53
第43図	第Ⅵ～Ⅶ層出土遺物	〈第Ⅳ群・石器〉 (1/4) (1/2)	54
第44図	阿蘇原上遺跡	後期旧石器時代から縄文時代草創期出土遺物の様相	59
第45図	阿蘇原上遺跡	縄文時代早期押型文土器分類図 (1/3)	61

表 目 次

第1表	石材毎にみた出土遺物の層位別点数・重量	25
第2表	器種毎にみた出土遺物の層位別点数	26
第3表	出土石器観察表①	64
第4表	出土石器観察表②	65
第5表	出土石器観察表③	66
第6表	出土石器観察表④	67
第7表	出土石器観察表⑤	68

図 版 目 次

図版1	①阿蘇原上遺跡遺景	69
図版2	①調査区全景 (第Ⅶ層上面検出時)	70

図版 3	①第Ⅶ層上面検出状況／②第Ⅷ層上面検出状況…………… 71 ③S I 2 検出状況（北東側から）／④S I 3 検出状況（南西側から）／ ⑤S I 1 検出状況（調査区北壁を背景に）／ ⑥第Ⅶ～Ⅹ層遺物出土状況（調査区東側）
図版 4	①第Ⅹ層出土細石刃核と土器（I B類）／②第Ⅹ層出土土器／…………… 72 ③第Ⅹ層出土土器（石核）／④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（I A類） ⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（I A類）／⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（I B類）／ ⑦第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（I B類）／⑧第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（I C類）
図版 5	①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II A1類）／②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II A2・II A3類）／…………… 73 ③第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II A4類）／④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II A4類）／ ⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II A5類）／⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II B1・II B2類）／ ⑦第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II B3類）
図版 6	①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II B3類）／②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II B4類）／…………… 74 ③第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II B4・II B5類）／④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II B6類）／ ⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II C類）／⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II D1・II D2類）／ ⑦第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（II D3類）
図版 7	①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（細石刃核①）／②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（細石刃核②）／…………… 75 ③第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（細石刃核③）／ ④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（細石刃核④・細石刃）／ ⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石槍①）／⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石槍②）
図版 8	①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（両面調整石器①）／…………… 76 ②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（両面調整石器②）／③第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石鏃①）／ ④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石鏃②）／⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石鏃③）／ ⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石鏃④・尖頭状石器①）
図版 9	①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（尖頭状石器②）／…………… 77 ②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（楔形石器①）／ ③第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（楔形石器②）／ ④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石匙・削器①）／ ⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（削器②）／⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（削器③・撞削器）／ ⑦第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（彫器）／⑧第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（二次加工有る剥片）／
図版 10	①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（剥片①）／②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（剥片②）／…………… 78 ③第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石核①）／④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石核②）／ ⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石核③）／⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石核④）／
図版 11	①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石核⑤）／②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石核⑥）／…………… 79 ③第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（石核⑦）／④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（削器・敲石①）／ ⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（台石）／⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器（敲石②・磨石）
図版 12	①第Ⅵ～Ⅶ層出土土器（III A1・III A2・III A3類）…………… 80

②第VI~VII層出土土器 (ⅢA4・ⅢA5・ⅢA6類)

③第VI~VII層出土土器 (ⅢB1類①) / ④第VI~VII層出土土器(ⅢB1類②) /

⑤第VI~VII層出土土器 (ⅢB1類③) / ⑥第VI~VII層出土土器(ⅢB1類④)

図版13 ①第VI~VII層出土土器 (ⅢB1類⑤・ⅢB2類) / ②第VI~VII層出土土器(ⅢB1類⑥)…………… 81

③第VI~VII層出土土器 (Ⅳ類) / ④第VI~VII層出土石器 (打製石斧・石鏃)

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県では、高千穂町内の交通緩和と交通網整備の一環として、平成7年から県道緒方高千穂線改良工事を進めている。

県文化課では、平成12年度以降の事業予定地内において遺跡が影響を受ける可能性が考えられたため、平成11年8月9日～11日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、縄文土器・チャート製剥片等が出上した。試掘調査の結果を受けて、県文化課と埋蔵文化財センターは西臼杵支庁土木課と協議を行い、平成12年度に発掘調査を実施した。

整理作業は調査年度から平成14年度まで継続して行い、今回の報告書作成に至った。

第2節 調査の組織

(平成12～13年度) 阿蘇原上遺跡 調査 (H12年度)・整理 (H13年度)

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊地 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
同 主 事	甲斐 貴充
同 調査員	松本 茂 (平成12年度)
同 調査員	安楽 哲史 (平成12年度)

(平成14年度) 阿蘇原上遺跡 整理・報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大箇 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	野邊 文博
調査第一課調査第一係長	菅付 和樹
同 主任主事	甲斐 貴充
調査第一課調査第一係 主事	松本 茂

第3節 遺跡の位置と環境 (第1図・第2図)

高千穂町は、九州島のほぼ中央部、宮崎県北西部端に位置し、熊本県・大分県と県境をもって隣接している。その町域は、北方から東方を祖母山系に、西方を阿蘇外輪山、そして南方を椎葉連山に囲まれた九州山地中の盆地を中心に展開している。面積は237.39km²を測り、そのうち実に82.9%を山林原野が占める環境にある。盆地の北西から南東にかけて五ヶ瀬川が流れ、これに注ぎ込む多数の支流が町域を刻んでいる。五ヶ瀬川が形成する溪谷とあわせ、これら大小河川の浸食による起伏に富んだ地勢が当地の景観の基調を成している。こうした環境もあってか、これまでに町内から発見された諸遺跡は、かなりの急斜面上に立地する傾向が通時代的に窺われる。阿蘇原上遺跡は、町域北東部に南流し五ヶ瀬川に合流する岩戸川の流域中ほど、土呂久川との合流地点に位置する(第1図-1・第2図)。本遺跡の立地も多聞にもれず、河川に東面した急斜面上に展開する。標高はおよそ334mを測る。

阿蘇原上遺跡の周辺では、発掘調査例こそ少ないが、幅広い時代にわたる遺跡が数多く確認されている。以下、隣接する行政区域も含めた当該地域の歴史的環境について、年代順に略説することにした。**■旧石器時代** 高千穂町内に限定すると、旧石器時代の様相は未だ詳らかではない。これまでに旧石器時代に属する可能性が指摘されたものとしては、三田井に所在する宮ノ前第2遺跡(第1図-2) B地区10号住居(弥生時代後期-終末期)の埋土中から検出された剥片尖頭器が挙げられる(文献1)。いわゆる阿蘇山黒曜石(阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩;文献2)を用いたものであり、剥片尖頭器であるとすれば、町内唯一の後期旧石器時代遺物となるが、基部付近の加工が通常のものと若干様相を違え、検討の余地を残す。このほか、今回報告する阿蘇原上遺跡第Ⅷ層および第Ⅺ層出土遺物の一部が後期旧石器時代の所産である可能性が高いが、指標的なツールの存在を欠き、様相は不明瞭といわざるをえない。

とはいえ、五ヶ瀬川流域に視野を広げれば、該当する数多くの遺跡が挙げられる。日之影町見立に所在する出羽洞穴第8層を筆頭に、北方町菅原洞穴・東ノ内・岩上原第3文化層など、古くに調査がなされた遺跡(文献3, 4, 5)にくわえ、最近では始良Tn火山灰(以下ATと略記)降下層準の上下から後期旧石器時代の石器群が層位的に出土した矢野原(文献6)や慈眼寺霊園・古城(文献7)などの諸遺跡が特筆される。さらに下流の延岡市にも、瀬戸内系の石器群が確認された赤木遺跡(文献8)をはじめ片田遺跡(文献9)などがAT上位から、畑山・今井野・吉野・黒上田の各遺跡からはAT下位からも石器群の出土をみている(文献10)。

これらの遺跡からの出土資料を総合すれば、AT下位黒色帯直下の褐色土層から検出された矢野原遺跡第Ⅰ文化層を最古として、AT下位黒色帯上部の石器群、AT直上の石器群、瀬戸内系石器群、剥片尖頭器や角錐状石器を伴う石器群、大分県岩戸遺跡6層上部に対比される終末期の基部加工ナイフ形石器(文献11)の一群、縄文時代草創期に連なる細石刃石器群にいたるまで、九州島内にこれまでに知られている諸編年段階の石器群のほぼ全てが五ヶ瀬川流域で確認されていることになる。上流域にあたる高千穂町内の後期旧石器時代の様相を解明することは、こうした意味からも意義深い課題といえる。

■縄文時代 縄文時代になると、前時代と一転して高千穂町内における人類の生活痕跡は豊富になる。縄文時代草創期では出羽洞穴第3層に対比される岩戸五ヶ瀬村遺跡(第2次調査;第1図-3)出土の尖頭器が候補に挙がるほか、高千穂町コミュニティセンターや天の岩戸神社徴古館に収蔵・展示されて

いる資料のなかにも、当該期の所産と思しき尖頭器や石斧が見いだされる。柳又型有舌尖頭器の南限とされるセベット遺跡（第1図-4）では、原位置遊離資料ながら基部付近に敲打痕を残す円ノミ形石斧の存在も確認されている。このほか、中ノ原遺跡（第1図-5）から隆帯文土器と推定される土器の出土がある。

縄文時代早期では、押型文土器が表面採集された薄糸平遺跡（第1図-6）のほか、岩戸五ヶ村・南平第4（第1図-3、7）などの遺跡があり、前期にも森B式土器が出土した押方C遺跡（第1図-8）や陣内遺跡（第1図-9）など、いくつかの遺跡が挙げられる。縄文時代後期～晩期の遺跡は、薄糸平・陣内・宮ノ前第2・城ノ平（第1図-10）・吾平原第2（第1図-11）・梅ノ木原（第1図-12）・セベット・南平第3（第1図-13）・中ノ原・神殿（第1図-14）の各遺跡と数多い。陣内遺跡では、西平式・三万田式・御領式土器のほか、石棒・土偶の出土が特筆される。最近では、大郎遺跡（第1図-15）において、縄文時代晩期の無刻目突帯文土器が検出され、新たな資料を追加している。

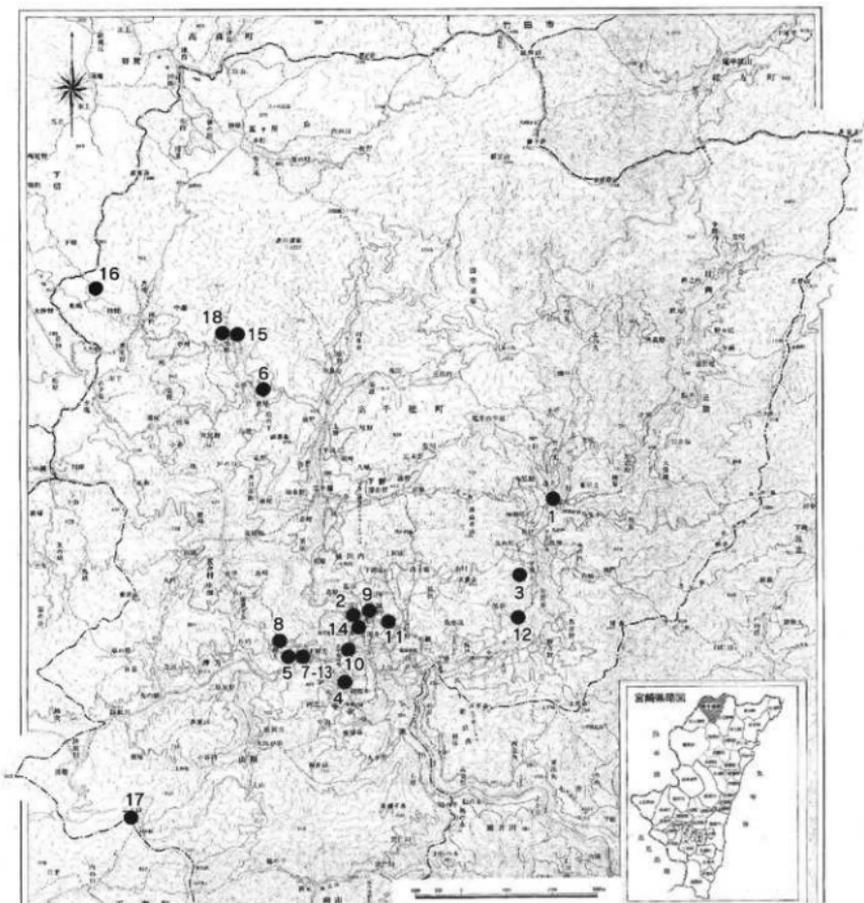
■弥生時代 前期の様相は明らかでなく、中期から後期にかけて遺跡数の増加がみられる。押方周辺遺跡C地点（第1図-8）・薄糸平・吾平原第2・南平第3・神殿A地区（第1図-14）・同B地区（第1図-14）の各遺跡が該当する。南平第3遺跡では、中期末～後期にかけての計26軒の竪穴住居跡が特筆される。

■古墳時代 古墳時代における当該地域の墓制としては、丸山石棺群（第1図-16）などの箱式石棺もみられるが、横穴墓が主流である。横穴墓は、高千穂町全域に分布がみられ、田原・上野・三田井・押方・岩戸の各地区から合計120基以上が確認されている。生活遺構としては、宮ノ前遺跡や神殿C地区遺跡から竪穴住居跡の確認がある。

■古代以降 該当するものには、経塚跡と城跡、寺跡などが挙げられる。経塚跡と推定されるものに、二上山遺跡（第1図-17）において、嘉承2年（1107年）と記された経筒と鏡が出土した記録が「高千穂特別記録文献資料」にある。しかし、現物は所在不明であり確認できていない。また、近年では教塚遺跡（第1図-18）から出土した経筒片が12～13世紀頃のものとして推定されており、高千穂における往時の宗教生活の一端をのぞかせている。

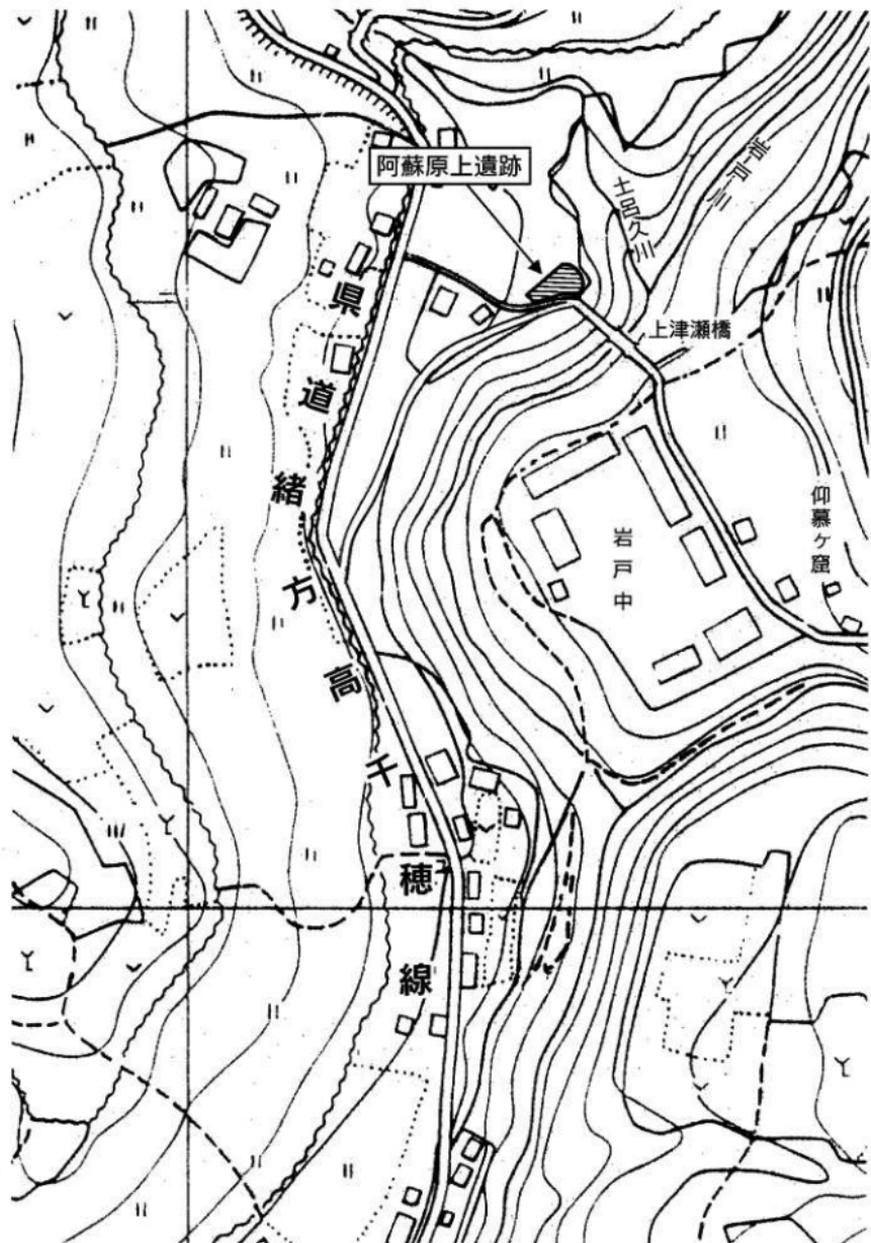
（引用・参考文献）

- 文献1 宮崎県教育委員会 1993『吾平原第2遺跡 宮ノ前第2遺跡 城ノ平遺跡』国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書
- 文献2 小畑弘己・岡本真也・古森政次・渡辺一徳・田口清行 2001『いわゆる「阿蘇産黒曜石」の産地発見とその意義 一阿蘇産々鼻産ガラス質溶結凝灰岩類の発見一』『旧石器考古学』第62号 旧石器文化談話会
- 文献3 鈴木重治1967『8宮崎県見立出羽洞穴』『日本の洞穴遺跡』平凡社
- 文献4 鈴木重治1985『第二章 高千穂周辺と五ヶ瀬川流域』『日本の古代遺跡 宮崎』保育社
- 文献5 鈴木重治1973『宮崎県岩上原遺跡の調査 一土器伴出文化の一例一』『石器時代』第10号 石器時代文化研究会
- 文献6 宮崎県教育委員会 1995『一般国道218号線高千穂バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 打草遺跡・早日渡遺跡・矢野原遺跡・蔵田遺跡』
- 文献7 小野信彦1999『宮崎県北部の中期旧石器時代について』平成11年度宮崎考古学会県北例会発表資料 宮崎考古学会
- 文献8 永友良典1987『赤木遺跡、多々羅遺跡』延岡市文化財調査報告書第3集 延岡市教育委員会
- 文献9 延岡市教育委員会1990『片田遺跡(概報)』延岡市文化財調査報告書第5集
- 文献10 秋成雅博・藤木 聡・松本 茂2000『宮崎県』九州における後期旧石器時代文化の成立』第26回九州旧石器文化研究会資料集 九州旧石器文化研究会・熊本旧石器文化研究会
- 文献11 柳田俊雄1989『九州地方後期旧石器時代の終末期におけるナイフ形石器の形態的特徴』『旧石器考古学』第38号 旧石器文化談話会



- | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|
| 1 阿蘇原上遺跡 | 2 宮ノ前第2遺跡 | 3 岩戸五ヶ村遺跡 | 4 セベツト遺跡 |
| 5 中ノ原遺跡 | 6 薄糸平遺跡 | 7 南平第4遺跡 | 8 押方C遺跡 |
| 9 陣内遺跡 | 10 城ノ平遺跡 | 11 西平原第2遺跡 | 12 梅ノ木原遺跡 |
| 13 南平第3遺跡 | 14 神殿遺跡 | 15 大郎遺跡 | 16 丸山石棺群 |
| 17 二上山遺跡 | 18 教塚遺跡 | | |

第1図 阿蘇原上遺跡の位置と周辺遺跡図(1/60,000)



第2図 阿蘇原上遺跡 周辺地形図 (1/2,500)

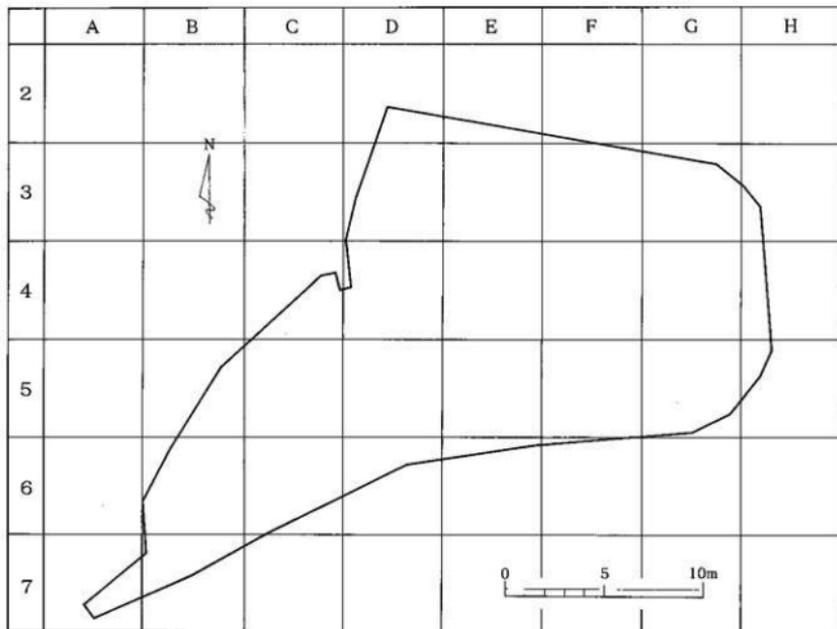
第Ⅱ章 調査の記録

第1節 調査の経過 (第3図)

発掘調査は、文化課が平成11年度に行った試掘調査及び埋蔵文化財センターが平成12年に行った確認調査により数枚の良好な遺物包含層が確認されたという結果をうけて実施した。遺跡の所在地は、西白杵郡高千穂町大字岩戸字阿蘇原上である。調査面積は500㎡である。

調査は、まず重機によって表土及び旧耕作土の除去を行った。耕作土除去の結果、水田基盤層だと考えられる基本層序の第Ⅲ層から、近現代の磁器・縄文土器・石器など幅広い時期の遺物が出土した。水田造成時の造成土などを除去した後、人力によって掘り下げた結果、基本層序の第Ⅵ層より弥生土器片・縄文土器片(黒色磨研系土器)が出土した。さらに掘り進めると、第Ⅶ層よりチャート製剥片主体の石器が、第Ⅷ層～第Ⅹ層より縄文草創期～縄文早期の土器片(爪形文・無文)や尖頭器・細石器・チャート主体の剥片類・集石遺構3基などが検出された。

また、調査時の図面作成に際して、国土座標(XY座標)に乗じた5m単位の区画を設置した。更にこの区画を利用して、5m毎に南北方向は北から南へ1～7・東西方向は東から西へA～Hと割り付けた。この2つの組み合わせ(例えば、「D5区」・「F3区」など)により、調査区域内を5m単位で示すグリッドを設定した(第3図)。



第3図 阿蘇原上遺跡 グリッド配置図(1/250)

第2節 基本層序 (第4図)

阿蘇原上遺跡での基本的な層位を下に記した。調査前地形は耕地であったため水平に近かったのであるが、旧地形は岩戸川に近いために基本層序第VI層以下の層が岩戸川に向かって下り勾配約10%の急傾斜面である。遺跡は、部分的に不安定な堆積を呈するが、調査区域のほぼ全域で基本層序通りの堆積である。第I層は、層厚10cm程度の明褐灰色土 (Hue7.5YR7/1~6/1) で、表土及び最近の耕作土であると考えられる。第II層は、層厚10cm程度の褐灰色土 (Hue7.5YR7/1~5/1) で、第I層と似ているが、酸化による赤変が認められ、最近の水田耕作土と考えられる。第III層は、層厚5~10cm程度のしまりの強い明赤褐色土 (Hue10YR4/2~5/2) であり、全体が酸化によって赤変している。最近の水田基盤層であると考えられる。現代の磁器片やチャート主体の剥片類などが混入している。第IV層は、層厚0~90cmで、ブロック状混入土を多く含む黄褐色土 (Hue7.5YR5/6) である。調査区東側に偏在することより、傾斜地を水平な耕作地にするための造成土であると考えられる。第V層は、層厚0~30cmの明灰褐色土 (Hue7.5YR3/1) である。第IV層同様、調査区域西側に偏在する。調査区東側は第III層の水田形成のために削平されたと考えられる。第VI層は、層厚0~20cmの暗黒褐色土 (Hue2.5Y2/1) で、調査区東側に偏在する。縄文後期~弥生時代の土器・石器を含む包含層である。第VII層は、層厚40~60cm程度の暗~明黄褐色土 (Hue10YR5/8~2.5Y6/6) であり、アカホヤ火山灰層である。上部は二次的な堆積であり、縄文時代晩期の土器・石器類を含む包含層である。第VIII層~第X層は、急傾斜地の堆積のため、調査区東側が分層できない状態で検出された。第VIII層は、層厚30~40cm程度の黄褐色土 (Hue10YR5/8~4/6) であり、主に縄文早期の土器・石器類を多量に含む包含層である。第IX層は、層厚30~40cm程度の暗黒褐色土 (Hue10YR2/1~1.7/1) であり、縄文草創期~早期の土器・石器類を多量に含む包含層である。第X層は、層厚20cm程度の暗黄褐色土 (Hue10YR6/4~6/6) で、主に縄文草創期の包含層である。第XI層は、層厚80cm前後の暗黄橙褐色土 (Hue10YR6/4~6/6) であり、遺物を殆ど含まないが、黒曜石製の石核が1点出土した。第XII層は、層厚60cm以上の暗橙褐色土 (Hue7.5YR6/4~6/6) であり、僅かにチャート製剥片が数点出土した。

第I層	第I層...明褐灰色土 (Hue7.5YR7/1~6/1)。表土・耕作土
第II層	第II層...褐灰色土 (Hue7.5YR6/1~5/1)。水田耕作土
第III層	第III層...明赤褐色土 (Hue10YR4/2~5/2)。水田基盤土
第IV層	第IV層...黄褐色土 (Hue7.5YR5/6)。造成土
第V層	第V層...明灰褐色土 (Hue7.5YR3/1)。造成土
第VI層	第VI層...暗黒褐色土 (Hue2.5Y2/1)。縄文後期~弥生時代遺物包含層
第VII層	第VII層...暗~明黄褐色土 (Hue10YR5/8~2.5Y6/6)。上部が縄文後期包含層
第VIII層	第VIII層...黄褐色土 (Hue10YR5/8~4/6)。主に縄文早期包含層
第IX層	第IX層...暗黒褐色土 (Hue10YR2/1~1.7/1)。縄文時代草創期~早期包含層
第X層	第X層...暗黄褐色土 (Hue10YR4/3)。主に縄文時代草創期包含層
第XI層	第XI層...暗黄橙褐色土 (Hue10YR6/4~6/6)。後期旧石器時代~縄文時代草創期
第XII層	第XII層...暗橙褐色土 (Hue7.5YR6/4~6/6)。後期旧石器時代包含層

第3節 阿蘇原上遺跡における石器の器種および使用石材の分類基準

阿蘇原上遺跡では、およそ500㎡という少面積の調査ながら、多数の遺物の出土がみられ、いくつかの重要な成果を数えることができる。だが、次節に述べるように、小河川に面する斜面地に立地することも与って、必ずしも層位的安定性に恵まれた出土状況ではなかった。したがって、各種遺物の時間的先后関係を整理する際には、層位的上下関係以外の情報をも駆使する必要がある。そのため、第5節以降に述べる遺物解説においても、一定の基準を基に仮設した分類項目毎に記載する方法を採用している。本節では、石器の器種分類におけるいくつかの項目と石器の使用石材に関する分類体系について、その設定基準および定義内容についての概要を述べ、利用に供したい。

■ 石器の器種

縄文草創期・早期にくわえ、少量の縄文後期以降、弥生後期までの資料が対象となる。細分器種を設定した項目がいくつかあるが、その詳細は個別の遺物解説に即して記す。以下ではとくに、相互に中間の特徴を示す分類項目について、その弁別基準と関係性について述べる。

両面調整石器

分割礫素材か剥片素材かを問わず、器体の両面に剥離がくわえられた石器を総称する。押圧剥離ないしソフトハンマーによる整形剥離が推定される精緻な剥離面を有する資料をⅠ類、これと比べ相対的に剥離面の構成が粗雑なものをⅡ類と細分した。

両面調整石器Ⅰ類は尖頭器や石斧、尖頭状石器と形態的に連絡する特徴を有する。尖頭器との弁別根拠は、平面形において左右対称の度合いを減じる点のほか、最終的な整形の際の剥離面が相対的に大きな点を重視している。石斧との弁別根拠として、チャート製の資料に関しては通常石斧の素材として用いられない点を、流紋岩などの石材を使用するものに関しては石斧の刃部と考えられる部位の有無に判断基準を求めた。尖頭状石器との弁別根拠は、尖頭状石器における素材状態からの変形度がより高いことを重視したが、形態的連続性は著しい。

両面調整石器Ⅱ類はやはり尖頭器や石核、尖頭状石器、楔形石器との連絡的様相を示す。尖頭器や尖頭状石器との弁別根拠はⅠ類に等しいが、石核との弁別は、逆に相対的に細かな剥離がくわえられている点を重視している。剥離の程度としては、獲得される剥片が確認されている他の器種の素材として供給可能か否かを基準とする。

これら両面調整石器Ⅰ・Ⅱ類とした器種にみられる最大の特性は、目的的な器種ではない可能性が高いことである。つまり、これらは縄文時代草創期に帰属する遺物としては尖頭器や石核、縄文早期に帰属する遺物としては尖頭状石器や石核、楔形石器や石匙など、最終的に両面調整ないしこれに類する整形・調整加工工程を要する石器の製作過程の諸段階に生成される副産物としての規定が与えられる。具体的なところでは失敗品、あるいは練習品などが含まれる可能性もあろう。

尖頭状石器

上述した両面調整石器以外に石核・楔形石器との強い連絡性が認められる資料をグルーピングした。石核とは主に調整加工の精度とサイズから弁別される。楔形石器とは左右対称の度合いが高いことによ

って弁別が可能である。楔形石器との連絡性は、尖頭状石器の製作において、しばしば両極打法を用いる場合が想定される点に理由の一端があろう。当該器種はそれ自体、目的的な器種である可能性が高いが、一部には石鏝の製作途上品を含むものと考えられる。

■ 石器の使用石材

本遺跡における石材利用について、荒掘みに傾向を把握するところでは、大半は遺跡近傍において採取可能なチャート、流紋岩、凝灰岩等の石材であり、これにくわえごく少量の黒曜石、安山岩などの遠隔地石材が観察される。以下、石材毎に解説をくわえる。

【チャート】Ⅰ類：淡い緑色や灰色を呈するもの Ⅱ類：黒灰色で黒色の節理が縞状に入るもの

【流紋岩】Ⅰ類：黒色で光沢の強いもの Ⅱ類：上記以外のもので灰白色に風化するもの

【黒曜石】Ⅰ類：黒色で透明感の度合いには格差を含む Ⅱ類：白色味が強いもので、肉眼では大分県姫島産と推定されるもの

【ホルンフェルス】黄土色から黄白色を呈し、若干粉を吹いたような状態を呈する変成岩

【凝灰岩】祖母・傾系の火山岩

【阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩】熊本県一宮町象ヶ鼻に産する火山岩

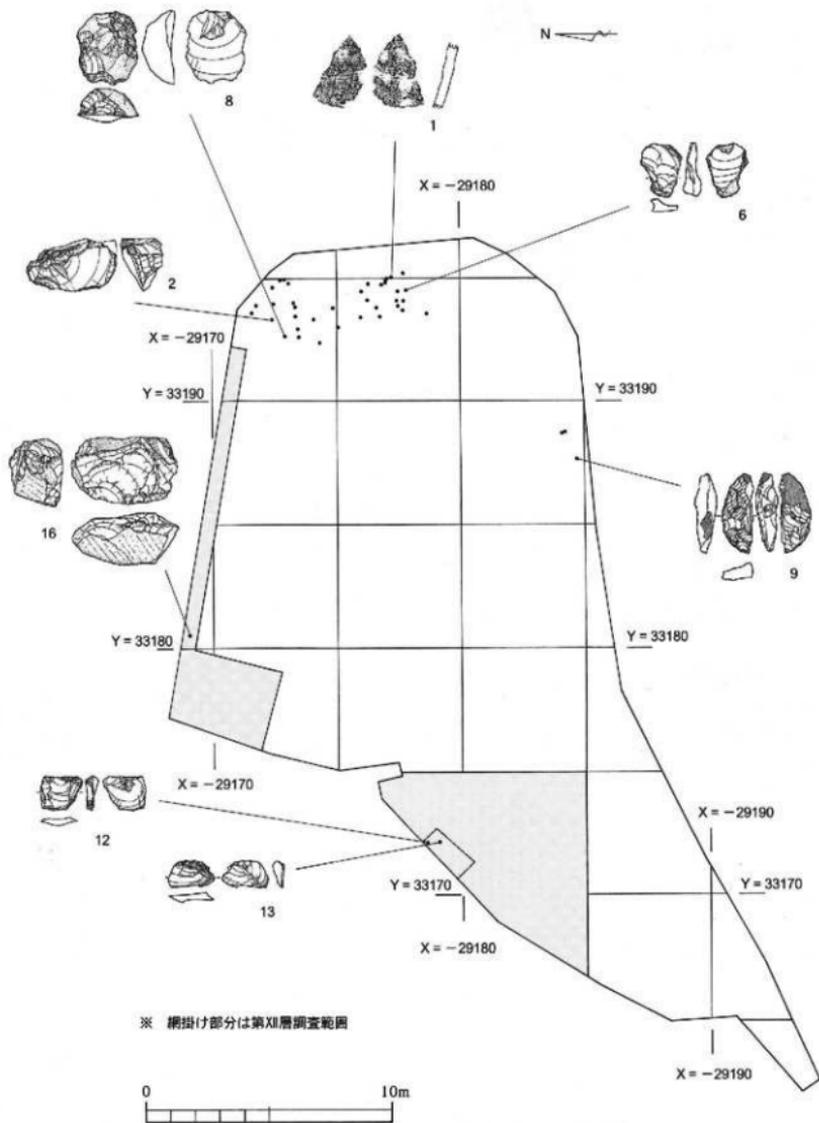
【その他】上記分類のいずれにも入らない、少量出土石材（石英、水晶、片岩など）

第4節 阿蘇原上遺跡における遺物・遺構の出土状況（第5図・第6図）

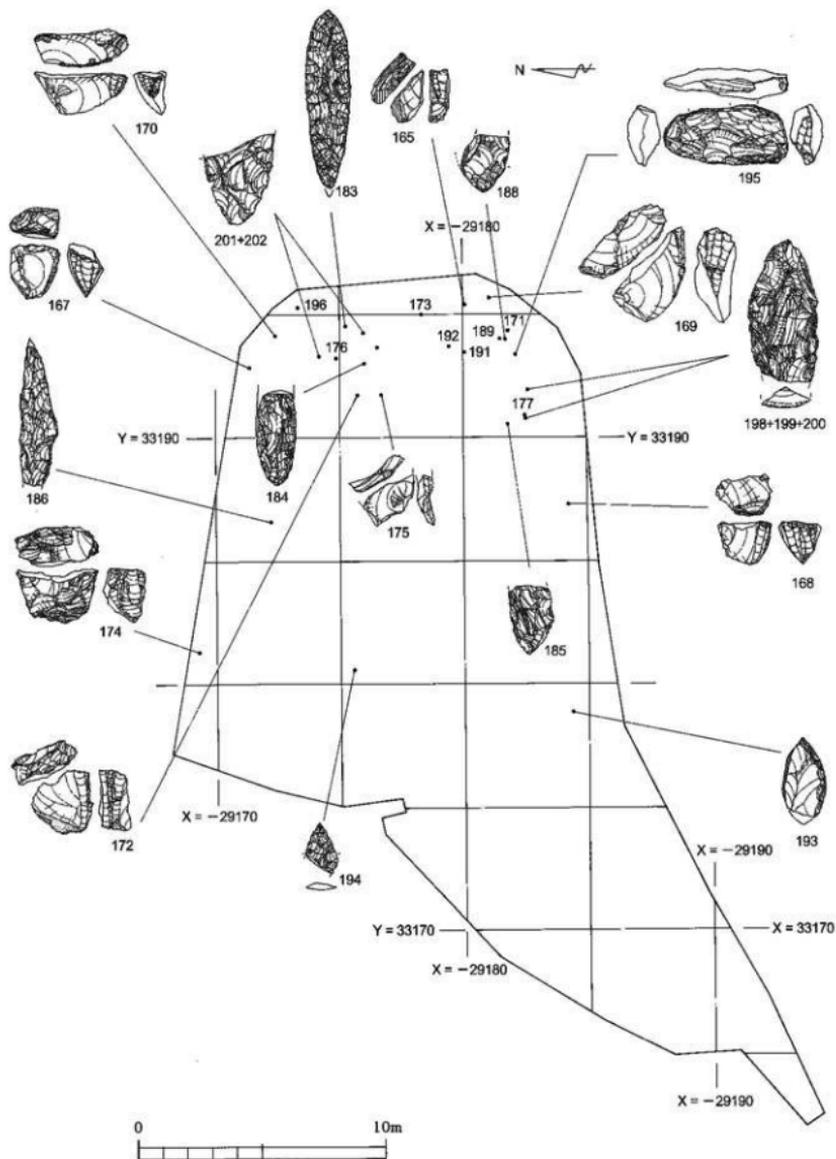
阿蘇原上遺跡は、西側の平坦部と小河川に望む東側の斜面部から構成されるが、平坦部は後世の削平の結果であり、本来は西側にも調査区東側に類する斜面地が存在していたものと推定される。今回、検出した遺物・遺構は大半が東側の斜面部出土のものであり、本節でも当該範囲を主とした考古資料の出土状況について説明をくわえる。

さきにも触れたように、遺物の上下移動はかなり激しく、極端な例を挙げれば、第Ⅶ・Ⅷ・Ⅹの三層間の接合事例もあるほどである（第22図-198+199+200）。

遺物の二次移動が激しい傾向は、水平分布においてもおそらく同様であり、厳密な原位置論的検討などはおこないたい。しかしながら、集石遺構などの遺構検出面（第Ⅷ層）の存在を考慮すれば、第Ⅷ層以下における遺物の水平分布に限っては一定の傾向を看取できる（第6図）、全層位を通じて検出されたチャートではなく、流紋岩の層位別出土点数・重量（第1表）に注意すれば、垂直分布においても有用な情報を抽出することは可能である。たとえば、尖頭器の分布をみれば、東側斜面部の傾斜変換線以东において集中する傾向が窺われる点などを挙げることができよう。ただ、東側斜面部の小河川に望む縁辺部においては、土層堆積状況が肉眼においても識別困難であり、この範囲からの出土遺物に関しては第Ⅷ層以下第Ⅹ層以上という帰属層位の限定しかなわず、やむなく「第Ⅷ～Ⅹ層混在層」という名称を付したことをお断りしておく（第10図）。



第5図 阿蘇原上遺跡 第XI層・第XII層遺物出土状況図(1/200)



第6圖 阿蘇原上遺跡 縄文時代草創期主要遺物出土狀況圖(1/200)

第5節 第XI層・第XII層の調査

第XI層の遺物としては、調査東側の斜面部において41点を確認した。その内訳を示すと、細石刃石核1点 (Ryo)、搔器1点 (Ryo)、両面調整石器1点 (Ch I)、二次加工有る剥片4点 (Ch I : 3, Ch II : 1)、剥片28点 (Ch I : 18, Ch II : 1, Ryo : 6, Sh : 3)、石核5点 (Ch I : 3, Ch II : 1, Ryo : 1)、土器片1点 (無文部) となる。そのうち、11点を図示した (第7・8図)。

第XII層の遺物は、調査区北辺に設定した基本土層確認のための北壁トレンチの西側から検出された第XII層の遺物1点と第7トレンチから検出された第XII層の遺物2点の総計3点である。これらの遺物の存在からその周辺にも遺物包含層が広がる可能性が考えられたため、遺物出土地の周囲に調査範囲を拡張したが、第7トレンチの南側の第XI層からチャートの礫片1点を検出したのみにとどまった。この他、第7トレンチから一括して取り上げた遺物の中に第XI層ないし第XII層に帰属する可能性のある遺物1点がある。以下、個別に説明をくわえる。

■土器 (第7図-1)

1の土器片は無文部を残存する資料である。外面はナデ調整が施され、内面は指腹押圧の痕跡を顕著に残す。焼成は良好・堅緻であり、器厚は3~4mmを測る。

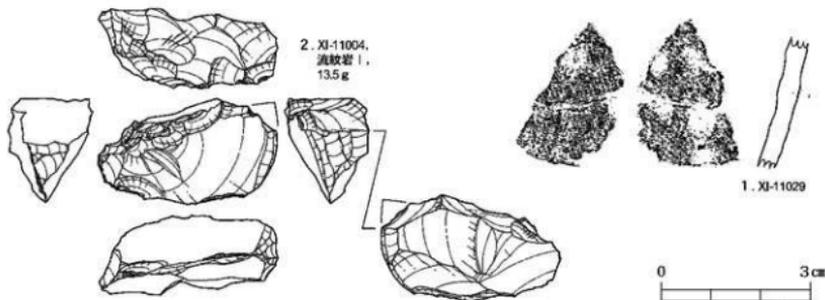
■石器

細石刃石核 (第7図-2)

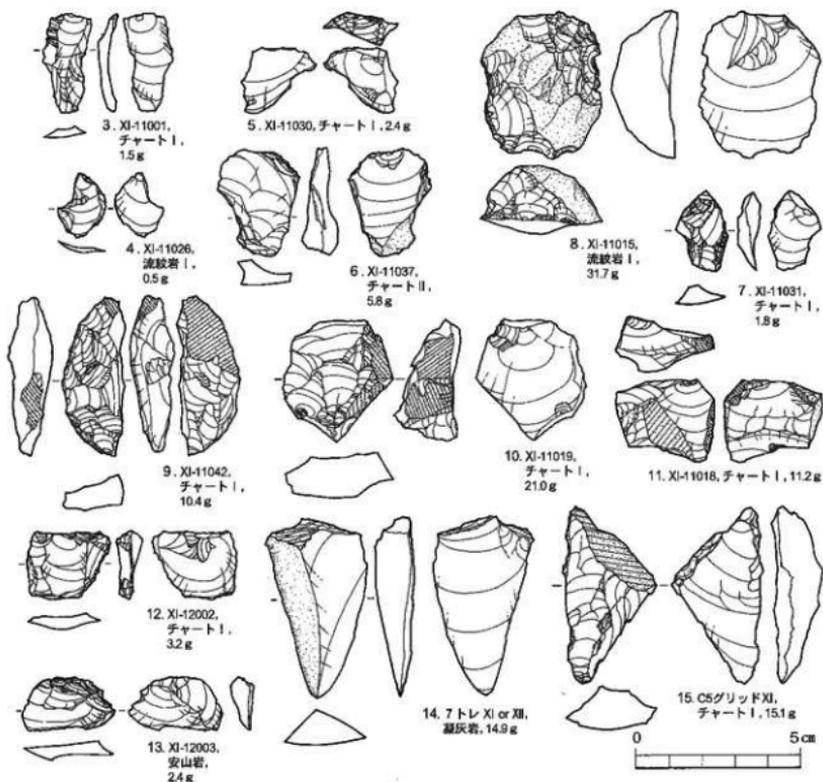
2は厚手の剥片を素材とし、その剥離軸の末端側から細石刃剥離をおこなっている。素材剥片の一侧縁に剥離軸と直交する方向から幾度かの剥離 (横打打面形成) が施された痕跡を残す。同様の方向からの打面再生を示す二枚の剥離面が観察され、その後に放棄されている。

両面調整石器 (第8図-9)

9は厚手の剥片と思しき素材の周辺から平坦剥離が施されている。偶発的な折れによるものと思われ



第7図 第XI層出土遺物(細石刃石核・土器) (1/1)



第8図 第XI層・第XII層出土石器(2/3)

る破損のため、全体像は不明であるが、両面調整石器に類する資料と考えられる。斜面部第XI層からの出土である。

二次加工有る剥片(第8図-6・7・12)

6は剥片のバルブ付近に規模を違える複数の剥離が施される。7は小形剥片の末端部の腹面側から連続する小規模な剥離痕が観察される。いずれも、斜面部第XII層からの出土である。

12は灰白色のチャートを用いた剥片の右側縁にプランティング状の二次加工が観察される。剥片末端側は節理面を含む折断面である。背面構成からは連続する縦長状ないし寸詰まりの貝殻状剥片の連続剥離が窺われる。第7トレンチ第XII層からの出土である。

搔器(第8図-8)

8は流紋岩製の分厚な剥片の周縁に、規模を違える種状剥離痕が連続してスクレイパーエッジを形成している。バルブ側を含め、ほぼ全周する加工上の特徴を具える円形搔器である。斜面部第XII層からの出土である。

剥片 (第8図-3~5, 13・14)

3はチャート製の縦長剥片であり、線状打面を有する。4は流紋岩製の剥片であり、打面部を欠損するが、その形状や背面の剥離面構成から、尖頭器ないし両面調整石器などの整形に伴う生産物である可能性が指摘される。5は打面再生剥片と考えられ、打面調整は施さず、作業面調整の痕跡のみが観察される。3~5は斜面部第XI層からの出土である。

13は灰白色に風化した安山岩製の不定形剥片である。腹面側に自然面が観察され、背面側には頭部調整痕が認められる。第7トレンチ第XII層からの出土である。14は黄白色に風化した凝灰岩製の縦長剥片である。頭部調整痕が観察される。打面を欠損する。第7トレンチからの一括取り上げ遺物である。第7トレンチは調査以前に第XI層まで削平されており、この層準以下の遺物と考えられる。

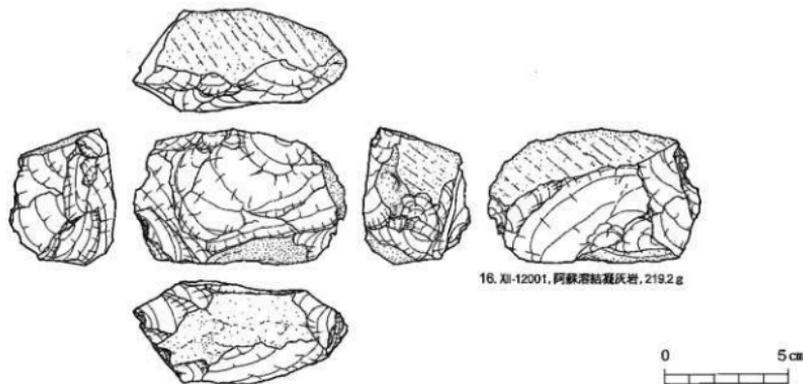
石核 (第8図-10・11, 第9図-16)

10は厚手の剥片を素材とし、その末端に位置する平坦面を打面として、不定形小形剥片を剥取している石核である可能性が指摘される。11も類似する剥片を素材とした小形の石核であり、やはり小形の不定形剥片を少量生産した際の残核と考えられる。いずれも斜面部第XI層からの出土である。

16は著しく風化が進んだ阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩(いわゆる「阿蘇産黒曜石」)製の石核である。角礫を素材に、平坦な礫皮面に打面を設定し、主に不定形剥片を剥取している。打面転移を繰り返して、多方向からの剥片剥離が窺われる。打面調整や作業面調整などの痕跡は顕著でない。北壁トレンチ第XII層最上部からの出土である。

礫片 (第8図-15)

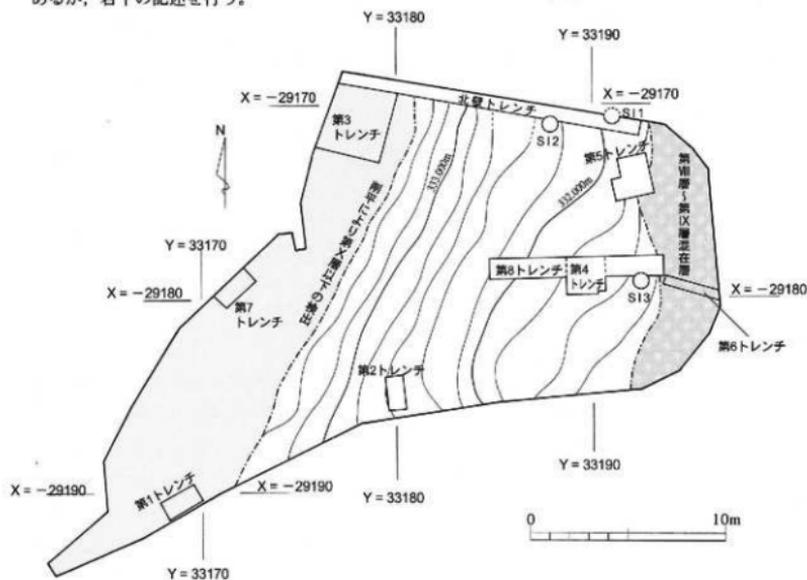
石器素材として使用可能な灰白色のチャートの礫片である。一部二次加工と見えなくもない面が観察されるが、組織的なものではないうえ、全体にローリングを受けており判断に苦しむ。第7トレンチ拡張区(C5グリッド)第XI層からの出土である。



第9図 第XII層出土石器(1/2)

第6節 第Ⅷ層～第Ⅹ層の調査

第Ⅷ層～第Ⅹ層は、第二章－第2節において記述したが、急斜面上のために層の堆積状況が不安定であり、一部分層が行えなかった。そこで、本節では、第Ⅷ層～第Ⅹ層をまとめて報告を行うこととする。第Ⅷ層～第Ⅹ層は、第Ⅷ層がアカホヤ火山灰の二次堆積層であることから、縄文時代早期以前である。第Ⅷ層～第Ⅹ層では、集石遺構3基のほか、多数の縄文土器片・石器類が検出された。以下に簡単ではあるが、若干の記述を行う。



第10図 第Ⅹ層上面検出状況図(0/250)

(1) 遺構

■集石遺構(第11図)

集石遺構は、3基いずれも調査区東側第Ⅹ層上面で検出された。主構成礫や検出層位や位置など共通点も多いが、構成礫の大きさや礫の配置など相違点もあるので、個別に記述を行う。

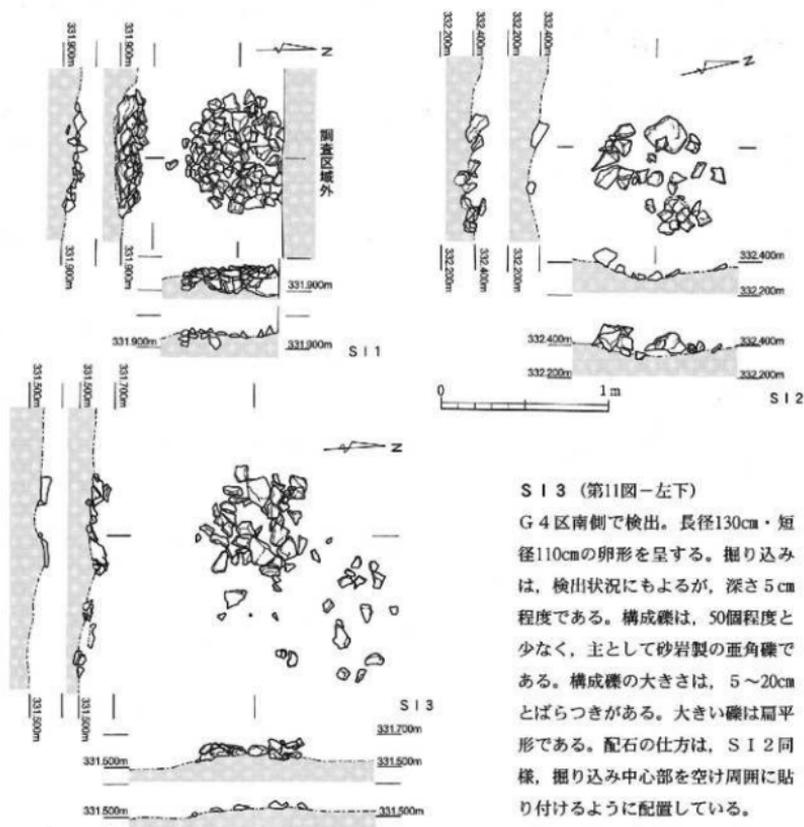
S11(第11図-左上)

G3区北西側で検出。一部調査区域外にかかっているため、全体の検出が行えなかったが、推定径70cm・深さ20cmの円形を呈し、円形の掘り込みをもつ。構成礫は、120個程度であり、主として5～10cm程度とやや小振りの砂岩製亜角礫であるが、底部中心付近に30cm程の礫が据えているように下部に行くほど大きくなっていくようである。

S12(第11図-右上)

F3区北側で検出。長径80cm・短径70cm・深さ20cmの円形を呈し、円形の掘り込みをもつ。構成礫は

30個程度と少なく、主として砂岩製の亜角礫である。構成礫の大きさは5～30cmとばらつきがある。配石の仕方は、掘り込み全体ではなく、掘り込み中心部を空け周辺に貼り付けるように配置している。



第11図 集石遺構(1/30)

(2) 遺物 (第12図～第36図)

■土器 (第12図～第16図)

第Ⅷ層から第Ⅹ層にかけて、縄文時代草創期から縄文時代早期に位置付けられる土器が出土した。それらは、器形や文様により分類が可能である。ここでは、分類の基準と根拠を示し、若干の説明をくわえる。なお、本書に掲載した資料についての詳細は観察表を参照されたい。

■第Ⅰ群 (第7図-17～42)

薄手(器壁4～6mm)の深鉢形土器群である。包含層で言えば第Ⅷ～Ⅹ層を中心に出土する。プロポー

ションは、底部未検出のため詳細不明であるが、口縁部から底部にかけて緩やかにカーブを描きながらすぼむ弾丸形だと考えられる。器壁は、内外面ともに粘土紐の積み上げの痕跡か、凹凸が著しい。器面調整は、内外面ともにナデを施すが、比して外面の方が丁寧である。外面の施文方法により大きくIA～IC類の3類に分類できる。

IA類 (第12図-17~28)

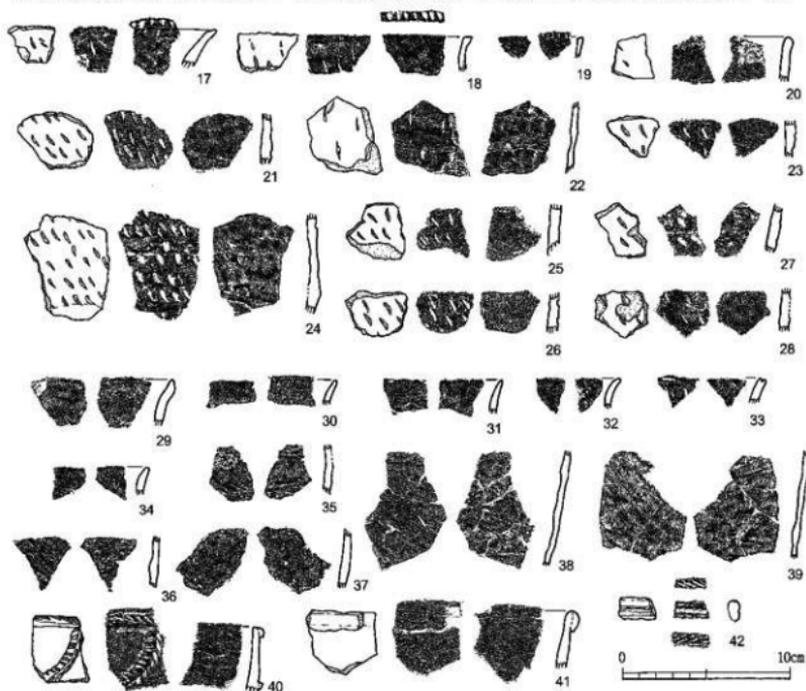
外面に爪形文を施すグループ。17~20は口縁部である。口唇部は、平坦であり、4点中3点に縦位の爪形刻目をもつ。21~28は胴部片である。口縁部下半から胴部全体にかけて爪形文を施す。爪形文は、その殆どが左上がりの一定方向に施してある。

IB類 (第12図-29~39)

外面無文のグループ。29~34は口縁部である。わずかに外反しながら断面尖舌状を呈する。35~39は胴部である。器面調整は、指ナデであると考えられるが、凹凸が著しく指頭痕とも考えられる。

IC類 (第12図-40~42)

突帯を貼り付けるグループ。40・41は、直立気味に立ち上がる口縁部であり、外面に貼付突帯を施している。40の突帯は、断面三角形で斜位の刻目文を施しており、口唇部に平行する1条と「ノ」字状の1条が確認できる。41の突帯は、7~10mmの無文の粘土紐が口唇部に平行するように貼り付けている。



第12図 第七～X層出土土器①(第I群) (1/3)

42は、突帯部分であると考えられる。1本の粘上紐であるが、外面中央部を溝状に窪ませることによって、あたかも2本の突帯であるかのように見える。上下面と中央部に斜位の刻目文を施している。

■第II群 (第13図～第18図-43～164)

押型文土器群である。基本層序の第Ⅶ～Ⅹ層を中心として出土する。押型文土器と一口に言ってもヴァリエーションが豊富であり、外面施文によってII A類～II D類に分類する。

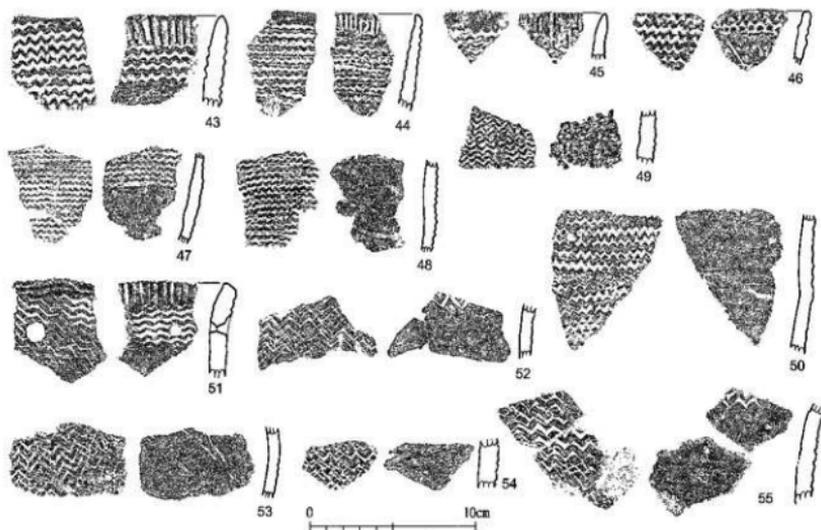
II A類 (第13図～第14図-43～81)

山形押型文である。内外面の施文・器形等によって、1～5の5類の細分が可能である。

(1) II A 1類 (第13図-43～50) …外面は横回転の山形押型文を、口縁部内面は上段に縦位の原体条痕と下段に外面と同じ横回転の山形押型文を施す。山形押型文は、連珠文に近く、山形の間隔が狭い。器壁は5～6mmの薄いものが多い。口縁部は、断面形が尖舌状を呈し、わずかに内傾か直立する。

(2) II A 2類 (第13図-51～55) …外面は横回転の山形押型文を、口縁部内面は上段に縦位の原体条痕と下段に横回転の山形押型文を施す。外面の山形押型文は、II A 1類と似ているが凹凸が小さく、山形の屈曲が明確で、重複しながら施文されている。口縁部は、断面方形を呈し、わずかに外反する。器壁も7～10mmとやや厚い。51は内面に縦位の原体条痕と横回転の山形文を施す。外面と内面の山形文が異なる。

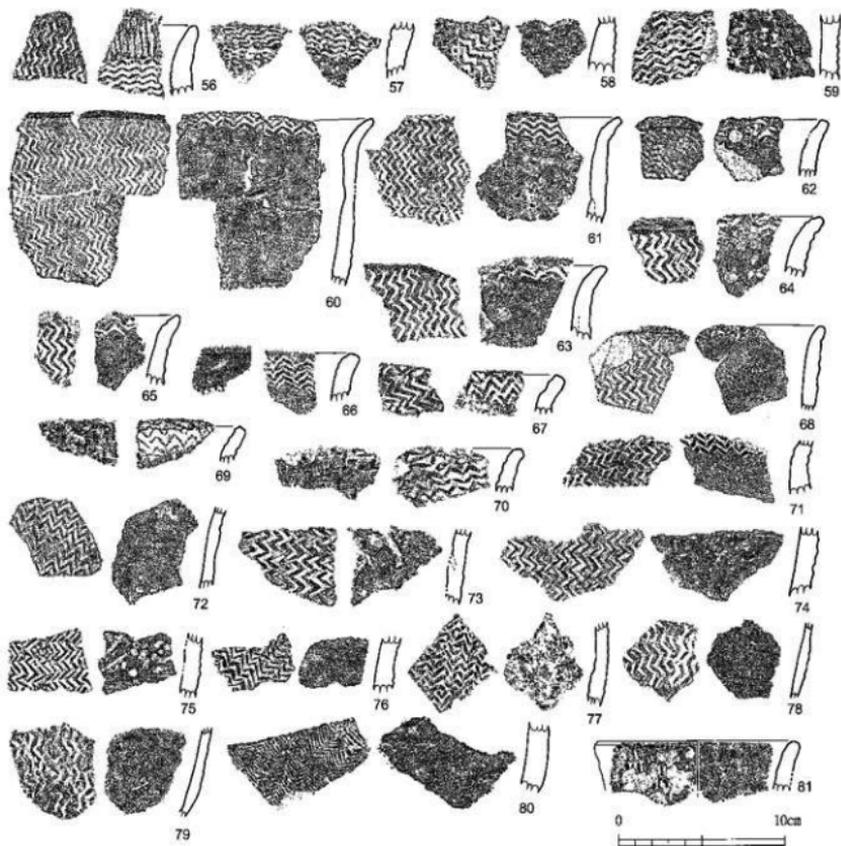
(3) II A 3類 (第14図-56～59) …外面は山形押型文を、口縁部内面は上段に縦位の原体条痕と下段に横回転の山形押型文を施す。II A 2類と似ているが、内外面の山形文が明瞭である。56は、外反する口縁部で、断面形が尖舌状を呈する。



第13図 第Ⅶ～Ⅹ層出土土器②(第II群) (1/3)

(4) II A 4 類 (第14図-60~79) …外面は山形押型文を、内面は口唇部から口縁部上部にかけて横回転の山形押型文を施す。60は口縁部から胴部にかけての部分である。口縁部は、断面形が舌状を呈し、短く外反する。胴部は緩やかに膨らむ。79は、底部付近であり、形態から丸底であることが想定される。

(5) II A 5 類 (第14図80・81) …その他の山形文を一括して扱う。80は、厚手(器壁13mm)の胴部片であり、外面に不定方向の細線状山形押型文を施す。81は、外面の施文がII A 3 類やII A 4 類と似ているが、内面口唇部付近が無文である。



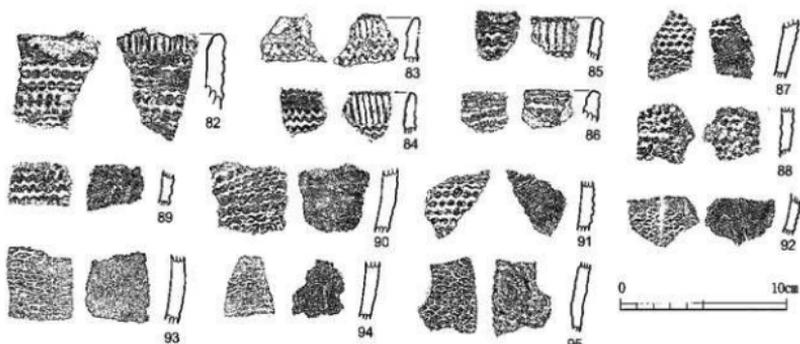
第14図 第Ⅶ～Ⅹ層出土土器③(第Ⅱ群)(1/3)

II B 類 (第15図～第17図-82～139)

楕円形押型文である。内外面の施文・器形等によって、1～7の7類に小細分が可能である。

(1) II B 1 類 (第15図-82～91) …外面は横方向の連珠文風の楕円形押型文を、口縁部内面は上段に縦位の原体条痕と下段に外面と同じ横回転の楕円形押型文を施す。器壁・器形の特徴はII A 1 類と類似する。

(2) II B 2 類 (第15図-92～95) …器形等II A 2 類と類似する。外面は横回転の楕円形押型文を施す。外面の楕円形押型文は、横倒しの米粒状を呈し、凹凸が小さく、重複しながら施文されている。92・93は、胴部片であり、胴部中位が膨らみをもつ形態だと推定される。



第15図 Ⅶ～Ⅹ層出土土器④(第Ⅱ群) (1/3)

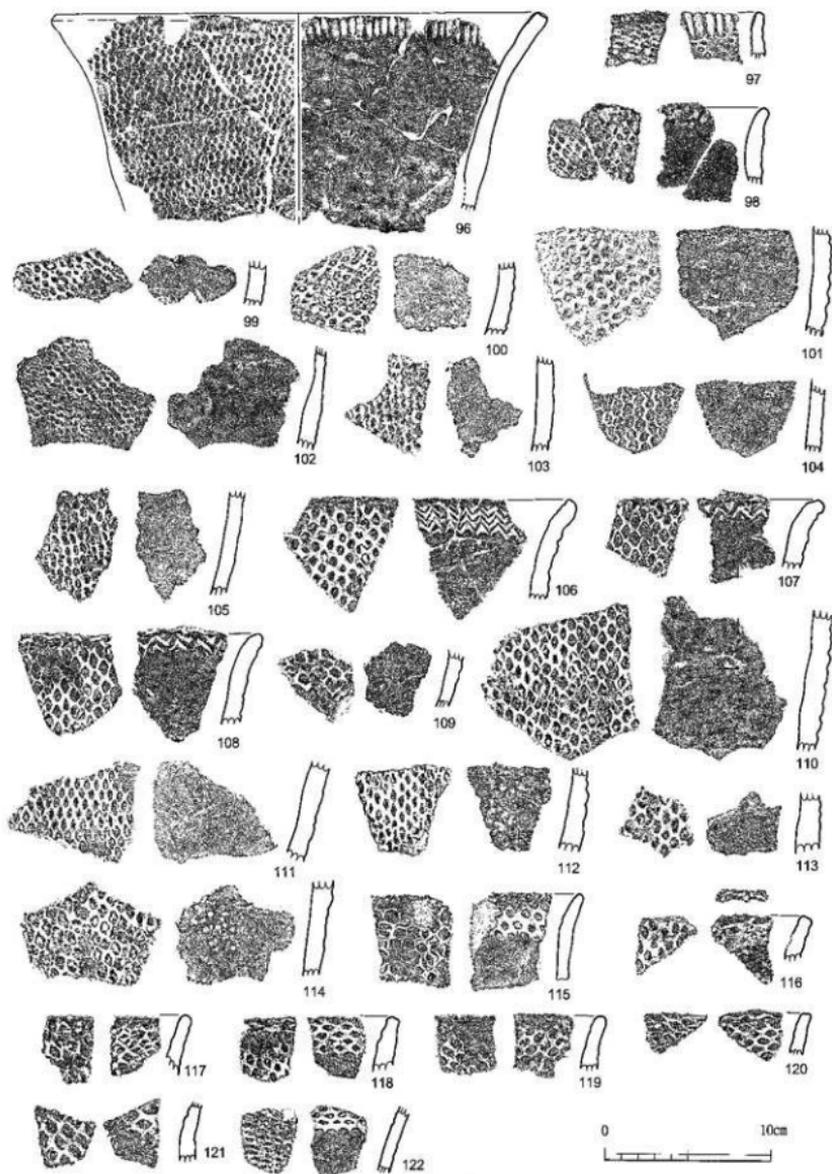
(3) II B 3 類 (第16図-96～105) …器形等II A 3 類と類似する。外面は楕円形押型文を、口縁部内面は上段に縦位の原体条痕を施す。96は、口縁部～胴部片であり、胴部でわずかに膨らみ、口縁部でラッパ状に開く形態が看取できる。97は、口縁部であり、口縁部内面上段に原体条痕・下段に横回転の楕円形押型文を施す。

(4) II B 4 類 (第16図-106～114) …器形等II A 4 類と類似する。短く外反する口縁・緩やかに膨らむ胴部をもつ。外面は縦位の楕円形押型文を、内面は口唇部から口縁部上部にかけて横回転の山形押型文を施す。

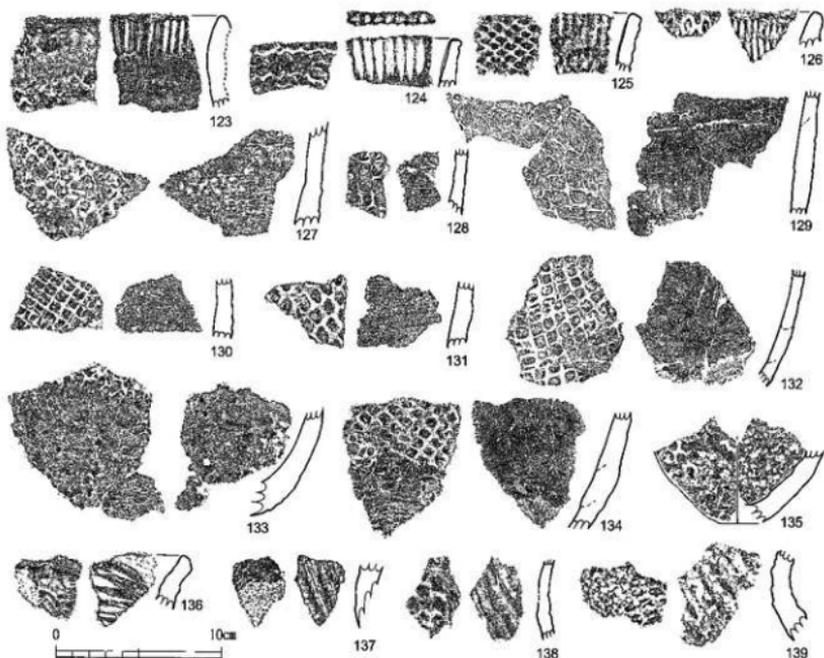
(5) II B 5 類 (第16図-115～122) …外面は斜位の楕円形押型文を、内面は口唇部から口縁部上部にかけて横回転の横位楕円形押型文を施す。115～122は、口縁部であり、断面形舌状か平坦状を呈し、直立かほんの僅かに外反しながら開く。

(6) II B 6 類 (第17図-123～135) …外面は網目状の楕円形押型文を、内面は口唇部から口縁部上部にかけて長さ20～30mmの縦位の原体条痕を施す。123～126は、口縁部であり、断面形舌状か平坦状を呈し、直立か僅かに外反しながら開く。132～135は、底部付近であり、尖丸底を呈する。

(7) II B 7 類 (第17図-136～139) …外面は網目状大粒の楕円形押型文を、内面は口唇部から口縁部上部にかけて長さ30mm以上の斜位の長大化した原体条痕を施す。136～139は、口縁部付近であり、厚めの器壁と大きく外反する器形を特徴とする。



第16图 第Ⅶ~Ⅹ层出土土器⑤(第Ⅱ群)(1/3)



第17図 第Ⅶ～Ⅹ層出土土器⑥(第Ⅱ群) (1/3)

ⅡC類 (第18図-140~156)

その他押型文系の上器を一括して扱う。内外面の施文によって、1~7の7類に小細分が可能である。

(1) ⅡC1類 (第18図-140~142) …燃糸文。140は、外面に横位の編目燃糸文・内面に原体条痕を施す。141は、外面に斜位の平行燃糸文・内面及び口唇部に横位の平行燃糸文を施す。142は、外面に重複する斜位の燃糸文を施す。

(2) ⅡC2類 (第18図-143) …縄文。143は口縁部である。断面形は舌状を呈し、僅かに外反しながら開く形態である。外面に斜位の縄文・内面上部には短い斜位の縄文を施す。

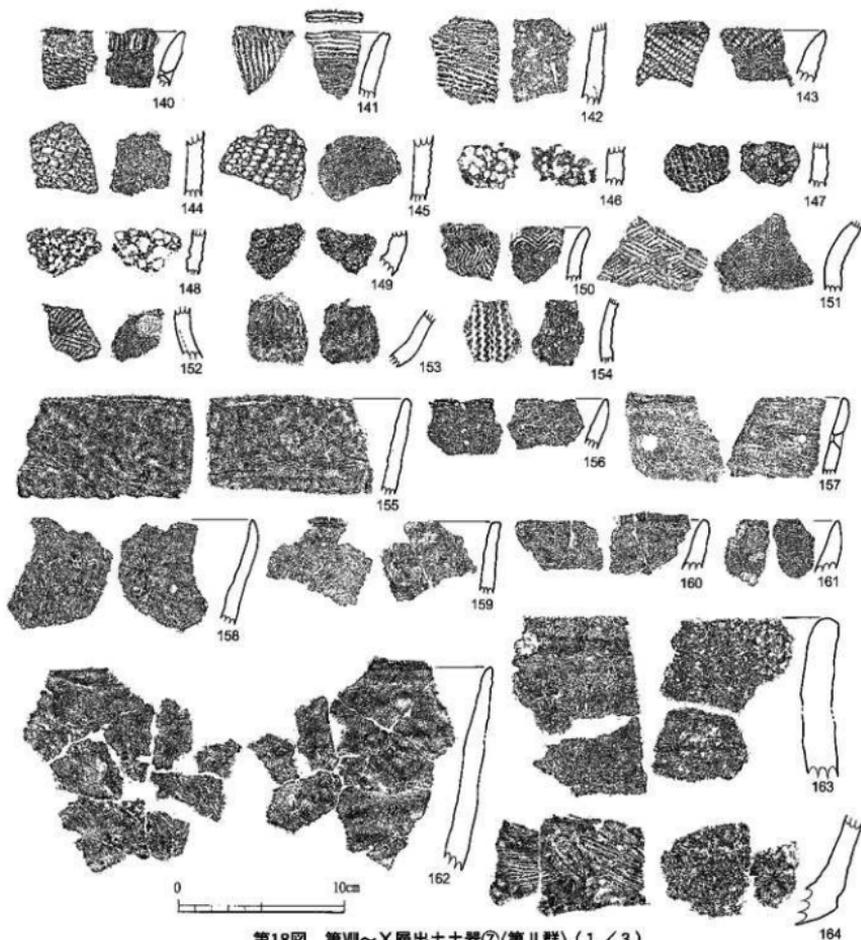
(3) ⅡC3類 (第18図-144・145) …格子状押型文。2点とも僅かに膨らむ胴部であり、正方形を呈する格子目文である。

(4) ⅡC4類 (第18図-146~149) …蜂巣状押型文。4点とも胴部片である。おそらく、押型文が風化によって変化したと考えられる。

(5) ⅡC5類 (第18図-150~152) …菱形押型文。口縁部~胴部付近は大きく外反する器形を特徴とする。150は、口縁部であり、内面上部に横方向の山形押型文を施す。

(6) ⅡC6類 (第18図-153) …微隆起線文。153は、底部付近である。底部は、細片であるが、平底だと推定できる。外面には縦位の微隆起線文が施されている。

(7) II C 7類 (第18図-154) …154は壺形土器の頸部附近である。器壁は4mmと薄く、外面には縦回転の連珠文系山形押型文を施す



第18図 第VII～X層出土土器⑦(第II群) (1/3)

II D類 (第18図-155～164)

その他の土器を一括して扱う。器形によって、1～3の3類に小分類が可能である。

(1) IID 1類 (第18図-155～157) …155～157は口縁部である。断面形尖舌形を呈し、直立気味に立ち上がる。内外面は、指ナデを施すため、凹凸痕が著しく残る。155は、指ナデの他に、工具痕跡もしくは植物の束らしき痕跡も確認できる。

(2) II D 2 類 (第18図-158~161) …158~161は口縁部である。断面形先尖形を呈し、内湾気味に立ち上がる。器面調整方法はII D 1 類と似ているが、焼成は比して堅い。

(3) II D 3 類 (第18図-162~164) …器壁は厚く、焼成は堅い。内外面の器面調整は、指及び工具を用いたナデであり、粗い。162・163は口縁部~胴部付近である。163は、肥厚した口縁に僅かに膨らむ胴部を持つ。内外面ともに横方向の粗いナデを施す。

■石器 (第19~38図)

第Ⅷ層~第Ⅹ層、および分層不可能であった第Ⅷ~Ⅹ混在層中からは、前項に触れた縄文時代草創期から縄文時代早期の土器片に伴って大量の石製遺物の出土がみられた。しかしながら、土器の垂直分布状況や石器の接合関係から推察するに、遺物はかなりの上下移動を経た状態で検出されたものと判断せざるを得なかった。そこで、型式論的操作および幾ばくかの新古関係を反映するであろう大まかな層位的上下関係を判断材料に個々の遺物の帰属年代を推定する作業は、第四章においてその結果を提示することにし、本節に記す個別の遺物解説においては、第Ⅵ層と第Ⅶ層も含め、層位を問わず器種毎の大別とその枠内での類型細別を以って、出土遺物の概要を示すことにしたい。なお、第Ⅵ層以下の出土遺物について、石材毎の層別別点数・重量の内訳を第1表に、器種毎の層別別点数を第2表に示した。あわせてご参照願う。

	チャート I	チャート II	流紋岩 I	流紋岩 II	ホルンフェルス	黒曜石	阿蘇原溶結凝灰岩	凝灰岩	その他	総計
Ⅴ層 点数	79	18	6	2	0	4	0	0	2	111
重量	246.6	146.5	9.9	13.0	0	1.4	0	0	140.7	558.1
Ⅵ層 点数	166	63	12	6	2	4	0	2	7	262
重量	655.1	951.0	58.2	35.7	263.3	4.3	0	86.2	62.1	2115.9
Ⅶ層 点数	1928	124	699	116	39	3	2	35	59	3005
重量	18070.1	2404.3	2269.2	675.9	1170.2	4.3	36.6	2082.5	1325.9	28039.0
Ⅷ層 点数	493	9	35	34	3	1	0	3	7	585
重量	5780.8	105.5	114.4	214.1	121.3	0.2	0	288.0	713.9	7338.2
Ⅹ層 点数	118	11	120	7	4	0	0	2	0	262
重量	765.3	126.6	613.9	216.7	84.1	0	0	27.9	0	1834.5
Ⅷ-Ⅹ層 点数	263	24	118	14	8	0	0	5	4	436
重量	1899.3	481.8	699.5	208.4	1191.7	0	0	168.4	115.5	4764.6
総点数	3047	249	990	179	56	12	2	47	79	4661
総重量	27417.2	4215.7	3765.1	1363.8	2830.6	10.2	36.6	2653.0	2358.1	44650.3

※重量の単位はグラム(g)。阿蘇原溶結凝灰岩は阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩の略。「その他」には安山岩・砂岩などの少量出土石材および鑑定困難な資料を含む。

第1表 石材毎にみた出土遺物の層別別点数・重量

層	決定器種																工程器種				Total	
	Mc	Mb	Po	Bf	Ah	Pt	Pe	Sn	Ss	Es	Cs	Gr	Re	Ax	Hs	Gs	An	F	Ch	Co		Ma
VI	0	0	0	2	4	1	1	0	0	0	0	0	4	1	0	0	0	77	7	16	0	113
VII	1	0	0	3	5	2	1	0	2	0	0	1	2	0	2	1	0	178	16	43	6	263
VIII	5	1	8	10	25	6	25	1	6	5	1	1	44	0	5	0	1	2446	170	199	35	2994
IX	3	0	2	3	6	0	7	0	0	3	0	0	14	0	1	0	1	435	14	91	1	581
X	1	0	1	2	2	0	2	0	2	1	0	0	17	0	0	1	0	218	0	17	0	264
VII・X	3	0	0	2	7	2	5	0	1	1	0	1	31	0	1	0	0	343	6	33	0	436
Total	13	1	11	22	49	11	41	1	11	10	1	3	112	0	9	2	2	3697	213	399	42	4651

※器種名の凡例 【決定器種】…Mc: 細石刃核, Mb: 細石刃, Po: 尖頭器, Bf: 両面調整石器, Ah: 石鏃, Pt: 尖頭状石器, Pe: 楔形石器, Sn: 石匙, Ss: 削器, Es: 環形器, Gr: 彫器, Re: 二次加工有る剥片, Ax: 石斧, Hs: 敲石, Cs: 磨石, An: 台石

【工程器種】…F: 剥片, Ch: 砕片, Co: 石板, Ma: 原石

第2表 器種毎にみた出土遺物の層位別点数

細石刃核 (第19・20図)

細石刃核は17点確認された。出土層位毎の内訳を示すと、第X層1点、第IX層3点、第VIII層5点、第VII層1点、第VII～X混在層3点、後世の攪乱土層中4点となる。これらはその技術・形態的特徴から、四つに類別が可能である。

I類 (第19図-167~171, 第20図-179) …比較的厚手の剥片を素材とし、その主要剥離面を側面に、剥片の末端に細石刃剥離作業面を設定する。打面は主に素材となる剥片の一方の側縁を剥離軸に直交する方向からの剥離によって形成し、その後作業面側からの打面調整を加えている。スクレイパーエッジ状の下縁調整を施すものも認められる。本類型の最大の特徴は、いずれの資料も素材となる剥片のバルブを残存させている点である。

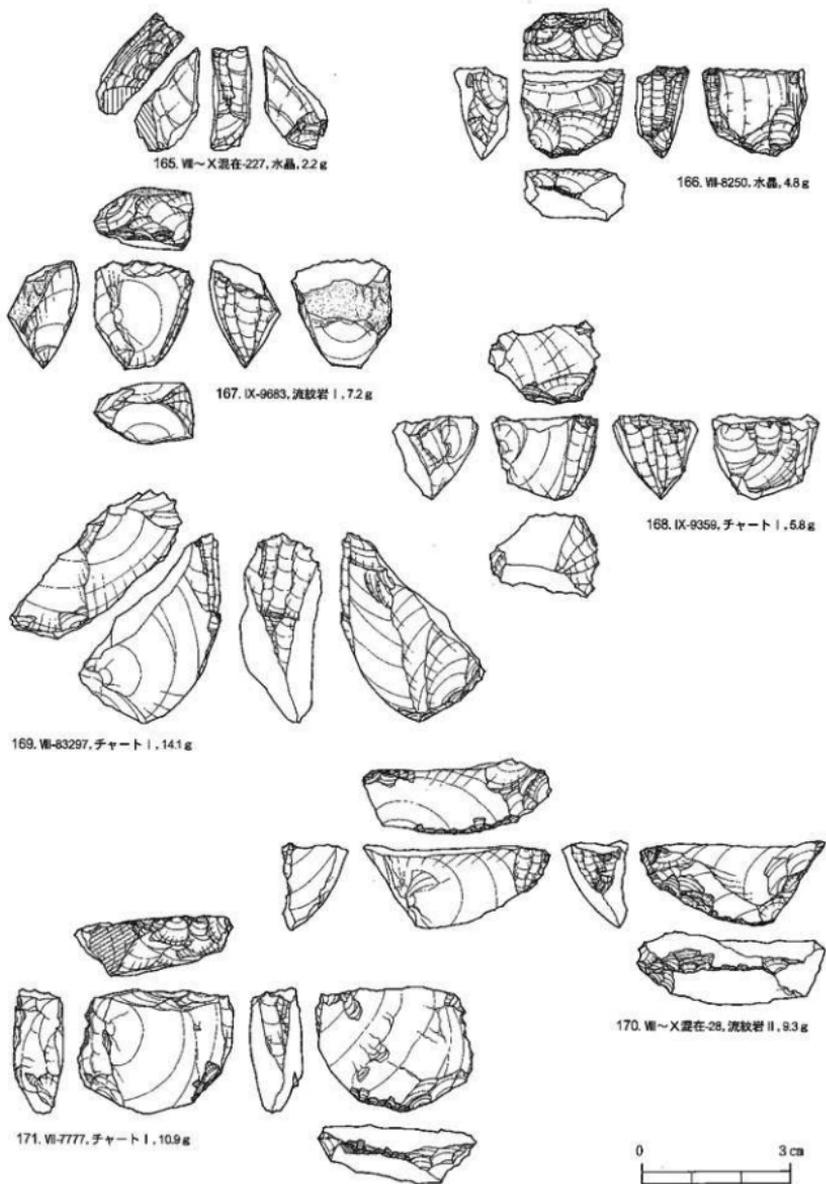
II類 (第19図-165・166, 第20図-172~174・178) …剥片を素材とし、主要剥離面を側面に配する点や打面形成・調整の手法などはI類と共通する。異なるのは、作業面の位置について特に定まった規則性がみられない点である。174は素材となった剥片のバルブ側にも剥離がくわえられているが、細石刃剥離作業面ではない。

III類 (第20図-180) …体形が逆円錐状を呈するいわゆる野岳・休塚型の細石刃核である。

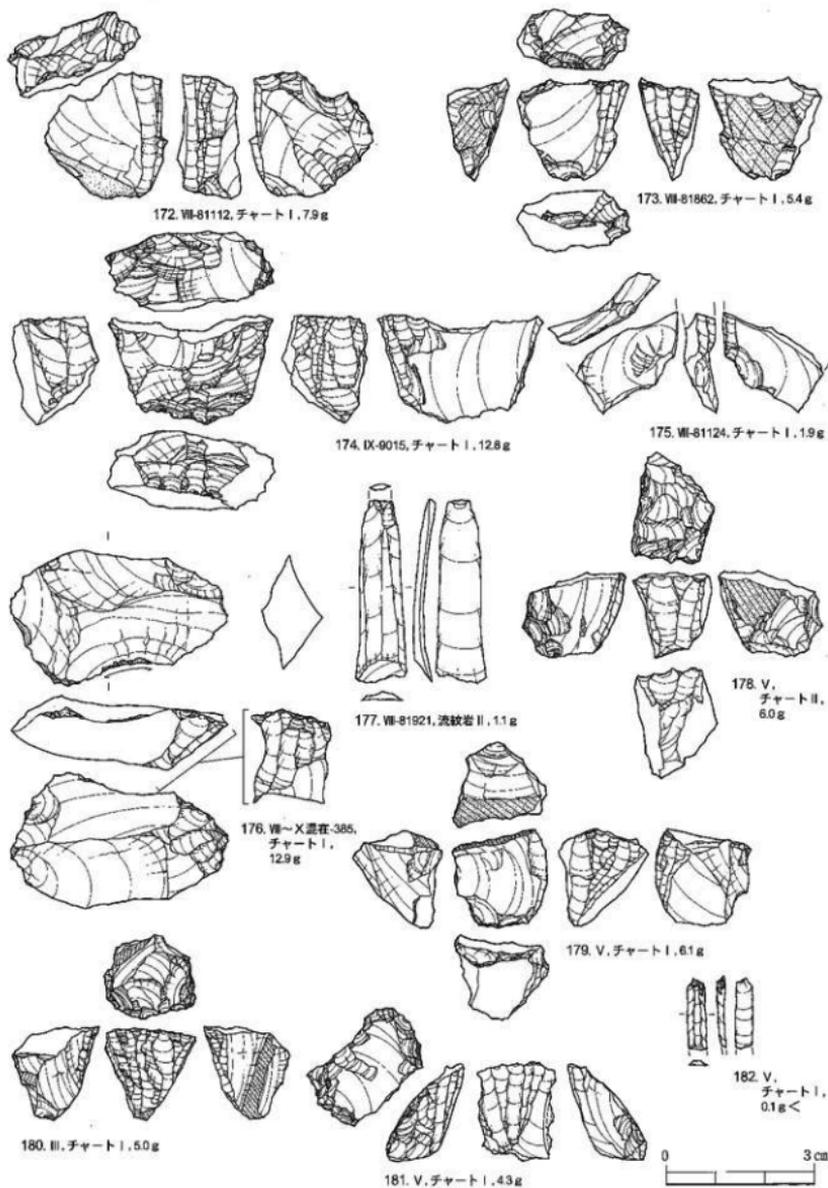
IV類 (第20図-175・176・181) …I～III類に含まれないものを一括した。175は側縁に細石刃剥離作業面の可能性がある二枚の種状剥離面を有する剥片である。細石刃核の整形に関わるものか。176は、残核の一端に細石刃剥離作業面様の種状剥離面を有する。スクレイパーである可能性も指摘できるが、作業面調整の様相などには他の細石刃核との共通性を窺うことができ、無型式の細石刃核として評価しておく。

細石刃 (第20図-177・182)

包層からの出土は唯一177のみである。そのサイズを考慮すると、上述したI～IV類に当てはまる



第19図 第VII～X層出土石器①(細石刃核) (1/1)



第20図 第VII~X層出土石器②(細石刃核・細石刃)(1/1)

細石刃核とセット関係にあるものとは考えにくく、未検出の細石刃核の存在が想定される。182は攪乱土層中からの出土であり、母体となる細石刃核型式は不明である。

尖頭器 (第21図)

形態的には複数のヴァリエーションを内包する可能性が高いが、破損資料が大半を占め、詳細は不明である。183はほぼ完形の資料であり、押圧剥離による整形がなされている。幅広い尖頭部の側がとりわけ丁寧に調整されており、厚みを減じることにも成功している。一方、反対側の細身の尖頭部は、相対的に粗い剥離であることが確認される。こうした観察から、本資料の上下の判断は、実測図のとおり、幅広い尖頭部を槍の先端と想定して配置してみた。他の部分資料についても、幅広い尖頭部が散見され(188・191)、これらも同様に槍の先端部として機能した可能性が指摘できる。23は薄手の剥片に周縁調整を施した小型の尖頭器である。

両面調整石器 (第22図、第23図)

調整剥離の精粗を基準とし、便宜的にⅠ類(精)とⅡ類(粗)に大別した。

Ⅰ類(第22図、第23図-203~212) …195は両面調整を施した石斧様の資料である。しかしながら、石斧とするには刃部にふさわしい部位がなく、「両面調整石器」というニュートラルなカテゴリーに含めておく。両側縁には、対応する箇所につブレが観察される。一方の端部には細石刃剥離作業面様の剥離面が認められるが、つブレが形成された際の剥離である可能性が指摘される。196~202はその形態から、尖頭器の製作途上品である可能性が高い。203~212は後述する尖頭状石器や石鏃の製作途上品である可能性を考える。

Ⅱ類(第23図-213・214) …213は細かなつブレ状の小剥離面が随所に観察される。石核あるいは石匙などの石器の製作途上品である可能性も指摘できる。214も尖頭状石器ないし石鏃の製作途上品である可能性が考えられる。

石鏃 (第24図、第25図-250~272)

いずれも打製石鏃であり、磨製および局部磨製石鏃は確認されない。大半がチャートを用い、黒曜石をほとんど用いない点は注目される。主として平面形の差異から、Ⅰ~Ⅵ類に大別する。

Ⅰ類(第24図-215~245) …平面形が略正三角形を呈し、平基またはわずかな凸基ないし凹基の一群である。

Ⅱ類(第24図-246~249) …短身、深い抉りを施す凹基の一群である。

Ⅲ類(第25図-250~253) …平面形が二等辺三角形に近似する平基の一群である。

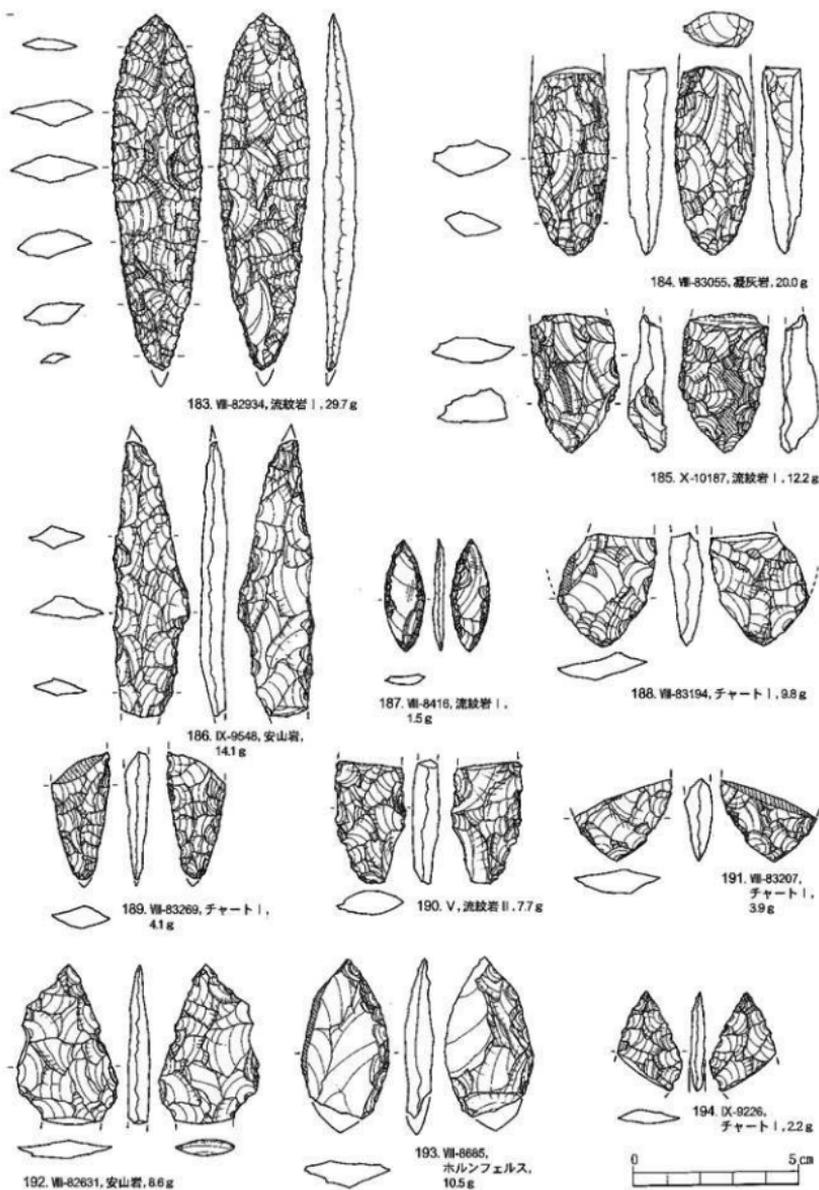
Ⅳ類(第25図-254~258) …凹基の打製石鏃のうち、先細りの脚部を有する一群である。

Ⅴ類(第25図-259~265) …凹基の打製石鏃のうち、円みをおよびる脚部を有する一群である。

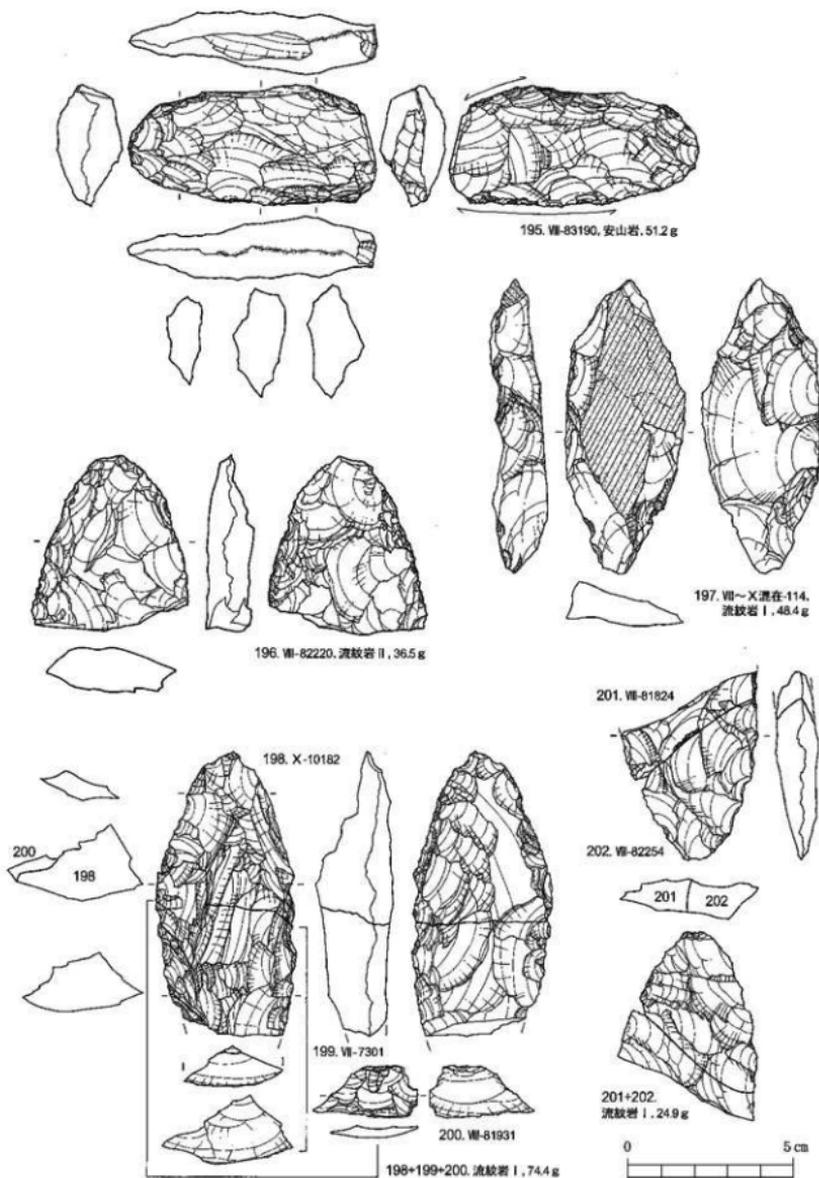
Ⅵ類(第25図-266~272) …上記したⅠ~Ⅴ類に該当しないものと破損のため分類困難な資料を一括した。269~272はその形態と出土層位から、縄文時代後期以降に帰属する可能性が高い。

尖頭状石器 (第25図-273~277、第26図-278~286)

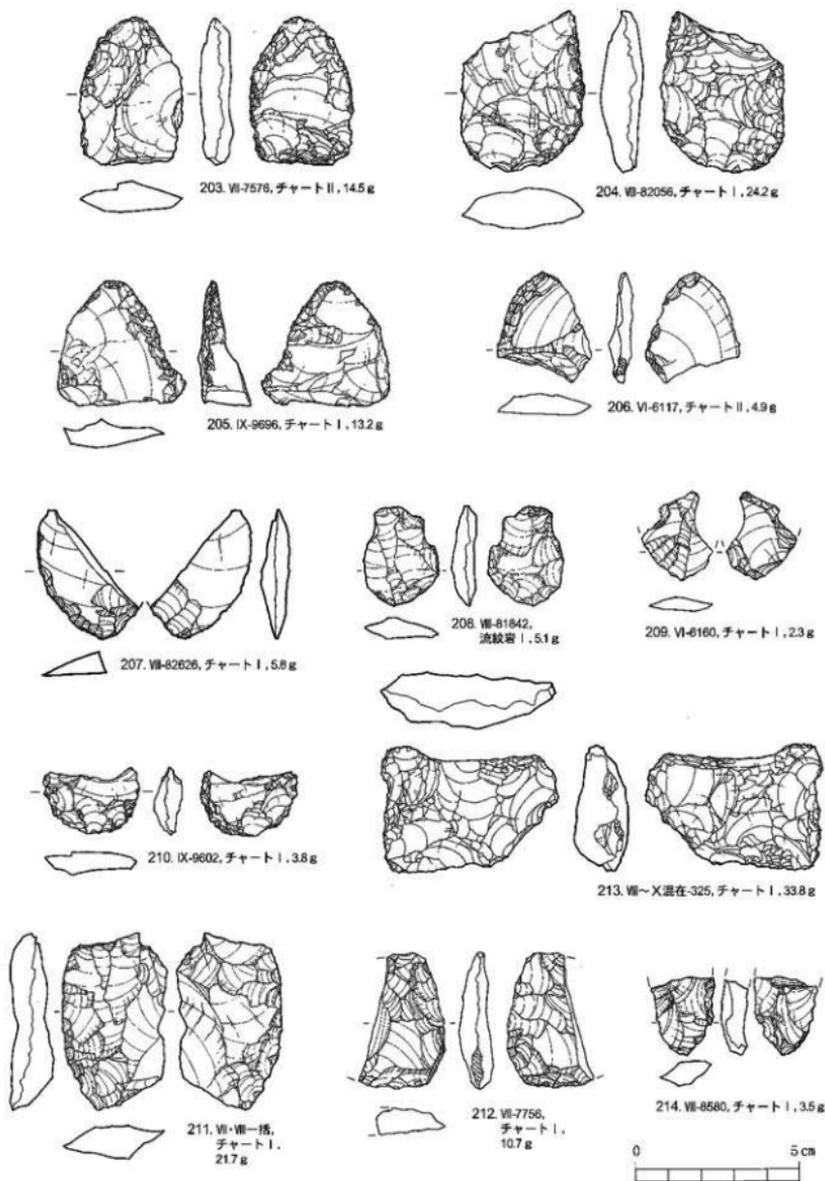
両面加工を施し、尖頭部を有する特徴を備える。長・幅・厚のサイズが石鏃を上まわり、これと弁別する基準となる。石鏃の製作途上品、失敗品を含む可能性も指摘できるが、別類の器種としたほうが、理解しやすい資料もある。284などは、両面調整石器との連続性も指摘できる。大半の資料がチャートを用いる点も特徴の一つとして挙げられてよい。



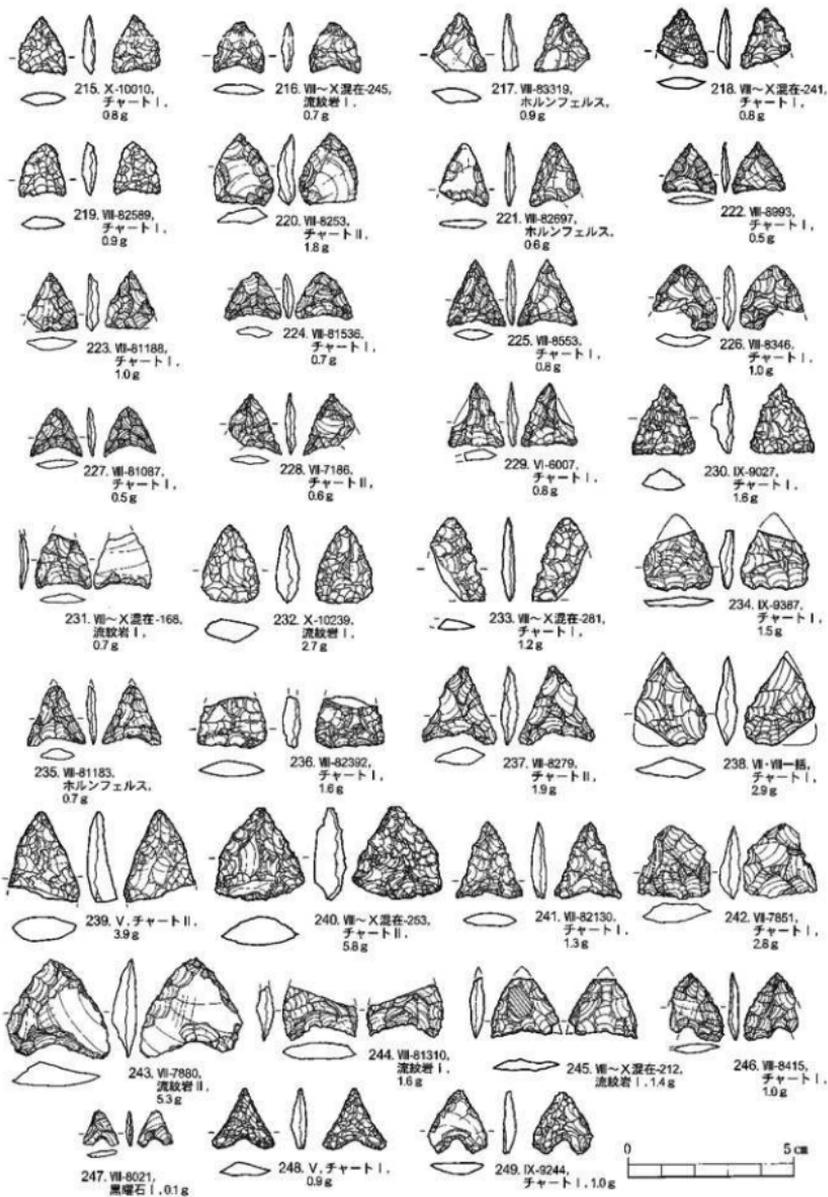
第21図 第VII～X層出土石器③(尖頭器) (2/3)



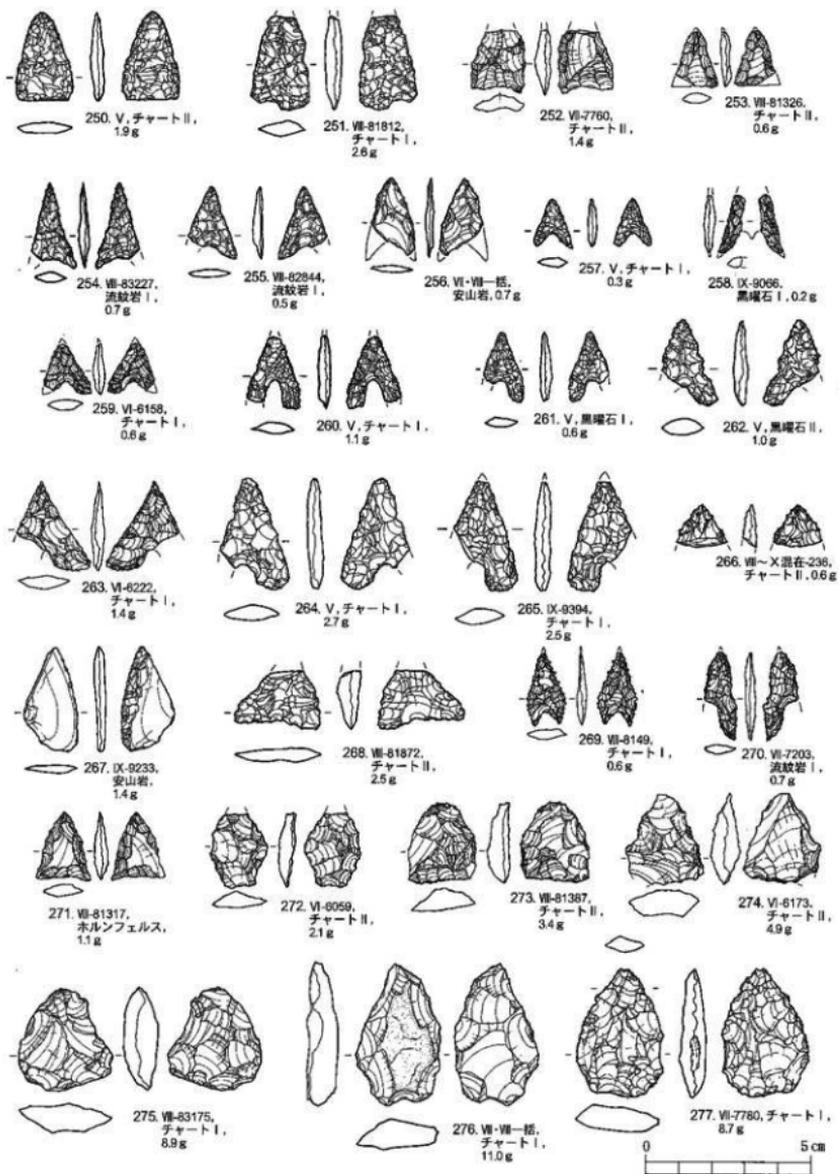
第22圖 第VII~X層出土石器④(兩面調整石器)(2/3)



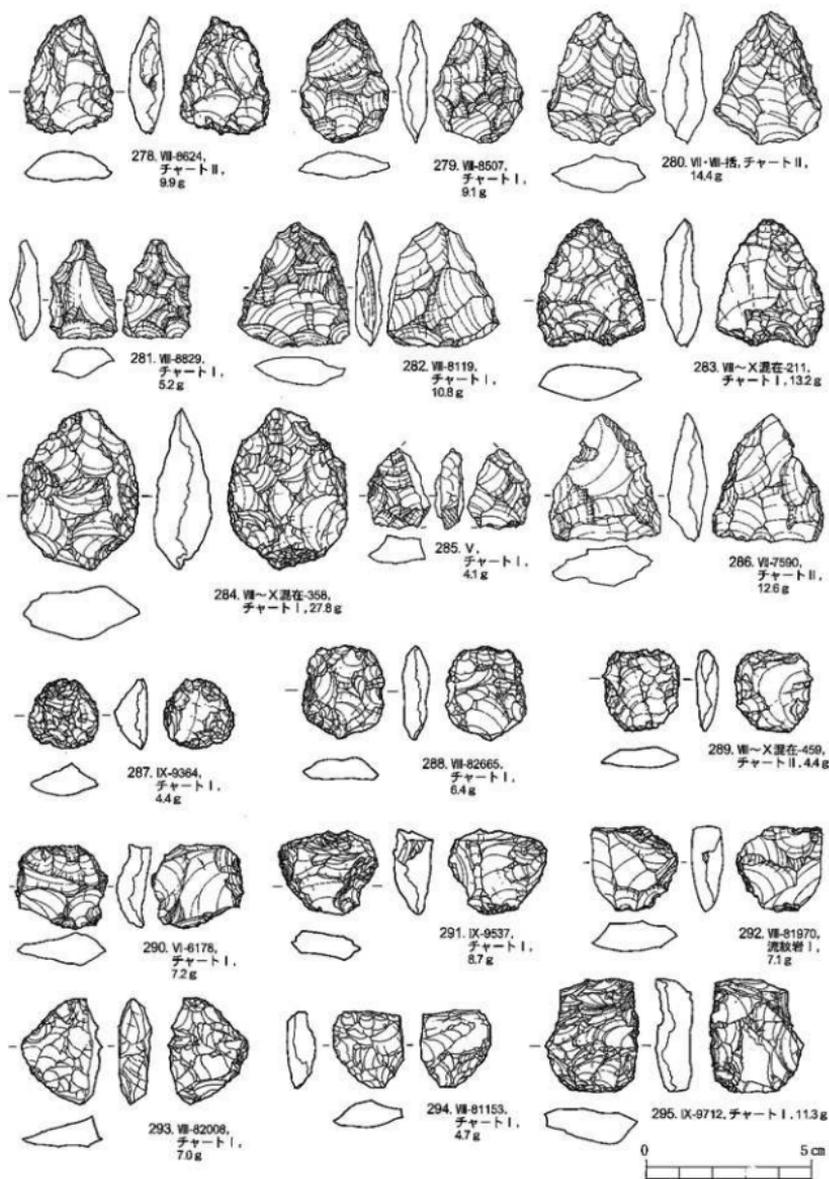
第23図 第VII～X層出土石器⑤(両面調整石器)(2/3)



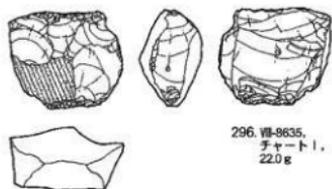
第24図 第VII～X層出土石器⑥(石鏃)(2/3)



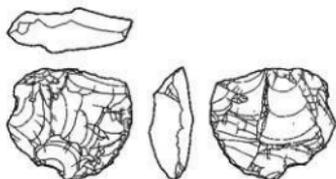
第25図 第VII～X層出土石器⑦(石鏃・尖頭状石器) (2 / 3)



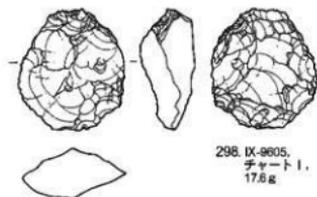
第26図 第VII～X層出土石器⑧(尖頭状石器・楔形石器)(2/3)



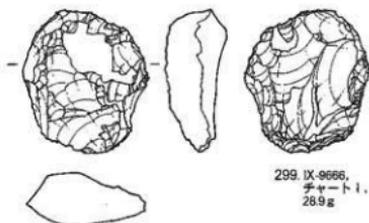
296. VII-9635,
チャート I,
22.0 g



297. IX-9503,
チャート I,
16.1 g



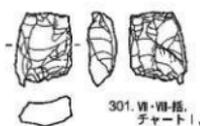
298. IX-9605,
チャート I,
17.6 g



299. IX-9666,
チャート I,
28.9 g



300. VII-81435,
流紋岩 II,
3.4 g



301. VI-VII-種,
チャート I,
3.7 g



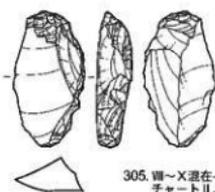
302. VII-82909,
ホルンフェルス,
5.7 g



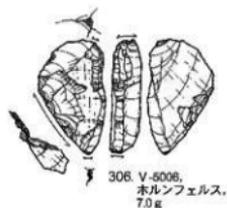
303. VII-81328,
チャート I,
6.5 g



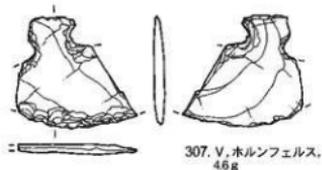
304. VII-81137,
流紋岩 I,
12.6 g



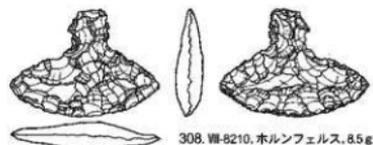
305. VII-X混在-481,
チャート II, 9.0 g



306. V-5006,
ホルンフェルス,
7.0 g



307. V, ホルンフェルス,
4.6 g



308. VII-8210, ホルンフェルス, 8.5 g



第27図 第VII～X層出土石器⑨(楔形石器・石匙) (2/3)

楔形石器 (第26図-287~295, 第27図-296~306)

小型品 (287~294) と大型品 (295~299), 側面観が略紡錘形を呈する一群 (300~306) など多様性に富む。前二者は決定器種としての楔形石器, 後者は石器製作工程に伴う副産物としての楔形石器との理解も成り立つ。

石匙 (第27図-307・308)

原位置遊離資料も含め, 二点を確認した。307は薄手の剥片を用い, 周辺にとどまる調整をくわえ仕上げている。308は素材となった剥片の一次剥離面をほぼ覆うまで, 丁寧な押圧剥離をくわえ形状を整えており, 対照的である。前者は時期不明であるが, 後者は出土層位から縄文時代早期に帰属するものと考えられる。

削器 (第28図, 第29図-317・318, 第37図402)

幅広剥片を素材とし, その縁辺に連続する剥離を施し刃部とする資料が一定量確認された。図では刃部を下に配置したが, 他遺跡において「尖頭削器」などと呼ばれているものに相当する。素材を供給する剥片剥離段階から二次加工に至るまで一貫する製作技術上の斉一性を認めうる点で注目される (309・310・312・313, 315~318)。他に鋸歯状を呈する大振りの剥離によって形成された刃部を持つ資料もわずかに観察される (311・314)。402は平坦な節理面で構成される大型の剥片状素材の縁辺に連続する剥離をくわえ, 刃部を形成している希有な資料である。

搔器 (第29図-319~325)

最終的な形態としては, 縦長剥片の末端にスクレイパーエッジを配置するチャート製の資料 (319・320) と流紋岩製を含む平面略円形の一群とが認められるが, 後者についても縦長剥片に類する素材を用い, 刃部再生を繰り返した結果を示す資料である可能性を指摘できる。器種の定形度が比較的高いことから, 素材供給の在り方としては安定した縦長剥片剥離技術の存在が窺える点で注目される。

搔削器 (第29図-326)

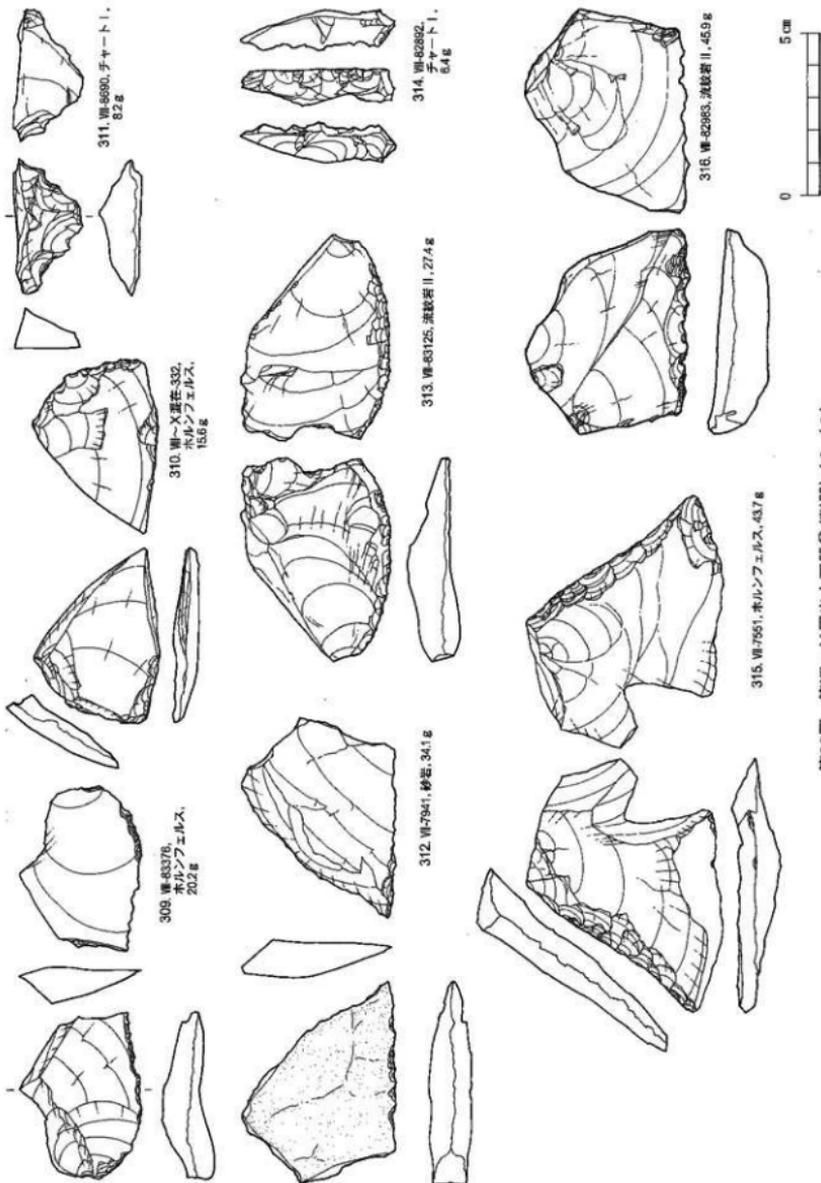
基本的な製作技術上の特徴を, 上記した搔器と同じくするが, 末端部のみならず, 両側縁部にも刃部形成を施す点, 素材剥片の主要剥離面側にも二次加工が及ぶ点などで若干異なる。素材に関しても, 搔器と同様の素材供給パターンによるものと理解される。

彫器 (第30図-327・328)

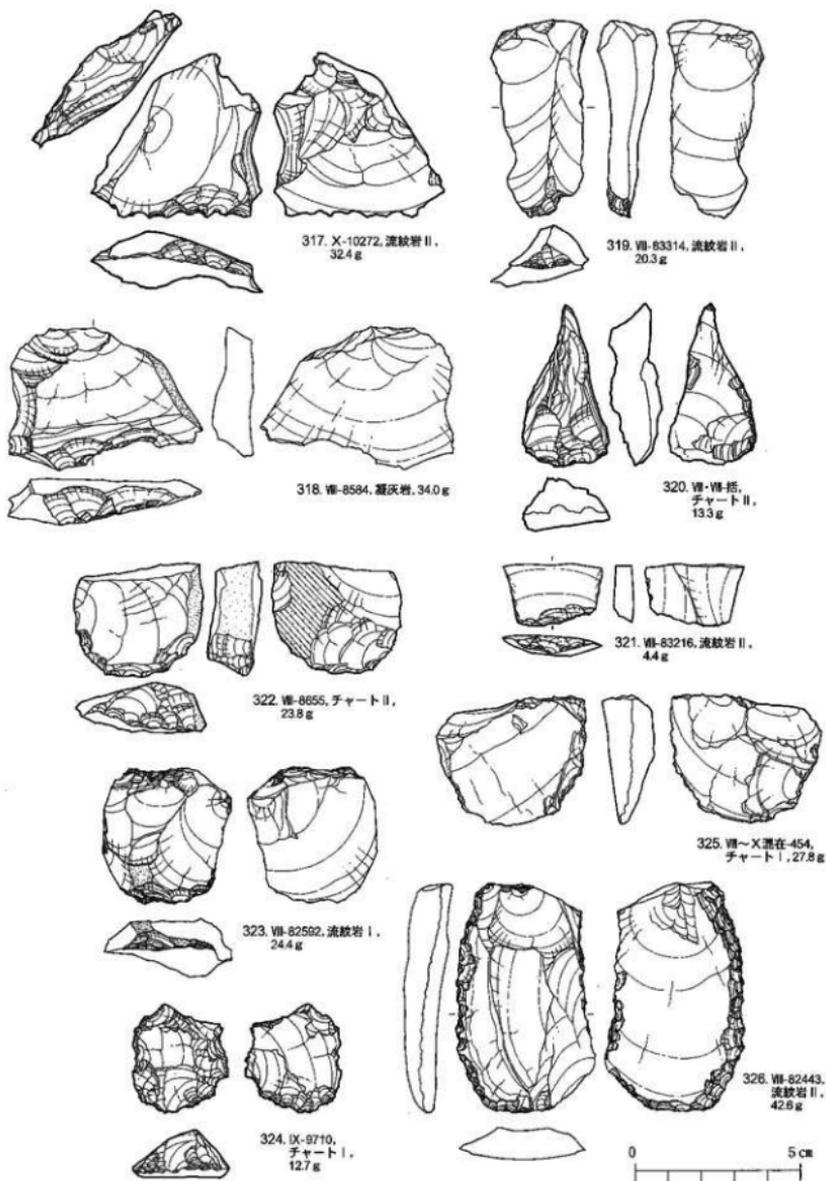
327は, 断面が略三角形の厚手の剥片を素材とし, その主要剥離面から背面に向けて二次加工を施し, 末端部から最低四枚の櫛状剥離を加えている。328は両面調整体から剥取されるような削片状の剥片に, やはりその末端部から最低三枚の櫛状剥離を施している。両者は素材にみる前処理は異なるものの, その他の技術的特徴には共通点も多く, 使用石材も類似していることから, 帰属時期を同じくする可能性が高い。

二次加工有る剥片 (第30図-329~336)

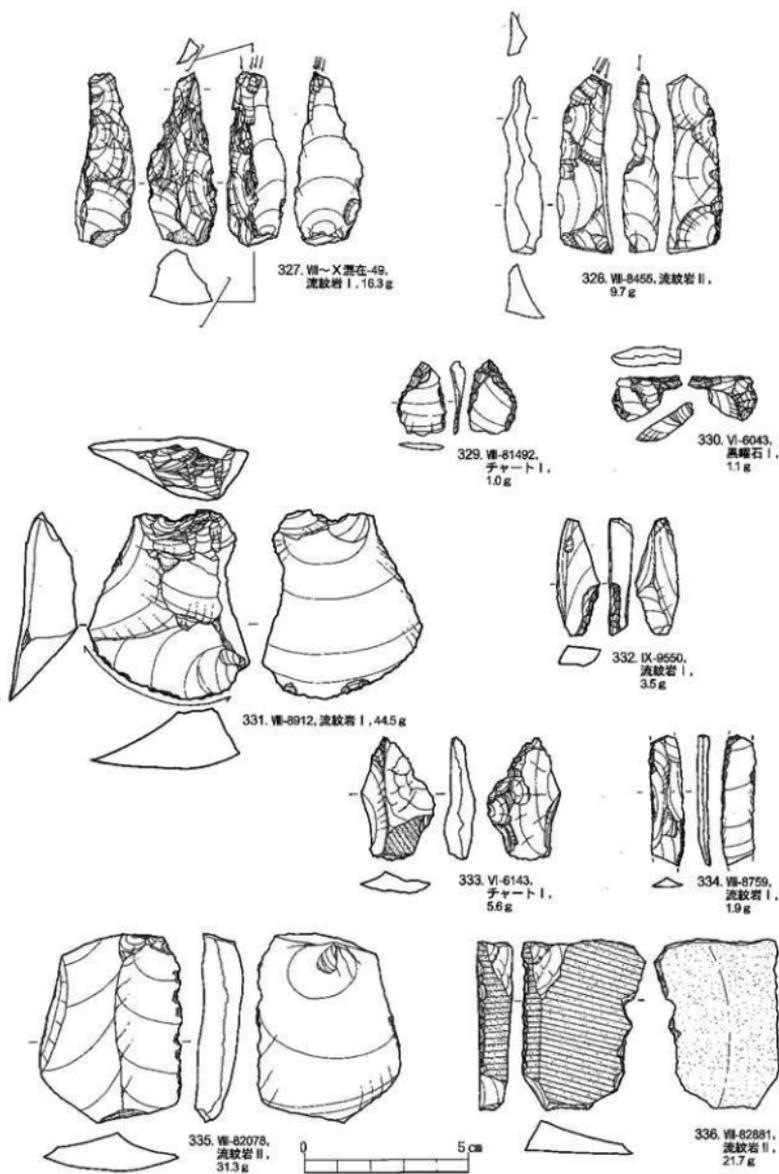
定型的器種に認定しにくい, 明確な二次加工を有する剥片を一括している。331や334~336は削器, 搔器的な機能・用途を想定可能であるが, 他は石鏃, 両面調整器などの製作途上品ないし失敗品である可能性を指摘できる。



第28図 第Ⅷ〜Ⅹ層出土石器⑩(附註)(2/3)



第29図 第VII～X層出土石器①(削器・掻器・掻削器) (2/3)



第30図 第VII～X層出土石器⑫(彫器・二次加工有る剥片)(2/3)

剥片 (第31・32図)

石材を問わず、多様な形態の剥片が認められるが、層的にはチャート製の資料は全層位を通じて間断なく存在するのに対し、流紋岩、ホルンフェルスなどの石材を用いたものは、相対的に第Ⅷ層、第Ⅸ層、第Ⅹ～Ⅹ混在層などの層準から集中して検出される傾向が看取される。なかでも、特筆されるのは、第Ⅷ層、第Ⅸ層、第Ⅹ～Ⅹ混在層から検出される点状・線状打面を有するか、打面面積の狭い小型剥片の存在である。これらの剥片の背面にみる剥離面構成と共存する器種との関係を勘案すれば、こうした資料は、尖頭器ないし両面調整石器の整形加工の際に生じる剥片(ポイントフレイク)と捉えるのが合理的である(第30図)。図示したものは、流紋岩製の資料に限ったが、他にチャート製の資料も一定量観察される。

石核 (第33～36図)

製作技術上の特徴から、便宜的にⅠ～Ⅲの三類に大別した。Ⅰ類とⅡ類は技術・形態的にも連続した範疇である。

Ⅰ類(第33・34図)…対向する二辺からの剥離、ないし打面転移を複数繰り返す特徴的な資料群である。打面は単剥離打面ないし節理打面が大多数を占めるが、打面と作業面が急角度に交差し、その稜上にツブレが観察されるものも目立つ。こうした痕跡からは両極打法の行使が窺われる。最終的な平面形態は多様であるが、素材となっているのは主に比較的厚みの少ない剥片と推定される。

Ⅱ類(第35図-382～390)…本類の生成過程は基本的にⅠ類と同様である。違いは、Ⅱ類の剥離の進行度がより高く、次第に両面調整器ないし尖頭状石器に連絡する様相を示す点にある。

Ⅲ類(第35図-391～398、第36図)…Ⅰ・Ⅱ類を除く資料群を一括した範疇であり、多様な特徴を有する資料を含んでいる。

敲石 (第37図-403・404、第38図-407～414)

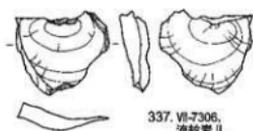
サイズや形態から、二、三の分類を設定しうるが、敲打痕の残存部位も加味すればさらに多様性が増す。403は複数の面に敲打痕が残り、凹部を形成する部位もあることから、継続的な使用または強い衝撃を生じる行為が想定しうる。404は破損資料ながら、残存する円礫の端部に比較的細かな単位の敲打痕がみられる。407は洋梨形の棒状礫を素材とし、面積の広い方の端部を使用する。410も同じく棒状礫を用いるが、面積が狭い端部を使用部位としている。408は亜角礫を素材とする点で他と大きく異なり、その稜上に敲打痕が観察される。409、411～413はサイズ、素材、使用部位ともに類似した資料群であり、共通した用途が推定できる。414は扁平な小型礫を素材とし、使用痕跡は顕著ではないが、敲石の可能性を指摘しておく。

磨石 (第38図-415・416)

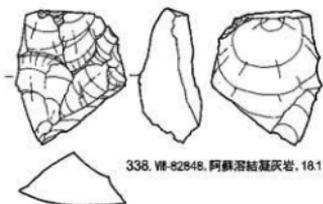
完形資料の存在を欠き、詳細は不明である。素材となった円礫の端部のみ残存する資料が二点確認された。観察可能な限りでは、石材、形態ともに両者に共通した特徴が認められる。

台石 (第37図-405・406)

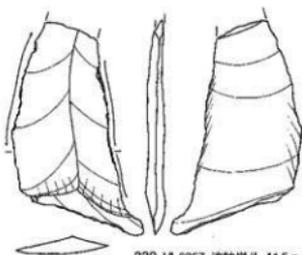
いずれも破損資料である。405は扁平な大型の板状礫を利用したものであり、表面には敲打によるものと思しき痕跡が認められる。406は浅く広い面積を持つ凹部が観察され、台石あるいは石皿としての機能・用途が想定される。



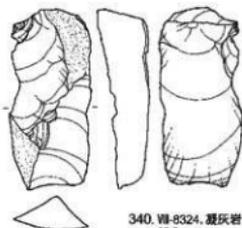
337. VII-7306.
流紋岩 II.
3.6 g



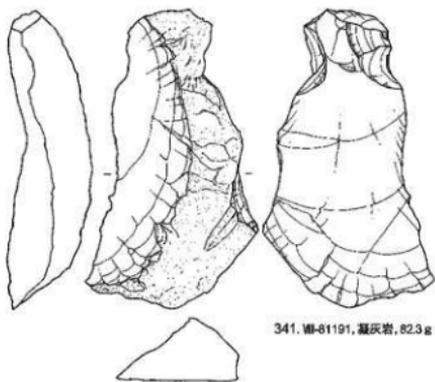
338. VII-82848. 阿蘇溶結凝灰岩. 18.1 g



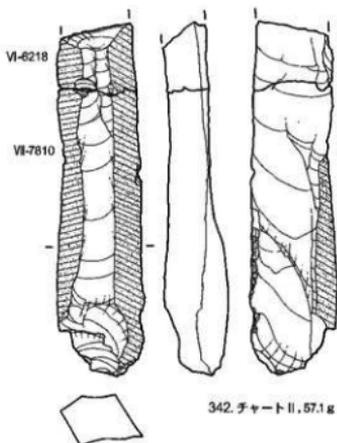
339. VI-6257. 流紋岩 II. 11.5 g



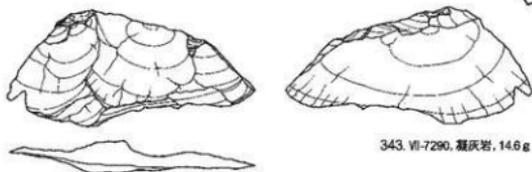
340. VII-8324. 凝灰岩.
18.3 g



341. VII-81191. 凝灰岩. 82.3 g



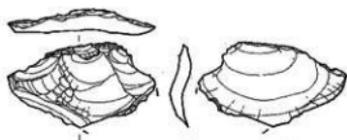
342. チャート II. 57.1 g



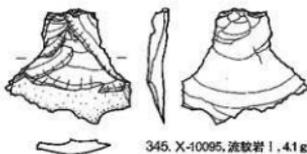
343. VII-7280. 凝灰岩. 14.6 g



第31圖 第VII~X層出土石器⑨(剥片) (2/3)



344. X-10183, 流紋岩 1.57 g



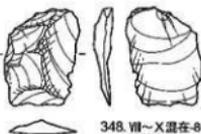
345. X-10095, 流紋岩 1.41 g



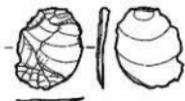
346. VII~X混在-157,
流紋岩 1.15 g



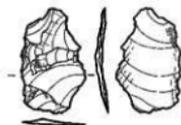
347. VII~X混在-377,
流紋岩 1.31 g



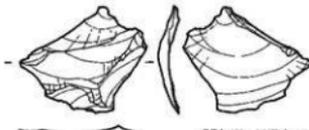
348. VII~X混在-80,
流紋岩 1.29 g



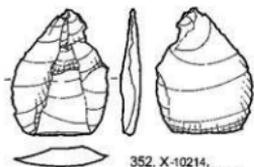
349. X-10074,
流紋岩 1.14 g



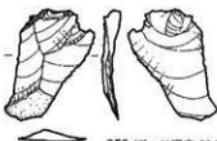
350. VII~X混在-386,
流紋岩 1.13 g



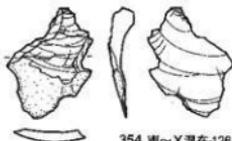
351. VII~X混在-138,
流紋岩 1.29 g



352. X-10214,
流紋岩 1.72 g



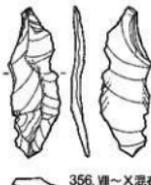
353. VII~X混在-204,
流紋岩 1.28 g



354. VII~X混在-126,
流紋岩 1.23 g



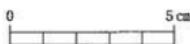
355. VII~X混在-457,
流紋岩 1.36 g



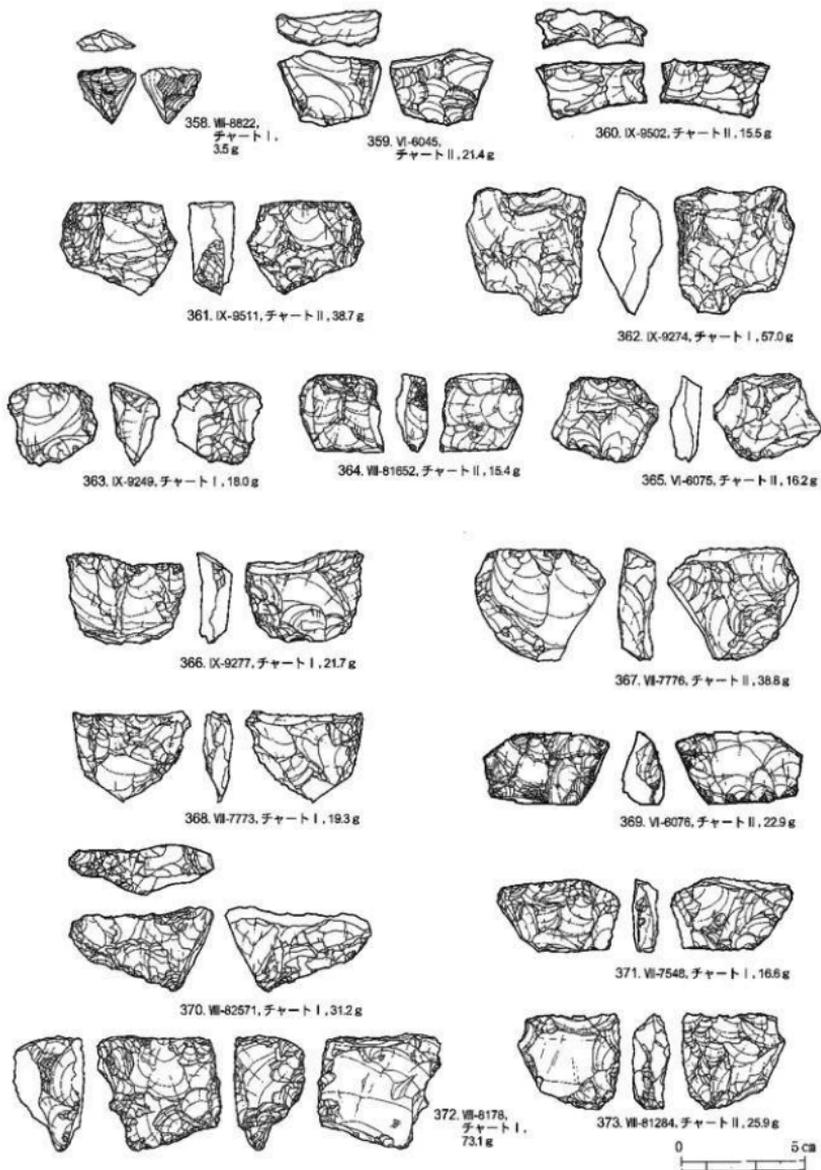
356. VII~X混在-239,
流紋岩 1.21 g



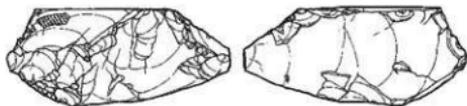
357. VII~X混在-141,
流紋岩 1.63 g



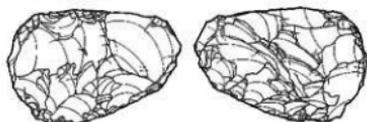
第32圖 第VII~X層出土石器④(制片) (2/3)



第33図 第VII～X層出土石器⑨(石核) (1/2)



374. W-7775, チャートII, 54.7g



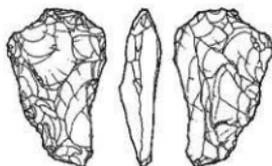
375. W-7582, チャートII, 48.7g



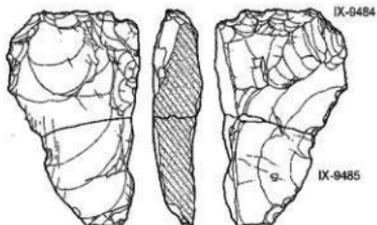
376. IX-9529, チャートI, 39.3g



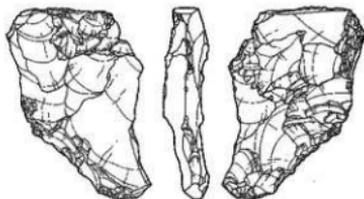
377. VI-7588, チャートII, 22.1g



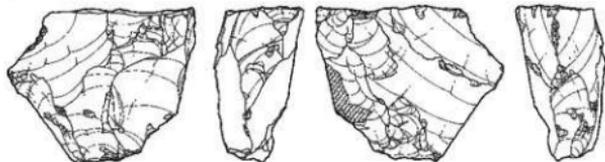
378. VI-6073, チャートII, 34.9g



379. チャートI, 94.9g



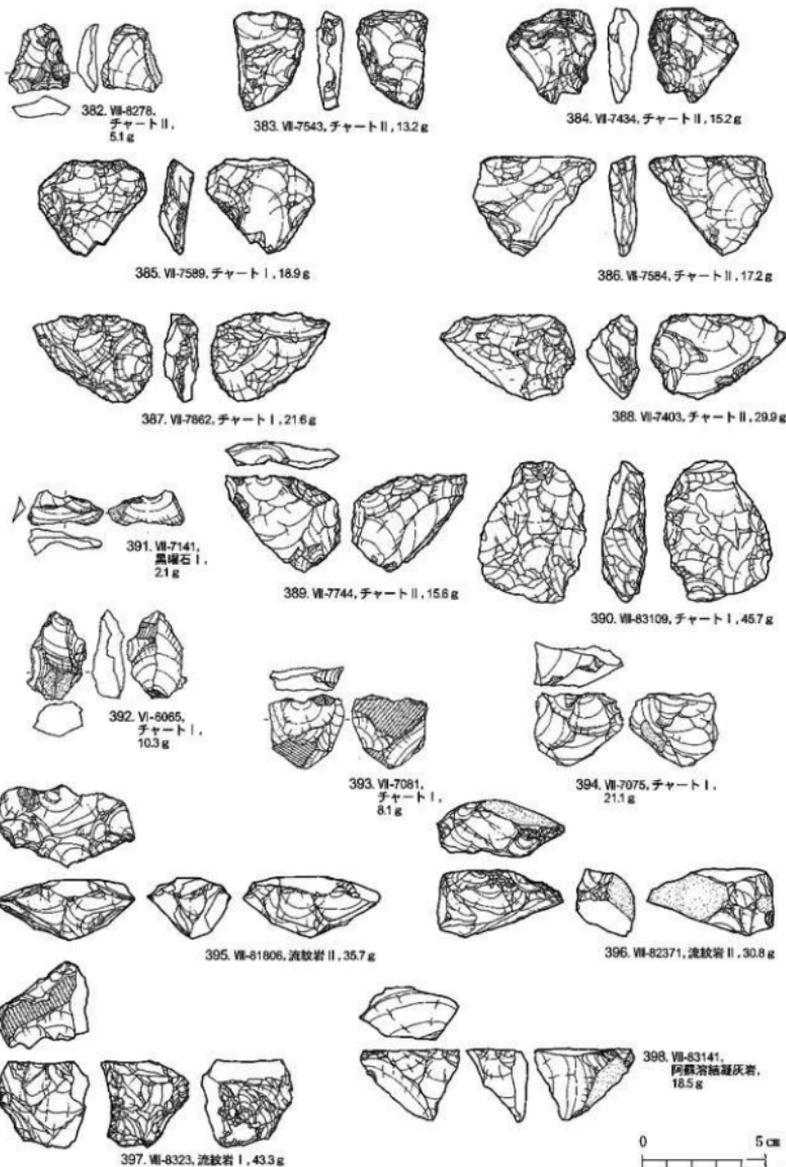
380. W-7578, チャートII, 59.6g



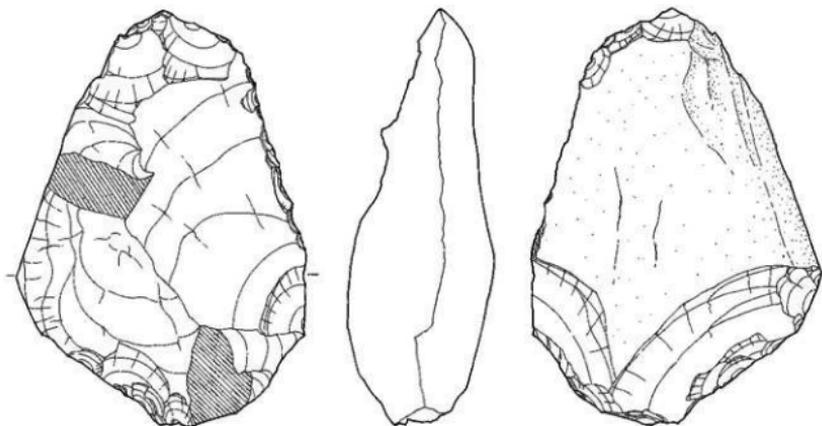
381. IX-9348, チャートI, 163.9g



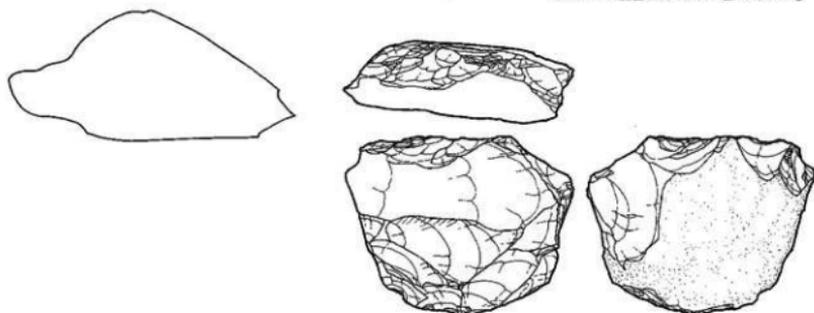
第34図 第VIII～X層出土石器⑩(石核) (1/2)



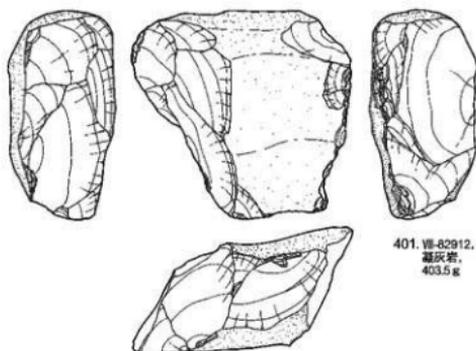
第35図 第VII～X層出土石器⑩(石核) (1/2)



399. VII~X混在-296, ホルンフェルス, 974.6g



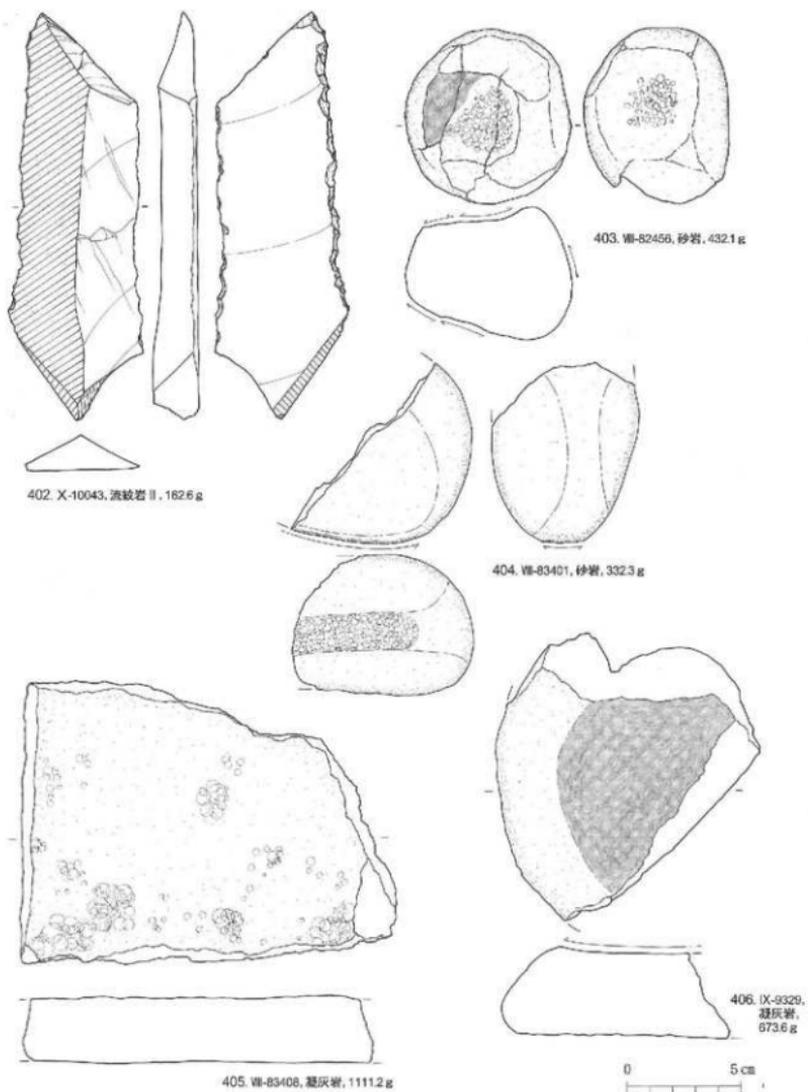
400. IX-9706, 凝灰岩, 263.4g



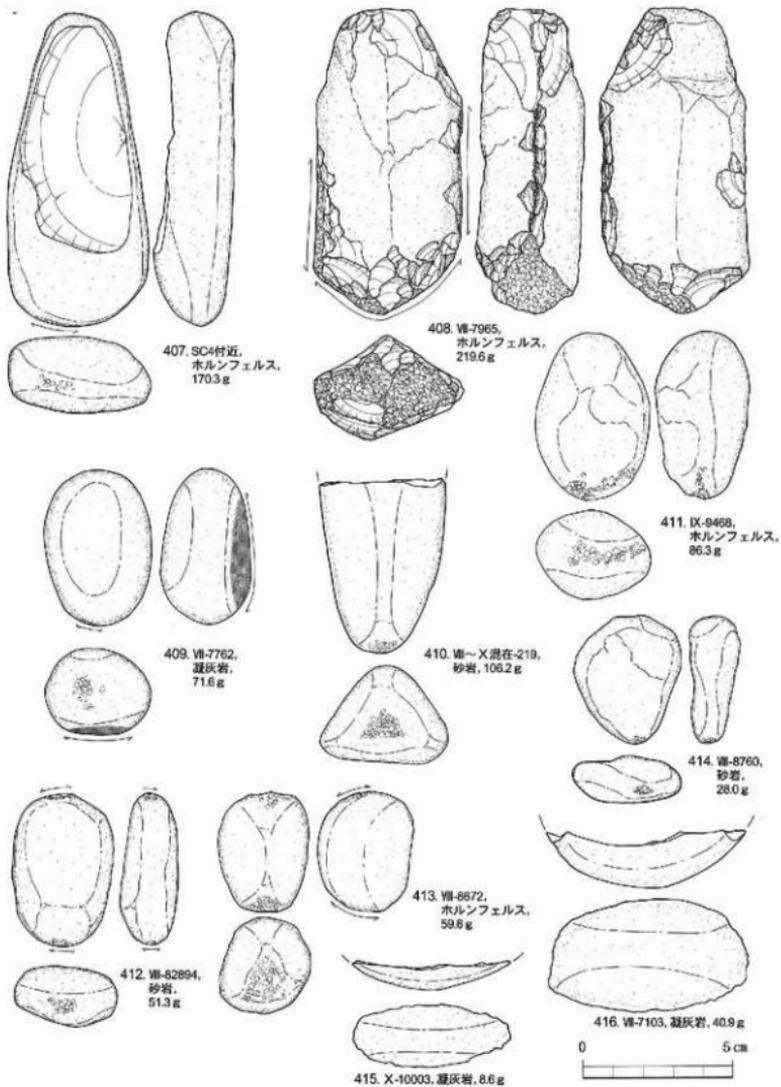
401. VII-82912,
凝灰岩,
403.5g



第36図 第VII~X層出土石器⑩(石核) (1/2)



第37圖 第VII~X層出土石器⑨(削器・磨石・台石)(1/2)

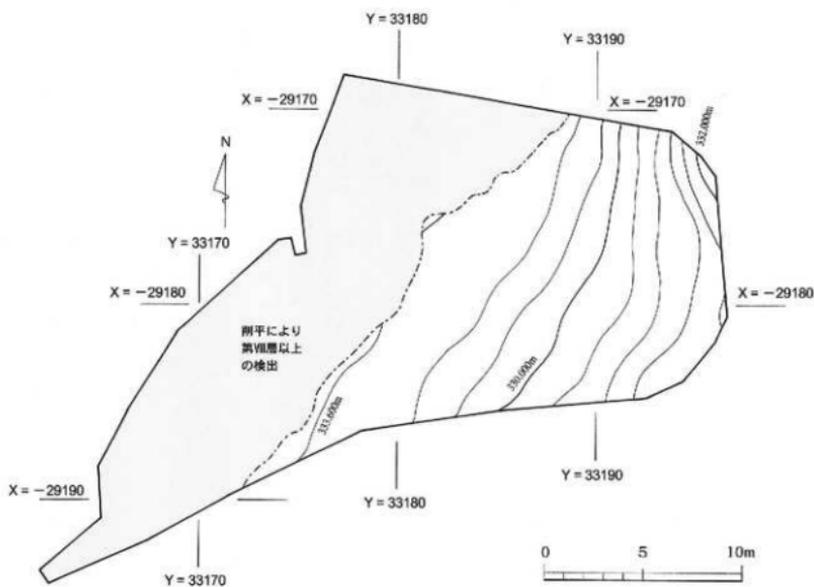


第38図 第VII～X層出土石器②(敲石・磨石) (2 / 3)

第7節 第VI層～第VII層の調査

阿蘇原上遺跡の基本層序において、第VII層は鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の堆積層である。第二章―第1節で記述したように、第VII層は、層厚が40～60cmと厚く、上部が黒褐色がかっており、土器・石器が出土した。一方、第VI層は下部から第VII層上部と同じ様相を呈するような土器・石器が出土した。このことから、第VII層上部は、第VII層の二次堆積層であり、第VI層との漸移層である。ここでは、同じ様相を呈する第VI層と第VII層について取り上げる。

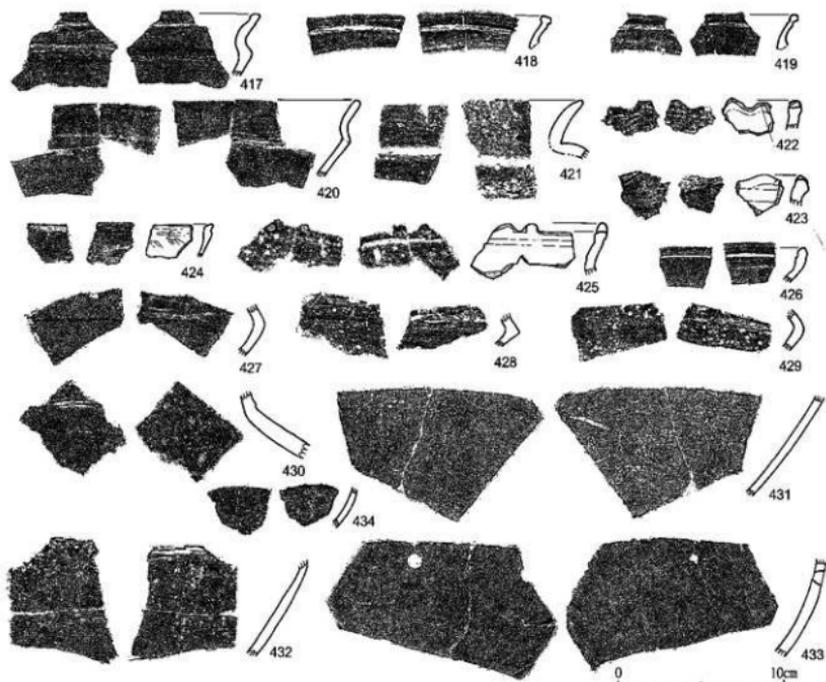
第VI層～第VII層からは遺構が検出されなかった。しかし、土器・石器類の遺物が出土した。以下に簡単ではあるが、若干の説明をおこなう。



第39図 第VII層上面検出状況図(1/250)

■土器 (第40図～第43図)

第VI層から第VII層にかけて、縄文時代晩期～弥生時代後期に位置付けられる土器が出土した。阿蘇原上遺跡土器分類（第I群～第IV群）の第III群と第IV群がそれぞれにあたる。ここでは、分類の基準と根拠を示し、若干の説明をくわえる。なお、本書に掲載した資料についての詳細は後述の観察表を参照されたい。



第40図 第VI～VII層出土土器①(第III群) (1/3)

■第III群 (第40図～第42図-417～453)

縄文晩期土器群である。基本層序の第VII層を中心として出土する。大きく精製と粗製の2種類あり、ⅢA類・ⅢB類に分類する。

ⅢA類…黒色磨研系の精製浅鉢を一括して扱う。器形等によって1～6の6類に細分が可能である。

(1) ⅢA 1類 (第40図-417～421) …直線的に開く口縁部と短く二度屈曲する頸部をもつ。417～421は口縁部～頸部である。417～419は口唇部を一度玉縁状に肥厚させるが、420・421は直口縁である。

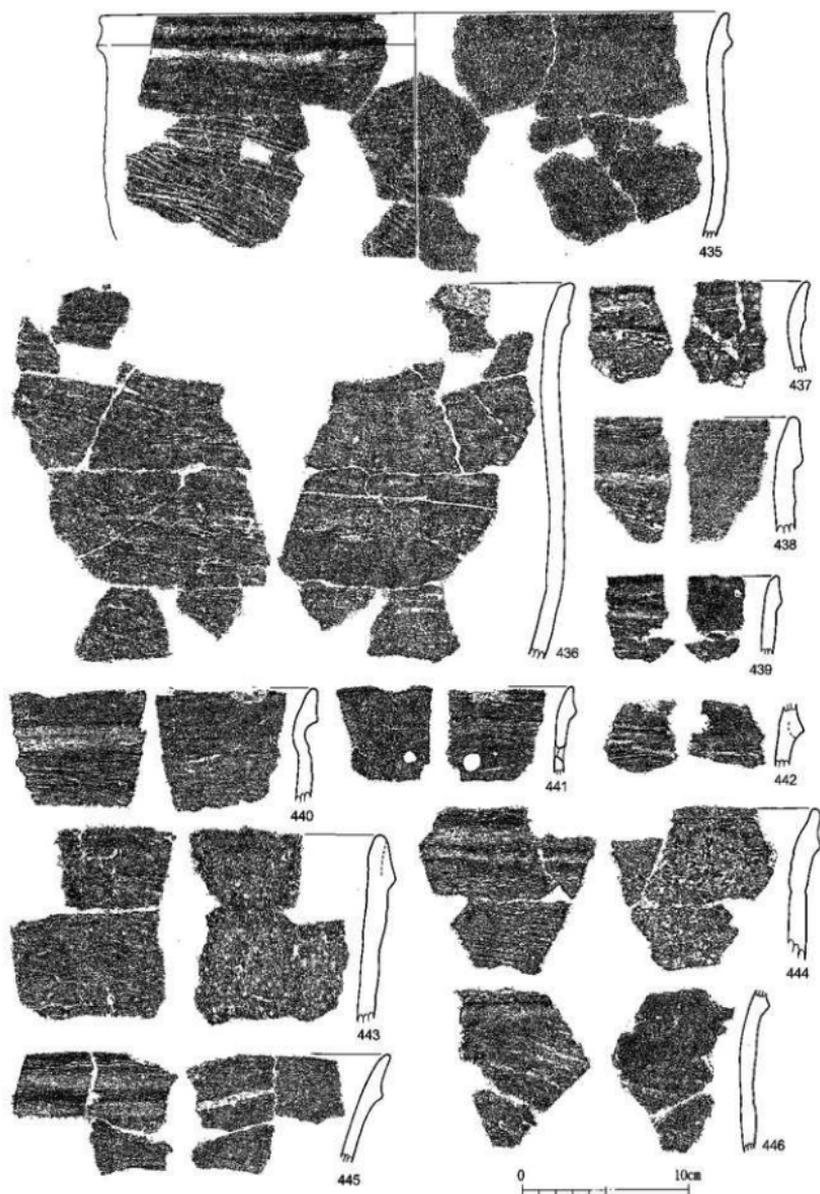
(2) ⅢA 2類 (第40図-422～425) …退化したりボン状突起をもつ口縁を一括して扱う。いずれも細片であり器形の判断が困難であるが、424の玉縁状の口縁部とくびれる頸部を参考にすれば、ⅢA 1類に類似するものと考えられる。

(3) ⅢA 3類 (第40図-426) …426は、口縁部片であり、内傾しながら立ち上がる。口縁端部には、内外面の沈線によって玉縁状の意匠が認められる。

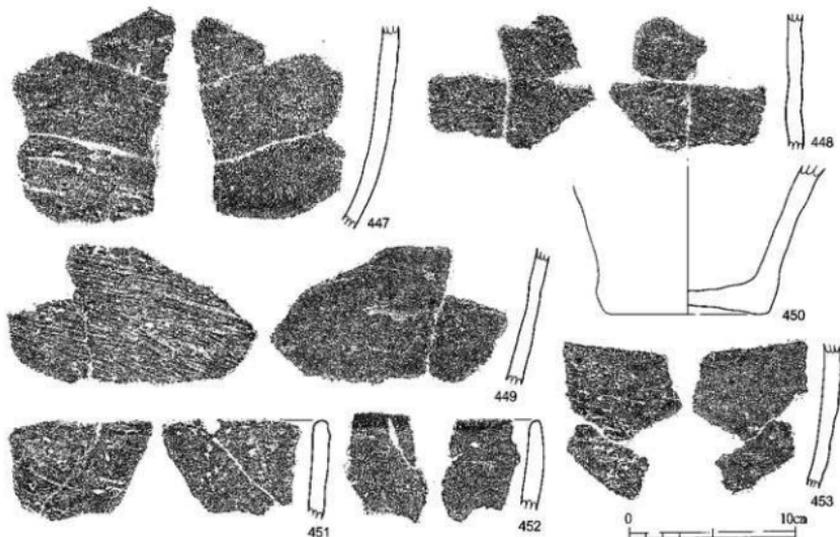
(4) ⅢA 4類 (第40図-427～430) …427～429は、胴部片であり、算盤玉のように大きく「く」字状に屈曲させている。430は、頸部～胴部片であり、427～429に比して器壁が厚く焼成が脆い。

(5) ⅢA 5類 (第40図-431～433) …431～433は胴部片である。明確な屈曲をもたず、底部にむかつて急激に窄むボウル状の器形と考えられる。433には穿孔が認められる。

(6) ⅢA 6類 (第40図-434) …小型の浅鉢の底部付近と考えられる。



第41圖 第VI~VII層出土土器②(第III群)(1/3)



第42図 第VI～VII層出土土器③(第III群)(1/3)

III B類…粗製深鉢土器を一括して扱う。器形等によって1～2の2類の細分が可能である。

(1) III B 1類 (第41図～第42図-435～450) …口縁部直下に幅15～25mm程度の無刻日突帯を1条めぐらす。突帯は断面三角形を呈する。器形は、突帯をもつ口縁部、一度緩やかにすばむ頸部、膨らんだ胴部、上底気味で平底の底部をもつ深鉢である。器面調整は、外面がナデの後に斜方向の粗い条痕を、内面は主に横方向のナデを施す。

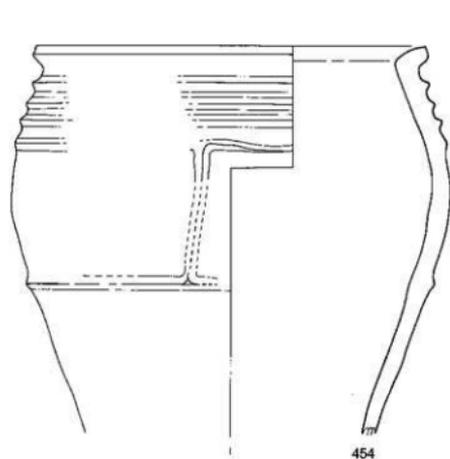
(2) III B 2類 (第42図-451～453) …口縁部は、断面形舌状を呈し、直立もしくは外反しながら立ち上がる。浅鉢ほど器高は低くないにせよ、III B 3類ほど高くないと考えられる。器面調整は、外面がナデの後に斜方向の粗い条痕を、内面は主に横方向の丁寧なナデを施す。

■第IV群 (第43図-454～455)

弥生土器を一括して扱う。基本層序の第VI層を中心として出土する。455は甕である。逆L字状の口縁部に張り出した胴部をもつ。口縁部下に横方向の4条の三角突帯、胴部に横方向の1条の三角突帯がめぐり、その間を縦方向の1条の三角突帯で繋ぐ。いわゆる工字突帯である。456は、二重口縁甕の口縁部であると考えられる。5条の櫛描波状文を施している。

■石器 (第43図-456～457)

456は、劈開性の顕著な片岩を用いた打製石斧である。刃部を一部欠損する。第VI層からの出土であり、重さ130.8gを測る。457も、劈開性の強い片岩を用いている。材質の特徴と、形態から弥生時代後期に属する磨製石斧の製作途上品と考えられる。第VII層からの出土であり、重さ13.9gを測る。



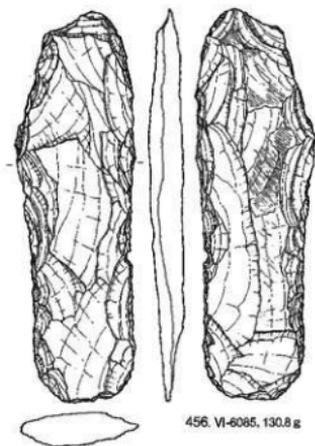
454



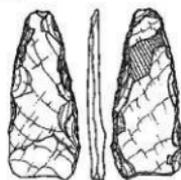
455



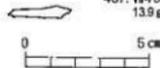
(454-455)



456. VI-6085, 130.8 g



457. VI-7603,
13.9 g



(456-457)

第43図 第VI~VII層出土遺物(第IV群・石器)(1/4)(1/2)

第三章 まとめ

前章までの記載にあるように、阿蘇原上遺跡では比較的少範囲の発掘調査面積ながら、複数の時代にわたる、多彩な考古資料の出土がみられた。本章では、各時代毎の特筆事項について、若干の言及をおこない、本遺跡の総括的評価とかえたい。

1 後期旧石器時代

第Ⅻ層出土の遺物が該当し、第Ⅺ層からの出土遺物の一部もこれに含まれる可能性がある。

本遺跡では、第Ⅶ層下部（アカホヤ火山灰）以下の基本層序において、時代決定の手懸かりとなる他の鍵層を欠くため、出土層位を基にした厳密な時期・時代の判別は困難である。ただし、後述する縄文時代草創期の細石刃石器群が第Ⅹ層・Ⅺ層を本来的な包含層とし、第Ⅺ層に下るに従ってその出土点数を減じる点、第Ⅺ層から第Ⅻ層にかけて、土壌が次第にローム質の度合いを高める点などを勘案すれば、第Ⅺ層およびⅫ層は後期旧石器時代の所産として大過ないものと考えられる。こうした判断の傍証として、ともに阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩を石材に用いる第Ⅻ層出土の石核と第Ⅷ層出土の二点の資料間において、著しい風化度の差が観察されることも挙げておこう。

該当する資料群には時間軸の指標となる種の遺物がなく、より限定した帰属年代の推定については、今後、近隣の地層観察、相当層における火山灰分析などによる所見の増加が望まれる。

2 縄文時代草創期

該当物には、隆起線文土器、爪形文土器、細石刃核、細石刃、尖頭器・両面調整石器・石鏃・楔形石器・石核の一部が挙げられる。以下に主な器種について解説し、その性格の一端を論じる。

隆起線（隆帯）文土器と爪形文土器について

草創期の十器は隆起線（隆帯）文土器（ⅠC類）と爪形文土器（ⅠA・B類）に二大別できる。

隆起線文土器は3点出土しており、カーブを描く垂下隆起線を有する40、口縁部を折り曲げるようにして隆帯をめぐらせる41など、ヴァリエーションに富む資料群である。40や42の隆起線上の加飾を観察する限り、宮崎平野部に所在する堂地西遺跡などと共通した様相が看取される。また、40・42と41とを見比べた場合には、隆起線（隆帯）上の加飾の有無という差がある一方で、いずれも口唇部に接して隆起線（隆帯）を配する共通点も窺われる。器厚や胎土においても三者は類似した様相を示しており、同時期ないしきわめて近接した時間的關係にあるものと推察される。

爪形文土器は爪形文残存の有無により、ⅠA・ⅠB各類に分かれるが、両者は同一個体を構成する各部分である可能性が高い。いずれも指腹による整形・器面調整を共通する技術的特徴として備え、爪形文を施文する土器（爪形文土器）と規定できる。これら爪形文土器は、事実記載の際の二大別とは別の分類観点である胎土と器厚にみる差異によっても二分され、ひとつは体部破片が①暗褐色を呈する薄手（2～3mm）のグループ（22・38・39）であり、ふたつには②明褐色を呈する相対的に厚手（4～6mm）のグループ（20・21・23～28）である。爪形施文の様相においても両者には差異があり、①のそれが比

比較的浅い施文にとどまり形状も直線的であるのに対し、②は爪形文が器面に深く食い込み、その形状も弧状を呈する。口縁・口唇部の特徴についても両者の比較を試みると、①には指先でつまみ横方向にナデを施したやや外反するもの(29~34)、口縁部が顕著に外反し口唇部もしくはこれに接する内面に刻みを施す(棒状工具か)もの(17・18)、平坦な口唇部に鋭く深い沈線状の刻みを施すもの(19)などヴァリエーションが豊富である。②には口縁部付近の残存に乏しく様相は不明瞭であるが、20に残るわずかな痕跡から推せば、①にも存在した棒状工具によるものと思しき刻みを口唇部に施すものを含んでいるようである。最後に器面に施文される爪形文の様相についてみると、①のそれが散漫・不規則な印象を与えるのに対し、②のそれはいずれも右上がりの同傾施文が多段にわたり横走する点が異なる。

以上の観察から、阿蘇原上遺跡の爪形文土器は明確に弁別される二者を包摂する資料群であることが明らかである。次に他遺跡出土例との比較を通じ、これに対する現時点での評価を定める。

九州島における爪形文土器の類別としては、西北部九州では著名な長崎県福井・泉福寺阿洞穴遺跡(文献①、②)のほか、東南部九州では鹿児島県上場遺跡、熊本県口島平B遺跡(文献③)、同県河陽F遺跡(文献④)などが挙げられるが、依然、検出例は少ない。各遺跡の爪形文土器は微妙に異なるが、本遺跡の該式土器を整理した観点から、比較検討をおこなった結果を以下に記す。

まず阿蘇原上の爪形文土器①は、泉福寺洞穴6層出土の資料のうち、大塚連郎が九州型式とした(文献⑤)資料に対比が可能である。とくに器壁の薄さ、口縁部の様相、爪形施文上の特徴の類似を重視した。また阿蘇原上の爪形文土器②に対比できるのは、上場遺跡2層出土資料であり、河陽F例も該当するかもしれない。これに対し、白鳥平B例については、報告者が指摘するように堂地西遺跡などの「南九州型」(文献⑥)爪形文土器との類似性が顕著である。

細石刃核について

阿蘇原上遺跡において確認された細石刃石器群は、主として細石刃核の技術・形態的特徴の観察から、いくらかの差異を認めつつも、概ね一定の時間幅に収まる一群であると推察される。

ここで検討の対象となるのは、前章に触れた四つの分類のうち、I・II類である。I・II類の細石刃核にみる技術・形態的特徴は、これまでの研究史に照らすならば、いわゆる西海技法に関連する資料群(文献⑦、⑧)、および備讃瀬戸地域を主分布域とする板状細石刃核と呼ばれる資料群(文献⑨)に類似性を有する。すなわち、ブランクの小口に細石刃剥離作業面を設定し、細石刃剥離の進行方向と直交する方向から打面形成・調整を施すという特徴を共有する細石刃核の一群である。

しかしながら、細石刃核個々の形態のみならず、その集合に着目するならば、阿蘇原上遺跡出土の細石刃核の一群は、また独自の様相を持つものと評価できる。ここで重要な位置付けにあるのは、本遺跡においてI類とした細石刃核の形態的特徴である。試みに、西北部九州および備讃瀬戸地域において細石刃核の多出が報じられている泉福寺洞穴・羽佐島の両遺跡出土資料を一瞥すると、I類と同様の技術・形態的特徴を持つ資料は散見されるものの、数量的には他の形態を凌駕することではなく、むしろ少数派といえる存在である。ところが、阿蘇原上遺跡においてはわずかに10数点の出土資料ではありながら、その過半数をI類が占めている。こうした現象への説明のひとつとして、これを地域性の顕現と捉える案が講じられよう。つまり、阿蘇原上遺跡に残された細石刃石器群は、西北部九州・備讃瀬戸地域を含めた広い地域に特定の時間幅内に展開した細石刃石器群のカテゴリーに含まれつつも、五ヶ瀬川流域という小地域性を表象する物質文化として機能した可能性が指摘しうるのである。この見解を裏打ちする

うに、本遺跡の細石刃石器群には西北九州産黒曜石や備讃瀬戸地域産のサヌカイト・安山岩が全く使用されず、もっぱら遺跡近傍において採取可能な水晶、チャート、流紋岩が用いられている。現在確認しているところでは、I類の細石刃核は宮崎県域においては北方町岩土原遺跡ほか近隣の二・三の遺跡からの出土が知られている。

尖頭器について

阿蘇原上遺跡において、唯一確認された完形状態を知りうる尖頭器（第21図183）について、九州島内にその類例を検索すると、長崎県百花台遺跡、泉福寺洞穴の資料が挙げられる。ただし、いずれの資料も縄文時代早期の押型土器に伴うか、もしくはその可能性が高い出土状況で検出されており、比定には問題が残る。本遺跡出土の尖頭器を縄文時代草創期の所産と考える最大の理由は、使用石材に少なからず流紋岩が含まれている事実である。五ヶ瀬川流域北方に流れる大分県大野川流域の先史時代遺跡における石材利用の変遷において、後期旧石器時代および一部縄文時代草創期に下る可能性も指摘される細石刃石器群には流紋岩が多用されるのに対し、以後の縄文時代早期段階では急速にその利用量を減じるという傾向については、つとに指摘されるところである。五ヶ瀬川流域における石材利用に関する知見（文献⑩）も加味して敷衍するならば、阿蘇原上遺跡出土の流紋岩製尖頭器についても、これを縄文時代早期のものとするよりも、縄文時代草創期に遡らせて理解するほうが適切と考える。他の尖頭器および両面調整石器に関して性急な判断は控えるが、少なくとも一部は縄文時代草創期に帰属する可能性を指摘しておく。

石鏃について

阿蘇原上遺跡において、本来の遺物包含層出土から出土した石鏃は計57点を数えるが、VII層下部以下出土のものは、縄文時代早期・草創期の混在の様相が顕著であり、厳密にこれらを分離することはかなわない。とはいえ、これまでの研究史における既存資料の位置付けや、出土層位などを考慮すれば、一部の資料に関しては縄文時代草創期の石鏃である可能性を積極的に評価できるものと考えられる。具体的にはI類とした資料群のうち、IX層やX層、VII・X層から出土している略正三角形の平面形態を呈する石鏃である（第24図215・216・218・230・232～234・240・245）。

各種遺物の共存関係について

これまでに述べてきた各種遺物について、大枠では縄文草創期という時間幅に帰属するものとしてきたが、最後にそれら相互の時間的先後関係について、現在指摘しうる限りの見解と課題を提示し、阿蘇原上遺跡の縄文草創期に対する当面の評価としたい。

代表的な遺物の編年的位置付けに関する結論を予め示せば、隆起線（隆帯）土器・爪形土器などの土器群と細石刃石器群、尖頭器は共存するものと考えられる。

まず、草創期土器群と細石刃石器群に共存関係を認める所以は、主として泉福寺洞穴の層位的所見に依るところが大きい。阿蘇原上遺跡の爪形文土器群については先述のごとく泉福寺洞穴の爪形文土器文化層6層に直接的に対比することが許されよう。爪形施文の方向性などに手法上の差異があるにせよ、3～4mmという器厚の薄さを達成する点などは編年的にきわめて近接した関係にあることを示唆している。そして、阿蘇原上遺跡出土の細石刃核の主要形態であるI・II類についての先述のような評価、すなわち北部九州～備讃瀬戸地域をカヴァーする大地域性に包摂される小地域性という位置付け、を与えることが妥当とすれば、本遺跡の爪形文土器と細石刃石器群は共存関係にある蓋然性が高いといえるの

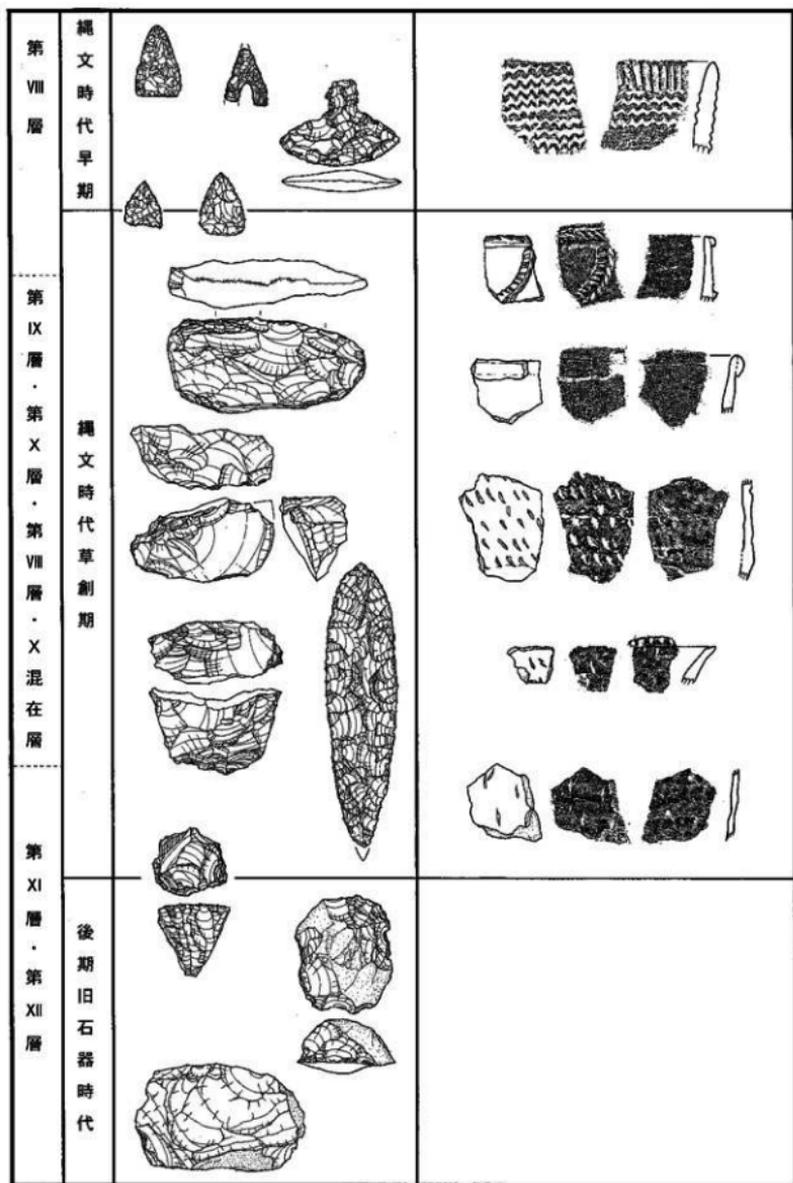
である。ところで、さきに述べたような爪形文系土器群にみる一律でない分布論的様相は、おそらくは往時における西北部九州と東南部九州の地域間交流の実態を幾ばくか反映したものと考えることもできる。そうした可能性と、南部九州の隆起線（隆帯）土器群の展開に関する昨今の議論を考慮するならば、阿蘇原上遺跡における草創期土器群の評価は一筋縄ではいかない。堂地西例に類似した隆起線文・隆帯文土器と二様の爪形文土器との時間的先後関係の確定に至るには、いまだ不明確な要素が多いといえる。ここでは、爪形文土器の二様相には共存関係を認め、隆起線文・隆帯文土器についても縄文時代早期への連続性を重視する見地から爪形文土器群と共存ないし後続する可能性を指摘するにとどめる。

尖頭器に関しては、細石刃石器群ほどには確定的な判断は下せない。とはいえ、これまでに明らかとなっている他遺跡の知見を参照することによって言及可能な事柄もある。本遺跡から出土した類の尖頭器に関しては、①土器出現期ないしいわゆる種子柴・長者久保文化並行期の所産と理解するか、それとも②それ以降の草創期土器群に伴うものなのか、あるいは③早期の押型土器期に帰属するのか、さしあたりこれら三つの可能性を挙げることができよう。予め評価したとおり、ここでは②の可能性について、他の二つの見解と照応させながら若干の論証を試みることにする。

①の可能性に関連する看過できない見解として綿貫俊一の所論がある（文献⑩）。ここで関連する内容のみ抽出すれば、氏が日之影町出羽洞穴Ⅲ層出土の尖頭器・斧形石器などの資料を九州における種子柴・長者久保文化並行期の成員と評価する点が重要である。その議論は一定の説得力を有するが、阿蘇原上例の解釈から、ここでは異なる可能性を提示したい。

出羽洞穴は流紋岩の原産地遺跡としての性格を有し、多数の石核・剥片類に伴って尖頭器・斧形石器の出土をみているが、阿蘇原上とは様相を違えいずれも粗めの剥離にとどまっており、製作途上品と考えることも可能である。阿蘇原上遺跡の近隣に所在する岩戸五ヶ村遺跡第2次調査においても類品の出土がみられ、また阿蘇原上遺跡においても第20図に掲載したような製作途上品と思しき資料の出土をみている。同質の流紋岩を素材とする点も加味して、試みに石器製作工程を仮定復元してみれば、たとえば【198+199+200】（第22図）→【185】（第21図）→【183】（第21図）とする想定などは理解しやすい。尖頭器ないしこれに類する両面調整石器の製作に伴う調整剥片が多数観察されることから、本遺跡の性格の一端として、石器製作行為がなされた空間を想像することが可能なのである。このことから、出羽洞穴をはじめとした原産地遺跡での尖頭器の母型製作工程と阿蘇原上遺跡などがその候補となる消費地遺跡での尖頭器完成工程という大局的理解が可能と考える。この両極の遺跡間には、なお細分される石器製作の異所的展開が想定され、岩戸五ヶ村遺跡の様相などがこれに該当するかもしれない。阿蘇原上遺跡における流紋岩製の細石刃核Ⅰ・Ⅱ類の存在を考え合わせれば、いま述べた解釈が当てはまる尖頭器製作の遺跡間連鎖が、縄文時代草創期の爪形文土器の時期に存在した可能性は充分に考えられるのである。

以上、阿蘇原上遺跡から垣間見られる縄文時代草創期の様相について、若干の推論をおこなった。本遺跡は全国的にみても貴重な爪形文土器出土例を付加したのみならず、伴う石器群の様相からも、今後の研究に資するところ多大な内容を擁する遺跡といえる。だが、数多くの資料に関して咀嚼しえた内容は、氷山のほんの一角に過ぎない。今後に期するところもまた大きい。



第44図 阿蘇原上遺跡 後期旧石器時代から縄文時代草創期出土遺物の様相

3 縄文早期土器について

本遺跡における縄文早期に属すると考えられる土器は、基本層序第Ⅷ層～第Ⅸ層を中心に出土する押型文土器と一部の無文土器である。以下に簡単ではあるが、その性格について若干の説明をくわえる。

押型文土器について

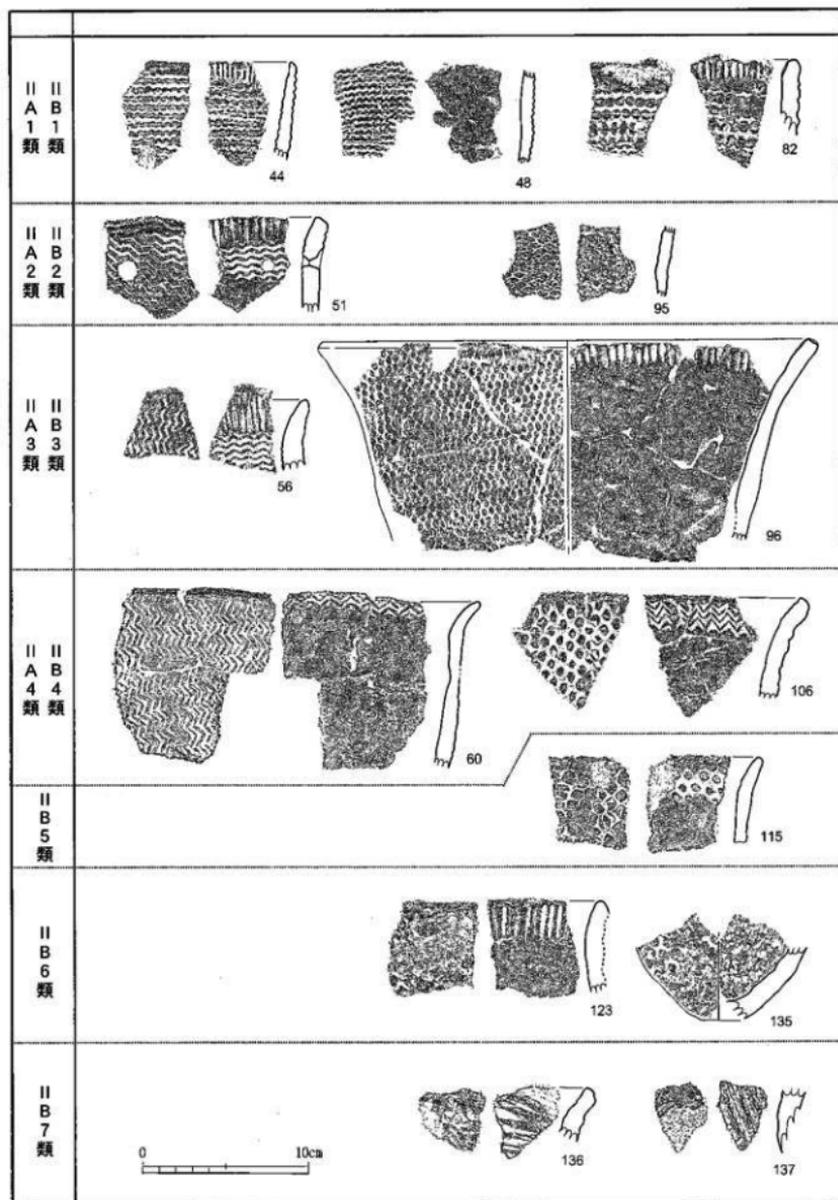
本遺跡における押型文土器は第Ⅱ群に大分類し、外面の押型文施文方法によってA～D類に中分類した。内訳の多くはA類の山形押型文とB類の楕円形押型文が主流を占める。更に、内外面の施文や器形によってA類は1～5類に、B類は1～7類に小分類を行った。分類の結果、A・B類に限らず、明確な線引きこそ難しいが、④～⑥の5つの観点において両極ともいえる傾向が看取できる。5つの観点とは、④器壁（薄い⇔厚い）、⑤口縁形態（直立もしくは内傾⇔外反）、⑥外面押型文方向（横方向⇔縦方向）、⑦内面施文（短い原体条痕+帯状の押型文⇔帯状の押型文）、⑧押型文間隔（狭い⇔広い）である。

5つの観点のうち、左側の要素に属する、つまり④薄い器壁⑤直立もしくは内傾する口縁部⑥横方向の押型文⑦短い原体条痕+帯状の押型文⑧狭い間隔の押型文の土器は、本遺跡の分類ではⅡA1類とⅡB1類が該当する。この特徴をもつ土器を先学に照らし合わせてみると、東九州～中九州の押型文型式の一つ「早水台式土器」（文献⑩）に比定される。

逆に5つの観点のうち、右側の要素に属する、つまり④厚い器壁⑥外反する口縁部⑥縦方向の押型文⑦帯状の押型文⑧広い間隔の押型文の土器は、本遺跡の分類ではⅡA4類とⅡB4類・ⅡB5類が該当する。この特徴をもつ土器を先と同じく先学に照らし合わせてみると、東九州の押型文型式の一つ「下管生B式土器」（文献⑩）に類すると思われる。しかし、短く外反する口縁や原体条痕のない帯状の押型文をもつ内面施文を見ると、「下管生B式土器」と類似しているものの若干異なる。そこで、東九州から少し目を広げて見ると、中九州西部（熊本県域）を分布域の中心とする「沈目式土器」（文献⑪）に類するようである。

また、この5つの観点の中間的要素ともいえるⅡA2類・ⅡA3類・ⅡB1類・ⅡB3類は、「下管生B式土器」の範疇に入ると考えられる。更にⅡB4類・ⅡB5類より厚い器壁と間隔の広い網目状押型文をもち、内面に長めの原体条痕のみの施文をもつ丸底のⅡB6類とⅡB7類の土器がある。これらは、東九州～中九州の押型文型式の一つ「田村式土器」（文献⑩）に類すると思われる。

こうして考えると、本遺跡第Ⅱ類土器群の押型文土器群は、概ね「早水台式土器」「下管生B式土器」「沈目式土器」「田村式土器」に大別できる。これらを従来の編年観（文献⑩、⑪）に照らし合わせると、「早水台式土器」→「下管生B式土器」→「沈目式土器」→「田村式土器」という型式組列が成立する。ただし、「沈目式土器」と「田村式土器」は両者とも「下管生B式土器」から派生したと考えられ、「沈目式土器」と「田村式土器」は、必ずしも時期差を示すとは限らず、系統差・地域差を示すとも考えられる。ともあれ、本遺跡の押型文土器群は、中九州地域に広く分布する「早水台式土器」・「下管生B式土器」、中九州西部に分布する「沈目式土器」、中九州東部に分布する「田村式土器」を併せもつ。このように、中九州西部的要素と東九州～中九州東部的要素をもつ阿蘇原上遺跡の押型文土器群は、中九州の西部と東部の中間地域に立地する地理的要因を如実に反映しているといえよう。



第45圖 阿蘇原上遺跡 縄文時代早期押型文土器分類圖(1/3)

無文土器について

基本層序の第Ⅶ層～第Ⅸ層において、数量的には少ないが、押型文土器に共伴すると考えられる無文土器（本遺跡分類のⅡD類）が出土した。ⅡD類は、焼成・器形・調整方法によって更に1～3に小分類した。ⅡD1類は、あまい焼成・直立もしくは内湾する口縁部・内外面に指ナデによる調整をもち、良好な焼成・外反し肥厚した口縁部・内外面に比較的丁寧なナデ調整をもつⅡD3類と対照的である。また、ⅡD2類は、器形・調整方法がⅡD1類と類似しているが、焼成はⅡD3類と類似している。ⅡD2類は、両者の中間的な形態ともいえるが、ⅡD1類により近い形態であるといえる。

これらを出土層位の観点から考えると、ある程度の傾向が看取される。155～164のⅡD類のうち、第Ⅶ層と第Ⅷ層の漸移的層より出土した156を除いて、全て第Ⅶ層と第Ⅸ層から出土した。同じ第Ⅶ層でも、ⅡD3類の163以外の土器は、第Ⅶ層の下部から出土しており、古い様相を呈する。少量の土器から判断することは難しいが、編年的には「ⅡD1類」→「ⅡD2類」→「ⅡD3類」と推定することができる。

次に、これらの無文土器と押型文土器との共伴関係の問題が残る。ⅡD1類やⅡD2類と同じく第Ⅶ層下部～第Ⅸ層にかけて出土する押型文土器は、ⅡA1類やⅡB1類のような「早水台式土器」が主流であり、ⅡD1類・ⅡD2類土器との共伴が考えられる。しかし、編年的に前後関係にあると考えられるⅡD1類とⅡD2類が「早水台式土器」とどう共伴するか、ⅡD3類がどの押型文土器と共伴するか、の2点については、現段階で詳細まで述べることは難しい。

4 縄文晩期土器について

第Ⅵ層下部～第Ⅶ層にかけて、縄文の晩期と考えられる土器群（第Ⅲ群）が出土した。同じ土器群でも、精製磨研系浅鉢形土器（ⅢA類）と粗製深鉢形土器（ⅢB類）に中分類できる。

ⅢA類は、その殆どが南九州の晩期土器型式のひとつ「黒川式土器」（文献-⑭・⑮）に類する土器と考えられる。ⅢA1類の418・419のように頸部と口縁部が明確でない器形やⅢA2類の口縁部のリボン状突起、ⅢA4類の屈曲した胴部などは黒川式土器の浅鉢形土器の特徴ともいえよう。しかしながら、ⅢA1類の一部（417・420・421）は、口縁部～頸部が長く、他の土器より若干時期が遡る可能性がある。

ⅢB1類は無刻目突帯文土器である。同じ高千穂町内でも、岩戸五ヶ村遺跡（文献⑤）・神殿B地区遺跡（文献-⑯）・神殿C地区遺跡（文献-⑰）・南平第3遺跡（文献-⑱）・岩坪平遺跡（文献-⑲）など数多くの遺跡で見受けられる。また、このタイプの土器は、熊本北部にも多く分布し、熊本県旭志村のワクド石遺跡（文献-⑳）などで類似した例が見受けられる。ⅢA類同様、黒川式土器に類すると考えられるが、中九州に集中して確認される土器型式である。

第Ⅲ群の土器は、ヴァリエーションこそあるが、その殆どが黒川式土器、もしくはその併行期中の九州特有の土器型式の範疇に入り、ある程度時期のまとまった資料であると考えられる。

【引用参考文献】（敬称略）

- 文献① 藤木義昌・芹沢長介 1965 「長崎県福井洞穴」『考古学集刊』第3巻第1号 東京考古学会
- 文献② 麻生 優 編 1985 『泉福寺洞穴の発掘記録』 築地書館
- 文献③ 熊本県教育委員会 1994 『白鳥平B遺跡 九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う埋蔵文化財調査』
熊本県文化財調査報告書142集
- 文献④ 岡本真也 2001 「熊本県阿蘇郡長陽村河隔F遺跡の調査」『九州の貝塚』九州縄文研究会
- 文献⑤ 大塚達朗 1989 「草創期の土器」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館
- 文献⑥ 児玉健一郎 1999 「南九州を中心とする陸帯土器の幅年」『鹿児島考古』第33号 鹿児島県考古学会
- 文献⑦ 藤木義昌・間壁忠彦 1965 「九州地方の先土器文化」『日本の考古学Ⅰ 先土器時代』河出書房
- 文献⑧ 織笠 昭 1990 「西海技法の研究」『東海大学紀要』第54号 東海大学文学部
- 文献⑨ 森 格也 1995 「備讃瀬戸地域における縄石刃文化終末期の様相—花見山町細石刃核の検討—」『研究紀要』Ⅳ
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 文献⑩ 桑畑光博 1997 「第2章 第6節 縄文人の社会と生活 二 交易」『宮崎県史』通史編 原始・古代Ⅰ 宮崎県
- 文献⑪ 綿貫俊一 1992 「長者久保・神子集文化並行段階の九州」『古文化叢書』第18集 九州古文化研究会
- 文献⑫ 坂本嘉弘 1998 「東九州の押型土器研究の現状と課題」『九州の押型土器-論攷編-』九州縄文研究会
- 文献⑬ 木崎康弘 1998 「中九州西部押型土器の幅年」『九州の押型土器-論攷編-』九州縄文研究会
- 文献⑭ 堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—」『鹿児島考古』第31号
鹿児島県考古学会
- 文献⑮ 高千穂町教育委員会 2000 『岩戸五ヶ村遺跡』高千穂町文化財調査報告書第12集
- 文献⑯ 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 『神陵遺跡B・C地区 南平第3遺跡 南平第4遺跡 中ノ原遺跡』
宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
- 文献⑰ 高千穂町教育委員会 2000 『岩坪平遺跡』高千穂町文化財調査報告書第13集
- 文献⑱ 熊本県教育委員会 1994 『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告書第144集

番号	種別	器種 部位	出土 地点	手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		
17	縄文土器 深鉢	口縁部	東郷表浜	口縁部は浅い斜肩・ナゲ・白塗方向(1に斜方向)の爪形文	ナゲ	黄灰	黄灰	1mm以下の灰白色を含む	
18	縄文土器 深鉢	口縁部	東郷表浜	口縁部は浅い斜肩・ナゲ・斜方向の爪形文	ナゲ・全体に浅い山凹	黒陶	黄灰	1mm以下の灰白色を含む	
19	縄文土器 深鉢	口縁部	東郷表浜	口縁部は浅い斜肩(爪形ナゲ)・ナゲ	ナゲ	黒陶	黄灰	1mm以下の透明灰白色を含む	
20	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	口縁部は浅い斜肩(爪形ナゲ)・ナゲの後に縦方向の爪形文	ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰・灰白色を含む	黒炭
21	縄文土器 深鉢	胴 部	東郷表浜	ナゲの後に縦方向の爪形文	ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の透明・灰白色の粒を含む	黒炭・スス付
22	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	ナゲ・縦方向に爪形文	ナゲ	黒	黒	1mm以下の透明・灰白色の粒を含む	スス付
23	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	ナゲの後に縦方向の爪形文	ナゲ	にぶい黄焼	黄灰	1.5mm以下の黄焼・透明を含む	黒炭
24	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	ナゲ・指押さえ・斜方向の爪形文	ナゲ・指押さえ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の黄焼・透明灰白色を含む	黒炭
25	縄文土器 深鉢	胴 部	東郷表浜	ナゲの後に縦方向の爪形文	ナゲ	にぶい黄焼	灰黄焼	1mm以下の暗赤褐色・灰白色の粒を含む	黒炭
26	縄文土器 深鉢	胴 部	東郷表浜	ナゲの後に縦方向の爪形文	ナゲ	にぶい黄焼	灰黄焼	0.5mm以下の黄焼・透明の粒を含む	黒炭
27	縄文土器 深鉢	胴 部	東郷表浜	ナゲの後に縦方向の爪形文	ナゲ	黄	にぶい黄焼	0.5mm以下の黄焼・透明・灰白色の粒を含む	
28	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	ナゲの後に縦方向の爪形文	ナゲ・指押さえ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の黒色粒状灰・灰白・黄褐色を含む	
29	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	ナゲ	ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白・黒色粒を含む	
30	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	ナゲ・指押さえ	指押さえ	暗灰黄	暗灰	1mm以下の灰白・黒色粒を含む	
31	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	ナゲ・指押さえ	指押さえ	黒陶	黄灰	0.5mm以下の灰白色粒を含む	スス付
32	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	縦方向のナゲ	ナゲ	黒陶	暗灰	0.5mm以下の灰白色粒を含む	
33	縄文土器 深鉢	口縁部	東郷表浜	口縁部に横位の爪形文・縦方向のナゲ	不定方向のナゲ	灰黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白色粒を含む	
34	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	縦方向のナゲ	縦方向のナゲ	黄灰	にぶい黄焼	1mm以下の灰白色粒を含む	
35	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	縦方向のナゲ	縦と縦方向のナゲ・指押さえ	黒陶	にぶい黄焼	1.5mm以下の灰白・黒色粒状・4mm以下の黄褐色を含む	スス付
36	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	斜方向のナゲ	斜方向のナゲ・指押さえ	灰黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白色粒を含む	スス付
37	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	不定方向のナゲ・指押さえ	不定方向のナゲ・指押さえ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の黒色粒・3mm以下の灰白・黄褐色を含む	スス付
38	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	不定方向(主に斜方向)の爪形文・指押さえ	不定方向(主に斜方向)の爪形文・指押さえ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の暗赤・黄・灰白色を含む	スス付
39	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	不定方向(主に斜方向)の爪形文・ナゲ	不定方向(主に斜方向)の爪形文・ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白・白色粒状を含む	スス付
40	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	斜位に眉目まもつ貼付突起・ナゲ	ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白・透明・黄褐色を含む	外面にスス付
41	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	口縁部に貼付突起・ナゲ	ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白・透明・黄褐色を含む	外面にスス付
42	縄文土器 深鉢	口縁部	東郷表浜	斜位の眉目・ナゲ	初編のため不明	にぶい黄焼	—	0.5mm以下の透明・黄褐色を含む	突帯部
43	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	縦方向の帯体条痕・山形押型文	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白・透明・黄褐色・2mm以下の黄褐色を含む	
44	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	縦方向の帯体条痕・山形押型文	黄灰	にぶい黄焼	1mm以下の灰白・黄・黒色粒・2.5mm以下の乳白色を含む	
45	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	縦方向の帯体条痕・山形押型文	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白色・2mm以下の灰白・灰白色を含む	
46	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	山形押型文・ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1.5mm以下の白色粒状を含む	
47	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	山形押型文・横方向のナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の白色粒状・2mm以下の白色・黒色・灰白色の粒を含む	
48	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	山形押型文	斜方向のナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	5mm以下の黄褐色の粒・1mm以下の白色・黒色粒状を含む	
49	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	山形押型文	ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の黒色透明・黄焼・無色透明粒を含む	
50	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	山形押型文	縦方向ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	2.5mm以下の黄褐色粒・1.5mm以下の黒色粒・白色粒状を含む	
51	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文・穿孔	帯体条痕・山形押型文・横方向のナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	3mm以下の黄褐色粒・2mm以下の灰白色を含む	
52	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	山形押型文・横方向のナゲ	黒陶	灰黄	1mm以下の灰白・黄・透明灰白色を含む	スス付
53	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	山形押型文	ナゲ	にぶい黄焼	黒	1mm以下の透明・灰白・白色粒を含む	スス付
54	縄文土器 深鉢	胴 部	双葉中	山形押型文	斜方向のナゲ	黄灰	にぶい黄焼	1mm以下の灰白・黄・透明粒を含む	
55	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	山形押型文・横方向のナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	3mm以下の黄褐色・黒色粒状・白色粒状を含む	
56	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	帯体条痕・山形押型文	にぶい黄焼	にぶい黄焼	1mm以下の灰白・透明・黄褐色の粒を含む	
57	縄文土器 深鉢	口縁部	双葉中	山形押型文	山形押型文・ナゲ	にぶい黄焼	にぶい黄焼	2mm以下の灰白・透明・黄褐色の粒を含む	

第3表 出土土器観察表①

番号	種別	器種部位	出土地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
58	縄文土器 深鉢	胴部	IX層中	山形押型文	横方向のナデ	橙	黒褐	2~3mm程の灰色粒を含む。1mm以下の透明・白・黄緑・褐色・灰白色を含む	黒炭
59	縄文土器 深鉢	胴部	V層中	山形押型文	斜方向のナデ	橙	灰黄	2mm以下の灰白・透明・黄緑・褐色の粒を含む	
60	縄文土器 深鉢	口縁部 ~胴部	V層中	山形押型文	ナデ・斜方向の器ナデ	明赤褐	橙	3mm以下の赤・白・褐色・灰色・白色透明粒を含む	スス付録
61	縄文土器 深鉢	口縁部 ~胴部	V層中	山形押型文	山形押型文・粗いナデ	にぶい黄緑	にぶい黄	2mm以下の白・黄色透明・白色半透明粒。4mm以下の白色透明粒を含む	スス付録
62	縄文土器 深鉢	口縁部	IV層中	山形押型文	山形押型文・横方向のナデ・横筋?	赤褐	灰黄褐	2mm以下の黒色粒・灰色・無色透明・白色・灰色粒を含む	
63	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	山形押型文	ナデ	にぶい赤褐	赤褐	3mm程の白色粒。2mm以下の白・黒・褐色透明粒を含む	
64	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	山形押型文	山形押型文・横方向のナデ	にぶい赤褐	明赤褐	2.5mm以下の白・褐色粒・灰色・無色透明・白色透明粒を含む	
65	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	山形押型文	山形押型文・ナデ	橙	にぶい赤褐	3mm前後の白色粒。1mm以下の褐色粒・灰色透明粒を含む	
66	縄文土器 深鉢	口縁部	IX層中	山形押型文・横方向のナデ	山形押型文・ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	3.5mm以下白・赤・褐色粒・灰色透明・白色半透明粒を含む	
67	縄文土器 深鉢	口縁部	トレンチ中	山形押型文	山形押型文	黄褐	黄褐	4mm以下の白色透明粒・灰・褐色粒・灰色透明粒を含む	スス付録
68	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	山形押型文	口唇部付近に山形押型文	にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の透明・黄・灰白・透明光沢粒を含む	黒炭
69	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	山形押型文	ナデ	にぶい黄	黄褐	2mm以下の白・灰・赤褐・透明光沢粒を含む	
70	縄文土器 深鉢	口縁部	表段	山形押型文	山形押型文	にぶい黄	明赤褐	3.5mm以下の白色透明粒。2mm以下の白・灰・褐色粒・透明光沢粒を含む	
71	縄文土器 深鉢	胴部	V層中	山形押型文	山形押型文・横方向のナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	3mm以下の白色・褐色透明粒を含む	
72	縄文土器 深鉢	口縁部 (口唇部付近)	V層中	山形押型文	ナデ(工具痕?)	灰黄褐	暗灰褐	2~5mm程の黄緑粒。1mm以下の透明光沢・透明黄緑粒を含む	
73	縄文土器 深鉢	胴部	IV層中	山形押型文	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	4mm程の白色透明粒。2.5mm以下の褐色粒・透明光沢・無色透明光沢粒を含む	
74	縄文土器 深鉢	胴部	V層中	山形押型文	ナデ	明赤褐	明赤褐	3mm以下の白色・褐色透明光沢粒を含む	
75	縄文土器 深鉢	胴部	V層中	山形押型文	ナデ・一部工具痕	にぶい黄緑	浅黄	3~5mm程度の白・褐色粒・2mm以下の褐色粒・透明光沢・白色半透明粒を含む	
76	縄文土器 深鉢	胴部	IX層中	山形押型文	ナデ(不定方向の工具痕)	黄褐	にぶい黄緑	4mm以下の白色・黄・褐色粒・透明光沢・褐色透明光沢粒を含む	スス付録
77	縄文土器 深鉢	胴部	V層中	山形押型文	割傷により観察不明	にぶい黄緑	にぶい黄	5mm以下ににぶい黄緑・灰白・透明粒。1mm以下の金色光沢粒を含む	黒炭
78	縄文土器 深鉢	胴部	IX層中	山形押型文	ナデ(横と斜方向の工具痕)	橙	黄灰	2mm以下の褐色粒・透明光沢・白色透明・白色を含む	
79	縄文土器 深鉢	胴部	V層中	山形押型文	ナデ・指ナデ	橙	灰	3mm以下の褐色粒・透明光沢・白色透明・白色を含む	黒炭
80	縄文土器 深鉢	胴部	IV層中	山形押型文	横方向のナデ(工具痕の可能性がある)	にぶい黄	にぶい黄緑	3~5mm以下の灰・灰黄・にぶい黄緑粒。1mm以下の灰白・黄・金色光沢粒を含む	スス付録
81	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	山形押型文	ナデ・指ナデ	明赤	にぶい黄	2mm以下の透明・灰白・黄緑粒。1mm以下の金色光沢粒を含む	
82	縄文土器 深鉢	口縁部	トレンチ	ナデの後に横方向の原形器文(意味不明)	口唇部に縦方向の原形器文・横方向の原形器文(意味不明)	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の灰白・黄・にぶい黄緑・透明粒を含む	
83	縄文土器 深鉢	口縁部	S C 4	横方向のナデの痕跡に横方向の原形器文(意味不明)	口唇部に縦方向の原形器文・横方向の原形器文(意味不明)	黄	黄	1mm以下の透明・黄緑粒を含む	
84	縄文土器 深鉢	口縁部	S C 6	ナデの後に横方向の原形器文(意味不明)	口唇部に縦方向の原形器文・横方向の原形器文(意味不明)	にぶい黄	にぶい黄緑	1mm以下の黄緑・黄・灰粒を含む	
85	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	ナデの後に横方向の原形器文(意味不明)	口唇部に縦方向の原形器文・横方向の原形器文(意味不明)	にぶい赤褐	にぶい赤褐	3mm以下の黄緑粒。1mm以下の黄緑粒を含む	
86	縄文土器 深鉢	口縁部	IV層中	横方向のナデの痕跡に横方向の原形器文(意味不明)	口唇部に横方向の原形器文(意味不明)	暗赤褐	にぶい赤褐	1.5mm以下の透明・金色光沢・灰白・黄緑粒を含む	
87	縄文土器 深鉢	口縁部	IX層中	横方向の原形器文(意味不明)	横方向の原形器文(意味不明)・ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の黄緑・透明光沢粒を含む	
88	縄文土器 深鉢	胴部	V層中	風化しているが、横方向の原形器文(意味不明)	風化しているが横方向の原形器文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の黄緑・透明粒を含む	
89	縄文土器 深鉢	胴部	V層中	横方向の原形器文(意味不明)	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の黄緑・透明・金色光沢粒を含む	
90	縄文土器 深鉢	胴部	IX層中	横方向の原形器文(意味不明)	縦と横方向のナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の黄緑・灰・褐色透明粒を含む	
91	縄文土器 深鉢	胴部	IX層中	横方向の原形器文(意味不明)	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の黄緑・灰・透明粒を含む	
92	縄文土器 深鉢	胴部	IX層中	風化している横方向の原形器文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の黄緑・透明粒を含む	
93	縄文土器 深鉢	胴部	IX層中	風化している横方向の原形器文	ナデ	浅黄緑	黄灰	1mm以下の黄緑・透明光沢粒を含む	
94	縄文土器 深鉢	胴部	IX層中	風化している横方向の原形器文	ナデ	黄灰	灰白	2mm以下の黄緑・透明光沢粒を含む	

第4表 出土土器観察表②

番号	種別	器種部位	出土地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
				外面	内面	外面	内面			
95	縄文土器	深鉢	胴部	SC6	裏面している横円形押印文	割漆により磨擦不明	黄赤	黄赤	3~6mm程の灰白・褐色粒, 1mm以下の黄赤透明光沢を含む	
96	縄文土器	深鉢	胴部	胴部	口唇部に縦方向の磨擦条痕・主に横方向のナデ	口唇部に縦方向の磨擦条痕・主に横方向のナデ	黄赤	黄赤	2mm以下の黄色半透明・灰・黒色柱状光沢を含む	口唇部4cm未満
97	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	磨擦する横円形押印文・口唇部はナデ	口唇部に縦方向の磨擦条痕・横円形押印文	灰黄	にぶい黄	4mm以下の黄褐色, 1mm以下の灰白・黄・褐色粒を含む	
98	縄文土器	深鉢	胴部	トロン中	横円形押印文	ナデ	にぶい赤黄	灰黄	1mm以下の透明・黄褐色光沢を含む	
99	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の白・灰・黒色柱状光沢を含む	黒炭
100	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	ナデ	黄	にぶい黄	2~4mmの白色粒, 2mm以下の黄色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒炭
101	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	裏面している横円形押印文	ナデ	にぶい黄	黄褐色	1mm以下の白・黄・赤・透明粒を含む	
102	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文・磨擦さえ	ナデ・磨擦さえ	黄褐色	灰黄	1mm以下の黄色透明・黄褐色・金色光沢粒, 1~4mm程の灰白・黄・黄褐色粒を含む	
103	縄文土器	深鉢	胴部	SC4	横円形押印文	ナデ	黄	黄	2mm以下の白・黒色柱状光沢・無色透明光沢, 6mm程の白色粒を含む	黒炭
104	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文(連続文)	ナデ	明黄	黄	1mm以下の透明・黄・灰白・金色光沢粒, 1~4mm程の灰白・黄褐色粒を含む	
105	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	ナデ(主に縦方向)	にぶい赤黄	にぶい黄	3mm以下の黒・白・黒色柱状光沢を含む	スス付着
106	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に山形押印文・横と斜方向のナデ	にぶい黄	明黄	5mm以下の黄褐色粒, 2mm以下の白・灰・黒色柱状光沢・明褐色を含む	黒炭
107	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に山形押印文・横と斜方向のナデ	にぶい黄	にぶい黄	2.5mm以下の灰白・黒色柱状光沢・白色光沢・褐色粒を含む	スス付着
108	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に山形押印文・横と斜方向のナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の黄褐色粒, 2mm以下の灰白・黒色柱状光沢・透明光沢を含む	
109	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	横と斜方向のナデ	にぶい黄	にぶい黄	6mm以下の灰白・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付着
110	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	主に横方向のナデ	黄	黄	2mm以下の白・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付着
111	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	ナデ(工具痕の可能性)	にぶい黄	黄	4mm以下の白色半透明・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付着
112	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	ナデ	にぶい黄	黄	2.5mm以下の黄褐色・灰白色粒を含む	
113	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	横と斜方向のナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の明黄色粒を含む	
114	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	ナデ・一部磨擦さえ	にぶい黄	にぶい黄	1mm程の黒色光沢を含む	スス付着
115	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	口唇部に横円形押印文・縦方向のナデ・磨擦さえ	明黄	明黄	3mm以下の灰・白・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒炭
116	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に横円形押印文・ナデ	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の黒・褐色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付着
117	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に横円形押印文・ナデ	赤黄	明赤	3mm以下の白・黒・褐色柱状光沢を含む	黒炭
118	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に横円形押印文・ナデ	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の白・白色半透明・黒色柱状光沢を含む	スス付着
119	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	口唇部に横円形押印文	にぶい黄	明黄	1mm以下の黄色柱状光沢・無色透明光沢, 3mm以下の白色粒を含む	黒炭
120	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に横円形押印文	明黄	明黄	3mm以下の灰・白・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒炭
121	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に横円形押印文・ナデ	黄	にぶい黄	1mm以下の白・黄・黒色柱状光沢を含む	
122	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	口唇部に横円形押印文・ナデ	黄	黄	2mm以下の白・無色半透明・黒色柱状光沢を含む	
123	縄文土器	深鉢	胴部	表注	横円形押印文・大部分が剥落	口唇部に原形条痕(縦方向)・ナデ	明黄	明黄	6mm程の白色粒, 4mm以下の黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒炭
124	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	口唇部に原形条痕(縦方向)	黄	黄	2.5mm以下の白・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒炭
125	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	口唇部に原形条痕(縦方向)	明黄	明黄	1.5mm以下の白色半透明・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒炭
126	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	口唇部に原形条痕(縦方向)	明黄	明黄	1mm以下の白色粒を含む	
127	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	横方向のナデ(工具痕の可能性)	黄	黄	5mm以下の灰白粒, 2.5mm以下の黒色柱状光沢, 1mm以下の白色光沢・赤褐色粒を含む	
128	縄文土器	深鉢	胴部	V層中	横円形押印文	横方向のナデ(工具使用)	にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の半透明・明赤褐色粒を含む	
129	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	横方向のナデ(工具使用)	にぶい黄	にぶい黄	1cm程の灰白粒, 1mm程の灰白・黄・赤・褐色粒を含む	黒炭
130	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	横方向のナデ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の灰・黄褐色粒, 3mm以下の黒色光沢を含む	
131	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	横方向のナデ(工具痕の可能性)	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の灰褐色, 1mm以下の黄褐色を含む	
132	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層中	横円形押印文	不定方向のナデ(主に斜方向)	にぶい黄	黄	1mm以下の黄・透明・黒色粒を含む	スス付着
133	縄文土器	深鉢	底面付近	Ⅲ層中	横円形押印文・底面付近は押印文定義の後にナデ	横方向のナデ(工具使用か?)	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の白色・赤褐色粒, 2mm以下の黒色柱状光沢・無色透明・黄褐色粒を含む	
134	縄文土器	深鉢	底面付近	Ⅲ層中	横円形押印文・近い横方向のナデ	ナデ	にぶい黄	黄	5mm以下の灰褐色・にぶい黄褐色, 1mm以下の半透明・無色透明光沢を含む	スス付着

第5表 出土土器観察表③

番号	種別	器種 部位	出土 地点	手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考	
				外 面	内 面	外 面	内 面			
135	陶文土器	深鉢	高野町 江	埋藏中	海門形押型文	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	5mm以下の黄褐色・3mm以下の白色半透明, 1mm以下の黒色柱状光沢を含む	
136	陶文土器	深鉢	江原町	V層中	ナデの後押し形押型文	斜方向の隠体条痕	にぶい緑	にぶい黄	5mm以下の灰色・2mm以下の黒・灰白・黄褐色・黒色柱状光沢・透明光沢を含む	
137	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	海門形押型文	斜方向の隠体条痕	にぶい赤黒	にぶい赤黒	1mm以下の黒色柱状・無色半透明	スス付
138	陶文土器	深鉢	新 部	IV層中	海門形押型文	斜方向の隠体条痕	黒	明赤黒	2mm以下の白・透明・褐色の粒を含む	
139	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	ナデの後押し形押型文	斜方向の隠体条痕	にぶい赤黒	にぶい黒	5mm以下の白色・3mm以下の黄褐色・黒色柱状光沢・透明光沢を含む	
140	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	斜方向の隠体条痕・穿孔	口唇部に縦方向の隠体条痕・横と斜方向のナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	1mm以下の灰白・黒色光沢を含む	スス付
141	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	斜方向の隠体条痕	口唇部に縦方向の隠体条痕・横と斜方向のナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	2mm以下の黒色光沢を含む	スス付
142	陶文土器	深鉢	新 部	トレンチ中	横と斜方向の隠体条痕	斜方向のナデ	黒	黒黒	1mm以下の黒色光沢を含む	黒染
143	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	口唇部に縦方向の隠体条痕・横方向のナデ	口唇部に縦方向の隠体条痕・横方向のナデ	にぶい黒	にぶい黒	5mm以下の黒・褐色・透明光沢を含む	
144	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	棒状押型文	ナデ	黒	にぶい黒	3mm以下の黒・褐色・透明光沢を含む	
145	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	棒状押型文	横方向のナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	3mm以下の乳白・赤褐色を含む	
146	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	調整不明(棒の黒状押型文)	調整不明(棒の黒状押型文)	にぶい赤黒	にぶい赤黒	4mm以下の灰色・2mm以下の灰白・黒・透明光沢を含む	
147	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	調整不明(棒の黒状押型文)	調整不明(棒の黒状押型文)	にぶい赤黒	にぶい赤黒	5mm以下の灰白色・2mm以下の黒色柱状光沢・透明光沢を含む	
148	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	調整不明(棒の黒状押型文)	調整不明(棒の黒状押型文)	にぶい赤黒	にぶい赤黒	3mm以下の乳白・黒色柱状光沢・透明光沢を含む	
149	陶文土器	深鉢	新 部	V層中	調整不明(棒の黒状押型文)	調整不明(棒の黒状押型文)	明赤黒	にぶい赤黒	3mm以下の乳白・黒光沢・透明光沢を含む	
150	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	口唇部に縦方向の山形押型文・ナデ	口唇部に縦方向の山形押型文・ナデ	黒黒	黒黒	2mm以下の黒・白・黒色柱状光沢・透明光沢を含む	
151	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	海門形押型文	ナデ	明赤黒	明赤黒	2mm以下の白・黒色柱状光沢・透明光沢を含む	
152	陶文土器	深鉢	新 部	V層中	海門形押型文	不定方向のナデ(主に横方向)	黄黒	黄黒	3mm以下の褐色・1mm以下の灰白・灰白・透明光沢・褐色光沢を含む	
153	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	掘削工具による縦方向の凹状のナデ	ナデ・指痕あり	にぶい黒	にぶい黄緑	2mm以下の赤・赤黒・灰白・黒・黒光沢・透明光沢を含む	
154	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	縦方向の山形押型文	不定方向のナデ	黒	黒	2mm以下の白・黒色柱状光沢を含む	
155	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	横と斜方向のナデ(一部トレンチ)	横方向のナデ・指痕	灰黄黒	にぶい黄緑	3mm以下の赤・赤黒・灰白・黒・黒光沢・透明光沢を含む	
156	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	横と斜方向のナデ・指痕あり	横方向のナデ・指痕あり	にぶい黄緑	にぶい黄緑	3mm以下の灰白・黒・黒色柱状光沢・無色光沢を含む	
157	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	不定方向のナデ・穿孔	横と縦方向のナデ	にぶい黒	にぶい黄緑	2mm以下の白・明赤・黄緑・無色透明・褐色柱状光沢を含む	
158	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	横と不定方向のナデ・凹凸痕著しい	横と不定方向のナデ・凹凸痕著しい	黒	黒	1mm以下の灰白色・3mm以下の灰白・黄褐色・黒色柱状光沢・黒色光沢を含む	スス付
159	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	横と縦方向のナデ	横と縦方向のナデ	明赤黒	明赤黒	4mm以下の褐色・2mm以下の灰・灰白・赤褐色・黒・褐色柱状光沢・無色光沢を含む	スス付
160	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	工具によるナデ・凹凸著しい	横と斜方向のナデ(主に横方向)	黒	黒	5mm以下の黄緑・灰色を含む	
161	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黒	にぶい黒	1mm以下の透明光沢・黒色柱状光沢を含む	
162	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	不定方向のナデ・凹凸著しい	不定方向のナデ・凹凸著しい	黒	にぶい黄緑	6mm以下の灰色・3mm以下の白・黄褐色・黒・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	
163	陶文土器	深鉢	川島町	埋藏中	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黒	にぶい黒	3mm以下の黄緑・褐色・灰・白色・透明光沢を含む	
164	陶文土器	深鉢	新 部	埋藏中	不定方向のナデ(凹凸痕あり)	黒化しているが、不定方向のナデ(凹凸痕あり)	にぶい赤黒	にぶい黒	3-5mmの白・黄褐色・灰白色・3mm以下の黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	
417	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	横方向のミガキ(幅2cm)	横方向のミガキ(幅3cm)	黒	黒	1mm以下の灰白・無色透明光沢を含む	
418	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	ミガキ(主に横方向・単位不明)	ミガキ(主に横方向・単位不明)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	1mm以下の褐色を帯びる	スス付
419	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	ミガキ(主に横方向・単位不明)	ミガキ(主に横方向・単位不明)	明赤黒	明赤黒	2mm以下の褐色を帯びる	スス付
420	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	横方向のミガキ(幅2cm)	横方向のミガキ	黒	黒	1mm以下の灰白・透明光沢を帯びる	スス付
421	陶文土器	浅鉢	川島町	V層中	ミガキ(主に横方向・単位不明)	黒化著しいが、ミガキであると考えられる	黒	黒	1mm以下の褐色・黄褐色を帯びる	
422	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	横方向のナデ	主に赤褐色を残す横方向のナデ	にぶい赤黒	にぶい黒	1mm以下の透明・褐色・灰白を含む	
423	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	横方向のナデ	横方向のナデ	黒	黒	1mm以下の透明・褐色柱状光沢を含む	
424	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	ミガキ	横方向のミガキ(幅2cm)	灰黄黒	オレンジ黒	1mm以下の透明光沢を含む	
425	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	横方向のミガキ(幅2cm)	横方向のミガキ(幅2cm)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	横断により構成されている	
426	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	横方向のミガキ(幅2cm)	横方向のミガキ	にぶい赤黒	にぶい赤黒	0.5mm以下の灰白・黄緑・透明光沢を含む	
427	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	横方向のミガキ(幅2cm)	横方向のミガキ	黒	黒	0.5mm以下の透明光沢を含む	
428	陶文土器	浅鉢	川島町	埋藏中	横方向のミガキ(幅2cm)	横方向のミガキ(幅2cm)	黒	黒	0.5mm以下の透明光沢を含む	

第6表 出土土器観察表⑥

番号	種別	器種部位	出土地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
429	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦屑中	風化しているが、横方向のミガキ	横方向のミガキ(縦2cm)	暗赤褐色	暗赤褐色	0.5mm以下の深黄・透明光沢を含む	
430	縄文土器 洗鉢	胴部～腹部	瓦屑中	丁寧なナデ	ナデ	黄	灰褐色	2mm以下の黒色光沢・浅黄・透明光沢を含む	
431	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦屑中	主に横・斜方向のミガキ	主に横方向のミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	0.5mm以下の暗・無色透明光沢を含む	
432	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦・瓦屑中	風化しているが、ミガキ(単位不明)	風化しているが、横方向のミガキ(単位不明)	にぶい黄	黒	1mm以下のにぶい褐色を含む	
433	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦屑中	主に斜方向のミガキ(単位不明)・穿孔	主に斜方向のミガキ(単位不明)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	0.5mm以下の暗・無色透明光沢を含む	
434	縄文土器 小型洗鉢	胴部(底面付)	瓦屑中	風化しているが、ミガキ(単位不明)	風化しているが、ミガキ(単位不明)	黄	黒	0.5mm以下の無色透明光沢を含む	
435	縄文土器 洗鉢	口縁～胴部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向の条痕	主に横方向のナデ	明褐色	明褐色	4mm程度の黒・灰色柱状・白・黄褐色、1mm以下の黒色透明光沢を含む	口縁30cmスス付
436	縄文土器 洗鉢	口縁～胴部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向の条痕のあとと横方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄褐色	暗褐色	3mm程度の灰赤・灰白・褐色粒、2mm以下の黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒染
437	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向のナデ	主に横方向のナデ	黄褐色	黄褐色	3mm以下の白色粒、2mm以下の黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付前
438	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向のナデ	横方向の工具によるナデ	明赤褐色	明赤褐色	5mm程度の茶褐色、2mm以下の白・褐色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付前
439	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向の条痕のあとと横方向のナデ	横方向のナデ	赤褐色	赤褐色	2mm以下の白・褐色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒染
440	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向の条痕のあとと横方向のナデ	ナデ	黄	黄	4mm程度の灰色粒、2mm以下の黒色柱状光沢・無色透明光沢・灰白・明褐色を含む	スス付前
441	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向の条痕のあとと横方向のナデ・穿孔	ナデ	黄	明褐色	3mm程度の灰白色粒、2mm以下の白・褐色柱状光沢・透明光沢・明黄・褐色を含む	
442	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・工具による横方向のナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	2mm以下の赤・白・黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付前
443	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・工具による横方向のナデ	風化しているが、おそろくナデ	黄褐色	明黄褐色	1cm程度の灰白・褐色粒、2mm以下の灰・黒・褐色柱状光沢・無色透明光沢を含む	
444	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向のナデ	風化しているが、おそろくナデ	明赤褐色	黄	3mm程度の灰色粒、2mm以下の白・褐色柱状光沢・無色透明光沢を含む	
445	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向のナデ	主に横方向のナデ	明褐色	黄褐色	4mm程度の暗・褐色粒、2mm以下の黒色柱状光沢・無色透明光沢・灰白・明褐色を含む	黒染
446	縄文土器 洗鉢	口縁付～胴部	瓦屑中	無刻目突帯・押さえ・横方向の条痕のあとと横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄	にぶい黄	5～6mm程度の灰赤・赤褐色・黄褐色、2mm以下の灰白・褐色粒・無色透明光沢を含む	スス付前
447	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦屑中	斜方向の条痕のちにナデ	風化しているがナデであると考えられる	黄	にぶい黄	5mm程度の黄白・灰白・灰・褐色粒、2mm以下の褐色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付前
448	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦屑中	横方向のナデ・斜方向の斜い条痕のあととナデ	斜方向の「車」なナデ	黄	黄	3mm程度の灰白色粒、2mm以下の黄・灰・褐色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒染
449	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦屑中	斜方向の条痕	横方向のナデ	にぶい黄	暗灰褐色	3mm以下の灰白・黄白・褐色粒、1mm以下の黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	スス付前
450	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦屑中	斜と横方向に短いナデ・調整が粗いため設置の凹凸が顕しい	横と斜接方向のナデ	にぶい黄	黒褐色	4mm以下の黒灰・にぶい黄褐色を含む	底径10.1cm黒染
451	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	斜方向のナデのちにナデ	斜線回りが多い丁寧なナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3～6mmの灰赤・黄褐色粒、3mm以下の黄白・灰白・灰・黄・褐色柱状光沢・無色透明光沢を含む	
452	縄文土器 洗鉢	口縁部	瓦屑中	斜方向の丁寧なナデ(ミガキの可能性)	斜方向の丁寧なナデ(ミガキの可能性)	にぶい赤褐色	灰褐色	4～6mmの赤褐色・灰白・褐色粒、2mm以下の褐色柱状光沢を含む	黒染
453	縄文土器 洗鉢	胴部	瓦屑中	斜方向のナデ	工具による斜方向のナデ・横方向のナデ	にぶい黄	黄	5mm程度のにぶい黄褐色、4mm以下の黄白・灰白・褐色粒、2mm以下の黒色柱状光沢・無色透明光沢を含む	黒染
454	弥生土器 甕	口縁部～胴部	瓦屑中	口縁部は横ナデ・口縁部下に縦溝・肩1条・横溝1条の動付突帯(文字突帯)・横と横方向の丁寧なナデ	ナデの一部ケズリあり	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	5mm以下の黒灰・にぶい黄褐色・黄褐色を含む	口縁31.4cm
455	弥生土器 甕	口縁部	瓦屑中	5条の縦線波状ナデ	工具による横と斜方向のナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下のにぶい黄褐色・褐色粒を含む	

第7表 出土土器観察表⑤



①阿蘇原上遺跡遠景



①調査区全景（第Ⅶ層上面検出時）



①第Ⅶ層上面検出状況



②第Ⅷ層上面検出状況



③S I 2 検出状況(北東側から)



④S I 3 検出状況(南西側から)

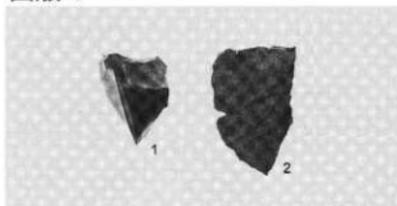


⑤S I 1 検出状況(調査区北壁を背景に)

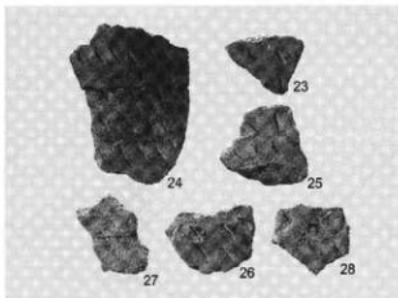


⑥第Ⅶ～Ⅹ層遺物出土状況(調査区東側)

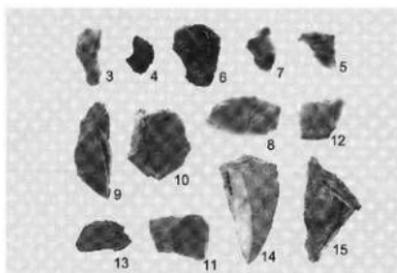
図版4



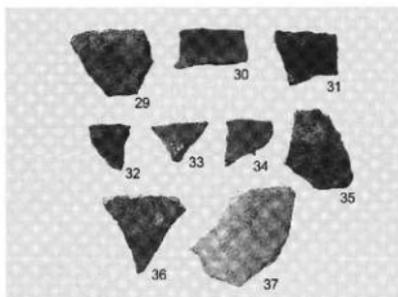
①第XI層出土細石刃核と土器(I B類)



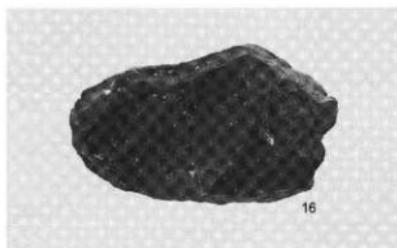
⑤第VII～X層出土土器(I A類)



②第XI・第XII層出土石器



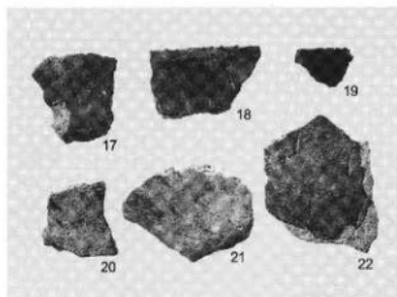
⑥第VII～X層出土土器(I B類)



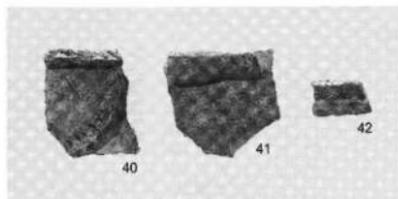
③第XII層出土石器(石核)



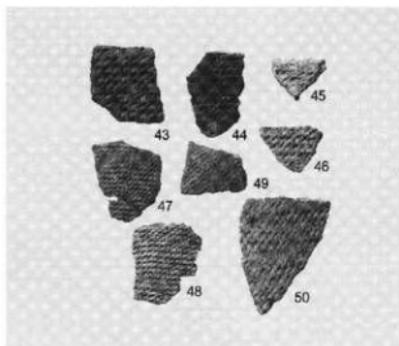
⑦第VII～X層出土土器(I B類)



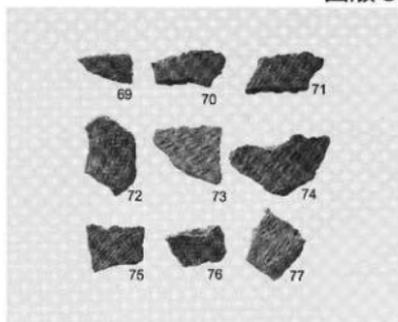
④第XI～X層出土土器(I A類)



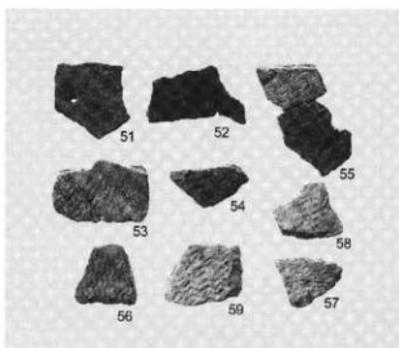
⑧第VII～X層出土土器(I C類)



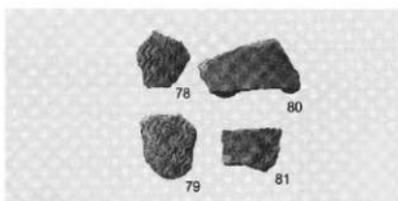
①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡA1類)



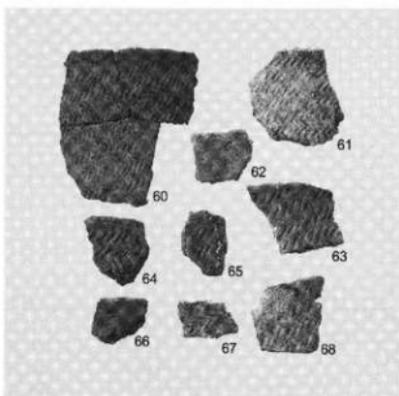
④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡA4類)



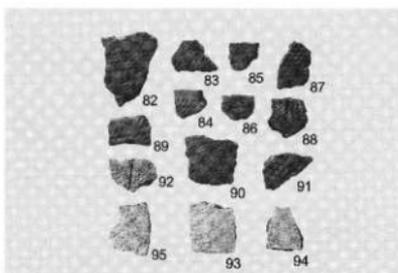
②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡA2・ⅡA3類)



⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡA5類)



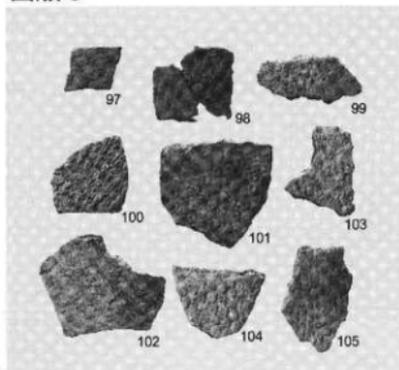
③第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡA4類)



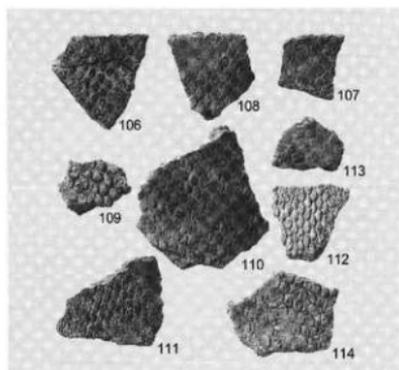
⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡB1・B2類)



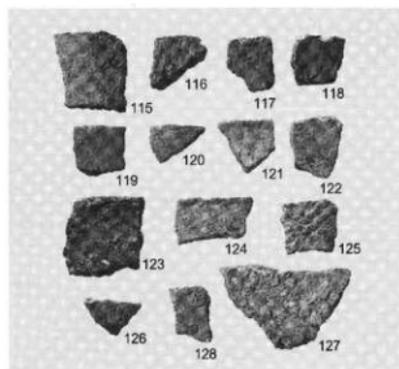
⑦第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡB3類)



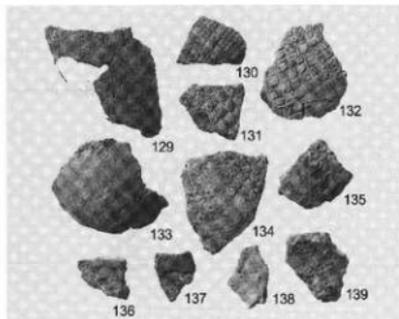
①第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡB3類)



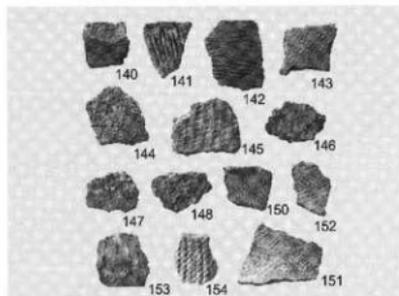
②第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡB4類)



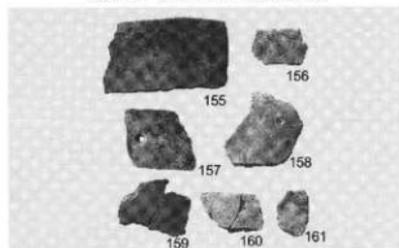
④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡB4・ⅡB5類)



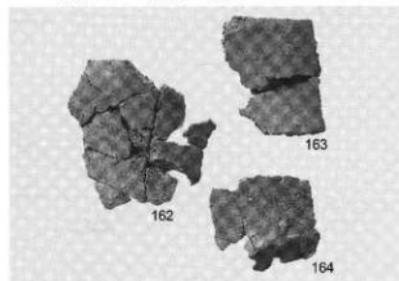
④第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡB6類)



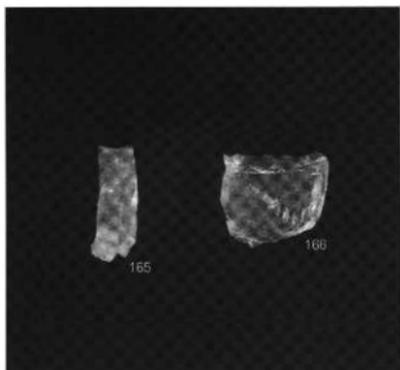
⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡC類)



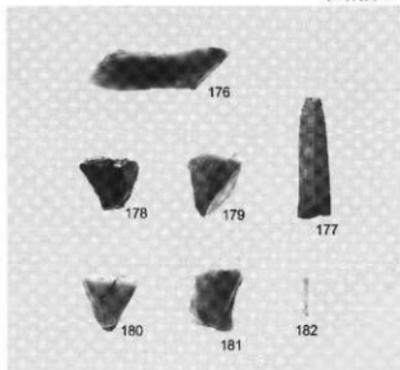
⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅡD1・ⅡD2類)



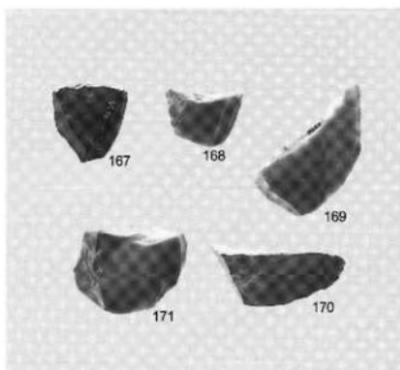
⑦第Ⅶ～Ⅹ層出土土器(ⅠD3類)



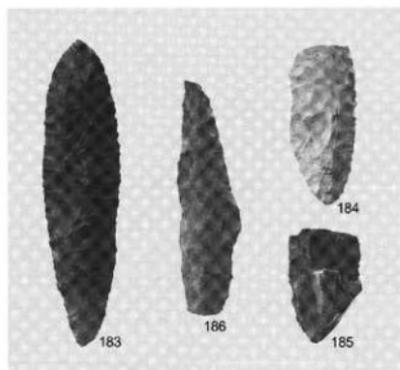
①第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(細石刃核①)



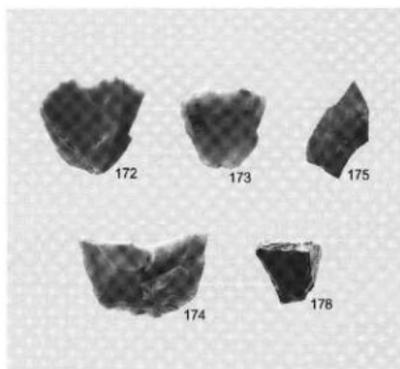
④第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(細石刃核④・細石刃)



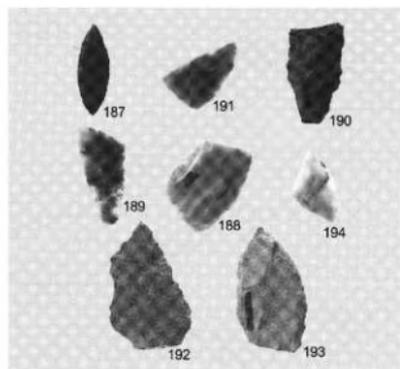
②第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(細石刃核②)



⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(尖頭器①)

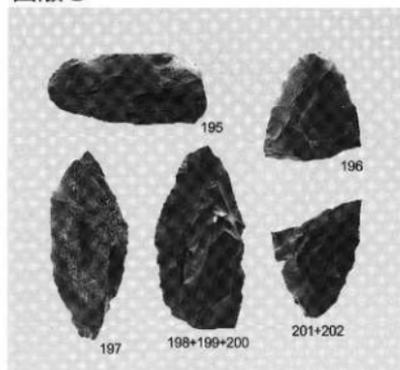


③第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(細石刃核③)

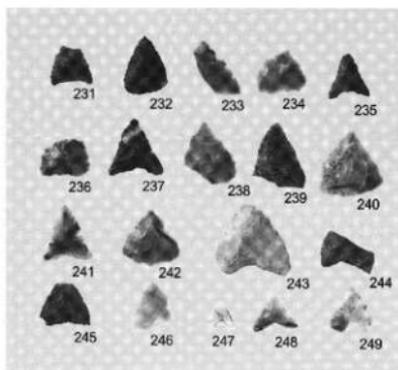


⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(尖頭器②)

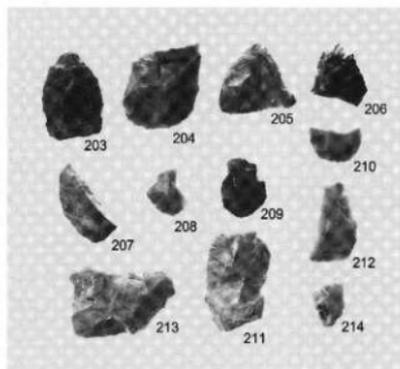
图版8



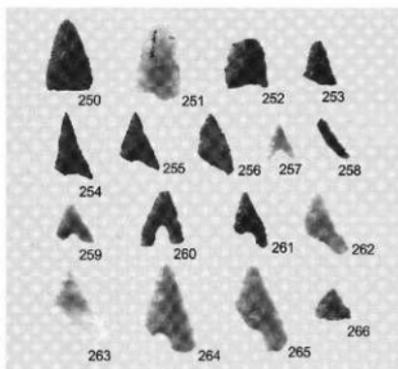
①第Ⅶ~Ⅹ層出土石器(両面調整石器①)



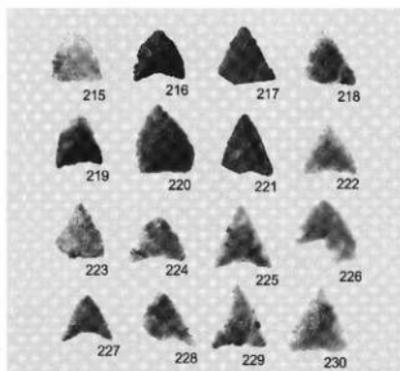
④第Ⅶ~Ⅹ層出土石器(石鏃②)



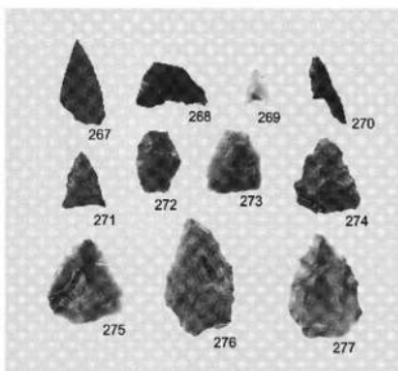
②第Ⅶ~Ⅹ層出土石器(両面調整石器②)



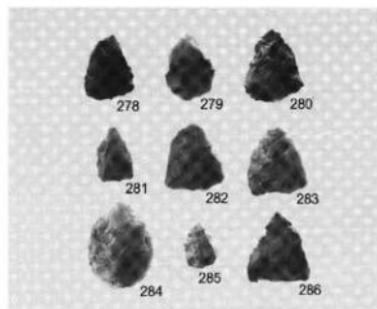
⑤第Ⅶ~Ⅹ層出土石器(石鏃③)



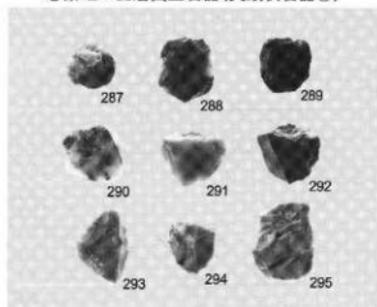
③第Ⅶ~Ⅹ層出土石器(石鏃①)



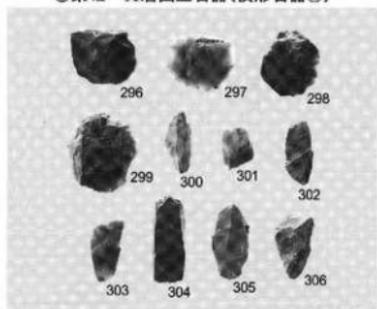
⑥第Ⅶ~Ⅹ層出土石器(石鏃④・尖頭狀石器①)



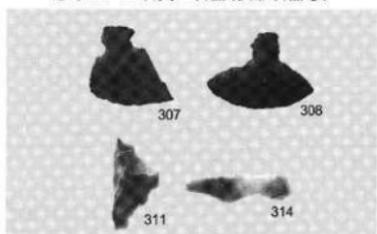
①第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(尖頭状石器②)



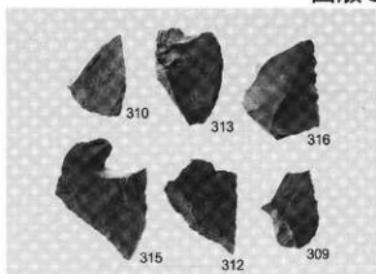
②第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(楔形石器①)



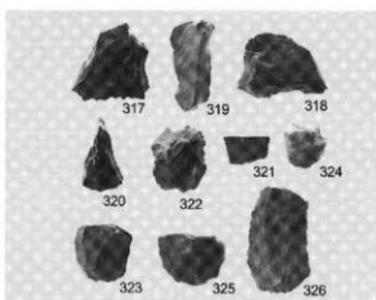
③第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(楔形石器②)



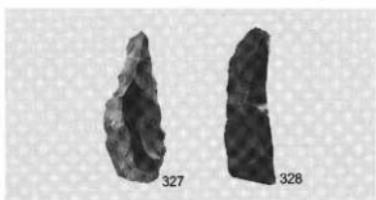
④第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(石匙・削器①)



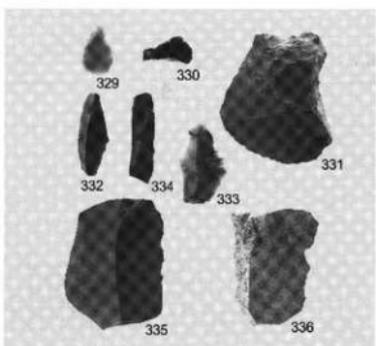
⑤第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(削器②)



⑥第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(削器③・掻削器)

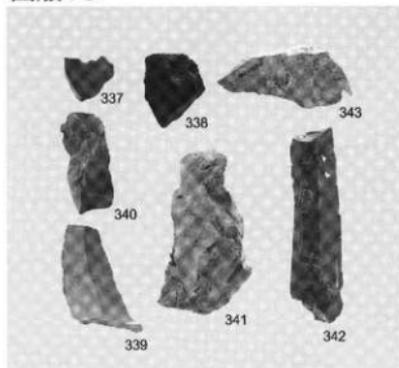


⑦第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(彫器)

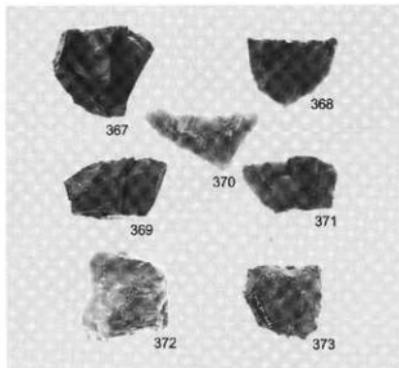


⑧第Ⅶ～Ⅹ層出土石器(二次加工有る剥片)

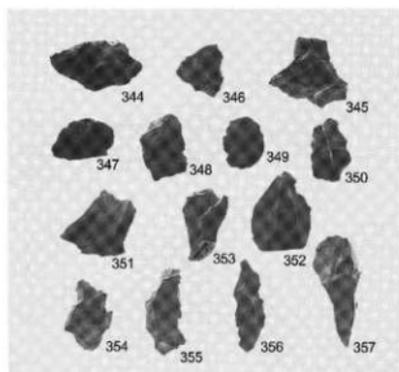
图版10



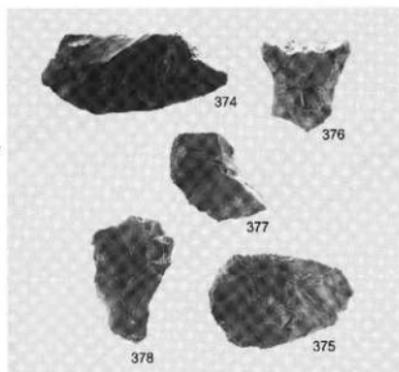
①第Ⅶ～Ⅹ层出土石器(剥片①)



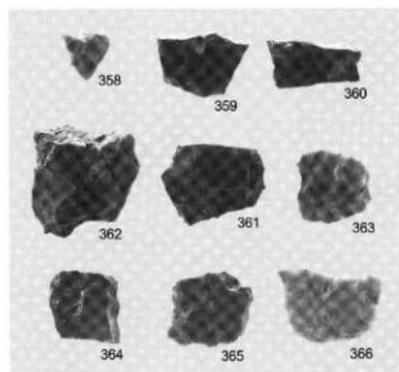
④第Ⅶ～Ⅹ层出土石器(石核②)



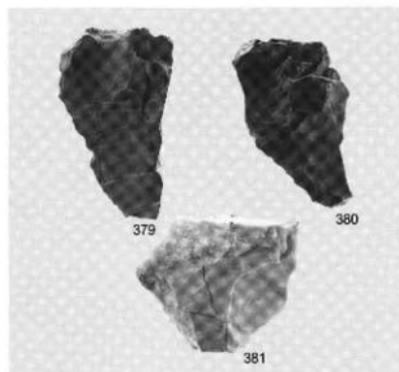
②第Ⅶ～Ⅹ层出土石器(剥片②)



⑤第Ⅶ～Ⅹ层出土石器(石核③)



③第Ⅶ～Ⅹ层出土石器(石核①)



⑥第Ⅶ～Ⅹ层出土石器(石核④)